

第一節 告訴及 告發 自第九十三條至第九十九條

第二節 現行犯罪 自第一百條至第一百六條

第二章 起訴 自第一百七條至第一百二十二條

第一節 檢察官ノ起訴 自第一百七條至第一百九條

第二節 民事原告人ノ起訴 自第一百十條至第一百十二條

第三章 豫審 自第一百三十三條至第一百三十三條

第一節 令狀 自第一百十八條至第一百四十二條

第二節 密室監禁 自第一百四十三條至第一百四十五條

第三節 證據 自第一百四十六條至第一百四十八條

第四節 被告人ノ訊問及 對質 自第一百四十九條至第一百五十七條

第五節 檢證及 物件差押 自第一百五十八條至第一百六十九條

第六節 證人訊問 自第一百七十條至第一百九十條

第七節 鑑定 自第一百九十一條至第一百條

第八節 現行犯ノ豫審 自第二百零一條至第二百零九條

第九節 保釋 自第二百零十條至第二百零九條

第十節 豫審終結 自第二百零二十條至第二百零三十三條

第四章 豫審上訴 自第二百零三十四條至第二百零六十一條

第四編 公判

第一章 通則 自第二百六十二條至第三百二十條

第二章 違警罪公判 自第三百二十一條至第三百四十六條

第三章 輕罪公判 自第三百四十七條至第三百七十一條

第四章 重罪公判 自第三百七十二條至第四百九條

大審院ノ職務

告 自第四百十條至第四百三十八條

第四章

裁判管轄ヲ定ムルノ訴自第四百三十九條至第四百四十七條

公安又ハ嫌疑ノ爲メ裁判管轄ヲ移スノ訴自第四百五十一條至第四百五十八條

第六編 裁判執行復權及ヒ特赦

第一章 裁判執行 自第四百五十九條至第四百六十九條

第二章 復權 自第四百七十條至第四百七十六條

第三章 特赦 自第四百七十七條至第四百八十七條

治罪法ハ公法ノ一ナリ至善ナル刑法アリト雖モ治罪法ナケレハ犯人ヲ罰シ良民ヲ護シ以テ公安ヲ保ツコト得ス刑法ニ於テハ刑名刑例及ヒ罰ノ可キノ罪ヲ定ム治罪法ニ於テハ其罪ヲ證明スルニヨリ刑ヲ適用スルニ至ルマテノ手續ヲ定ム即チ刑事訴訟法ト稱シテ可ナリ

治罪法

第一編 總則

第一條 公訴ハ犯罪ヲ證明シ刑ヲ適用スルヲ目的トスル者ニシテ法律ニ定メタル區別

ニ從ヒ檢察官之ヲ行フ 三三三、三四、五一、五八、六六、四七、八〇、八七、一〇七、三

二一、三二、七、三七、三

第二條 私訴ハ犯罪ニ因リ生シタル損害ノ賠償贖物ノ返還ヲ目的トスル者ニシテ民法ニ

從ヒ被害者ニ屬ス

第三條 公訴ハ被害者ノ告訴ヲ待テ起ル者ニ

從ヒ被害者ニ屬ス

第三條 公訴ハ被害者ノ告訴ヲ待テ起ル者ニ

總則トハ此法ノ總體ニ通用ス可キ規則ト云フノ意ニシテ第一編中ニハ治罪ニ關スル原則及ヒ書類ヲ作り若クハ送達スルノ方法ヲ定ム

第一條 公訴ハ犯罪ノ訴ニシテ犯罪アリタルノ證據ヲ擧ケテ其犯人ニ對シ刑ヲ當テントヲ求ムル者ナリ此訴ヲ爲スノ權ハ社會ニ屬ス檢察官ハ社會ニ代リテ之ヲ行フ

檢察官トハ檢事長檢事及ヒ連署裁判所ニ於テ公訴ノ事ヲ擔任スル警部ヲ稱ス法律ニ定ムル區

裁判所ノ檢事ノ如ク裁判所ノ異ナルニ從ヒ檢察官モ亦同シカラザルヲ云フ

〔二〕私訴ハ民事ノ訴ナリ犯罪ニ因テ損害ヲ被リ又ハ自己ノ所有物ヲ横取セラレタルヲ以テ賠償ヲ得若クハ其物品ヲ取還サントナ求ムル者ナリ此訴ヲ爲スノ權ハ被害者即チ其所有物ヲ横取セラレ又ハ犯罪ニ因リ損害ヲ受ケタル者ニ屬ス蓋シ直接ノ被害者アリ間接ノ被害者アリ共ニ私訴ヲ爲スノ權アリヤ否ハ民法ニ於テ之ヲ定ム屬ストハ私訴ヲ爲スト否トハ本人ノ隨意ナルヲ云フ

〔三〕告訴トハ被害者ヨリ其事ヲ官ニ申立ルコトヲ云フ公訴ハ此告訴ヲ待テ起ル者ニ非ス檢察官犯罪アリテ知リタル時ハ告訴ノ有無ニ拘ラズ公訴ヲ起ス可シ又告訴若クハ私訴ノ權ヲ棄ルト雖モ

非ス又告訴私訴ノ棄權ニ因テ消滅スル者ニ非ス但法律ニ於テ特ニ定メタル場合ハ此限ニ在ラス

九ノ二、刑三二九、三四四、三五〇、三五三、三六二、四二二、四二六

第四條 私訴ハ其金額ノ多寡ニ拘ハラズ公訴ニ附帶シテ刑事裁判所ニ之ヲ爲スヲ得但法律ニ於テ其裁判所ニ私訴ヲ爲スヲ許サレル場合ハ此限ニ在ラス 一〇以下

又私訴ハ別ニ民事裁判所ニ之ヲ爲スヲ得

第五條 公訴私訴ノ裁判ハ管轄裁判所ニ於テ現ニ施行スル法律ニ定メタル訴訟手續ニ從ヒ之ヲ爲ス可シ 二七

公訴消滅スルコトナリ續キ之ヲ行ハサル可カラズ然レモ法律ニ於テ別段ニ定メタル場合ハ有夫姦謀毀譽追等ノ罪ニ付テハ必ス被害者ノ告訴ヲ要ス故ニ其告訴アルニ非サレテ公訴ヲ起スコトヲ得ス又其告訴ノ棄權アリタル時ハ公訴ヲ止メサル可カラズ

〔四〕通常ノ民事ニ付テハ要債金額ノ多寡ニヨリ裁判所ノ管轄異ナルコトアル可シ例ヘハ何圓以上ハ治安裁判所ニ於テ裁判セサルノ類ナリ然レモ私訴即チ刑事附帶ノ民事ニ付テハ便利ノ爲メ其金額ノ多寡ヲ問ハズ刑事裁判所ニ要債ノ訴ヲ爲スコトヲ許ス但法律ニ於テ之ヲ許サレル場合ハ格別ナリトス

私訴ハ民事ノ訴ナルヲ以テ公訴ニ附帶セズ引別ケテ民事裁判所ニ之ヲ爲スモ被害者ノ隨意ナリ

〔五〕公訴及ヒ私訴ノ裁判ハ其裁判ヲ爲スノ時現ニ行ハル、法律ニ從ヒ管轄ナル裁判所ニ於テ一定ノ訴訟手續ヲ以テ之ヲ爲ス可シ是レ訴訟手續及ヒ管轄ノ規則ハ既往ニ溯ル所以ナリ

〔六〕刑事裁判所ニ於テ公訴私訴並起ル時又ハ刑事裁判所ト民事裁判所トニ於テ兩訴共ニ起ル時ハ先ツ公訴ノ裁判ヲ爲シ私訴ノ裁判ヲ後ニス若シ否ラサル時ハ私訴ノ裁判自ラ公訴ノ裁判ニ影響ヲ及ボスノ恐レアリハナリ故ニ私訴ニ付キ賠償返還ノ言渡アリタル後公訴ニ付キ刑ノ言渡アリタル時ハ其裁判ヲ兩ナガシ無効ノ者トス但訴訟關係人上訴シテ其取消ヲ求ムルニ非サレハ裁判法律ニ違フト雖モ當然之ヲ無効トスルコトナシ

第六條 刑事裁判所又ハ刑事裁判所ト民事裁判所トニ於テ公訴私訴並起ル時ハ先ツ私訴ノ裁判ヲ爲ス可カラズ若シ賠償返還ノ言渡アリタル後刑ノ言渡アリタル

〔七〕被害者一旦民事裁判所ニ私訴ヲ爲シタル時ハ濫ニ其訴ヲ刑事裁判所ニ移スヲ得ス必ス檢察官ノ公訴ヲ起スヲ持ツ可シ又最初刑事裁判所ニ出訴シタル時ハ被告人ノ承諾アルニ非サレハ民事裁判所ニ其訴ヲ爲スヲ得ス是レ被害者氣儘ニ訴訟ヲ移シ以テ裁判ヲ延滞シ費用ヲ増シ且ツ徒ラニ時日ヲ費ス等ノ恐アルヲ以テ此制限ヲ設ケタルナリ

〔八〕免訴ノ言渡トハ第二百二十四條第百三十五條等ノ場合ニ於テ言渡ス者ナリ無罪ノ言渡トハ犯罪ノ證據充分ナラサル時又ハ被告事件罪ト爲ラサル

時ハ共ニ其效ナカル可シ

第七條 民事裁判所ニ私訴ヲ爲シタル時ハ檢察官ノ起訴アルニ非サレハ願下ヲ爲シ更ニ

刑事裁判所ニ其訴ヲ爲スヲ得ス

刑事裁判所ニ私訴ヲ爲シタル時ハ被告人ノ承諾ヲ得テ願下ヲ爲シ更ニ民事裁判所ニ其

訴ヲ爲スヲ得

第八條 被告人免訴又ハ無罪ノ言渡ヲ受ケタ

リト雖モ民法ニ從ヒ被害者ヨリ賠償返還ヲ

要ムルノ妨礙ト爲ルヲナカル可シ

第九條 公訴ヲ爲スノ權ハ左ノ條件ニ因テ消滅ス

一 被告人ノ死去

二 告訴ヲ待テ受理ス可キ事件ニ付テハ被害

者ノ棄權又ハ私和

三

時言渡ノ者ナリ是等ノ言渡アリト雖モ被告人ニ過失懈怠アリテ他人ニ損害ヲ及ホシタル所爲アル時ハ之ヲ償フノ責ヲ免カレシムルヲナシ

〔九〕公訴消滅ノ理由六アリ若シ此理由アル時ハ既ニ起リタル公訴ト雖モ消滅スルヲ以テ引續キ其手續ハ爲ス可カラズ

告訴ヲ待テ受理ス可キ事件トハ姦淫毀罵等ノ罪ノ如ク刑法ニ於テ其明文ヲ掲ケタル者ヲ言フ

確定裁判トハ裁判言渡ニ對シ上訴スル者ナシ又ハ上訴ヲ經テ其言渡動カス可カラザルノ效力ヲ生シタル者ヲ云フ

大赦トハ罪ヲ赦シテ其跡ヲ將來ニ留メサル者ヲ云フ單ニ刑罰ヲ免カレシムル特赦ト異ナリ

期滿免除トハ第十一條ニ定メタル期限ヲ經タルニ因リ公訴ヲ受クルノ責ヲ免カレタル者ヲ云フ蓋シ此設アル者ハ年月久キヲ經レハ證據自ラ湮滅シ且ツ世人既ニ犯罪アリタルヲ遺忘スルヲ以テ之ヲ罰スルノ利益アラサレハナリ

三 確定裁判

四 犯罪ノ後頒布シタル法律ニ因リ其刑ノ廢止

五

〔十〕私訴消滅ノ理由ハ公訴ヨリ少シ被告ノ死去スレハ其相續人ニ對シ要償スルヲ得可ク又刑ノ廢止及ヒ大赦アルモ私訴ノ權ヲ奪去ルノ理アラサルナリ

〔十一〕違警罪輕罪重罪ノ區別ハ刑法ニ詳ナリ

〔十二〕無能力者トハ未丁

五六赦

六期滿免除 一以下

第十條 私訴ヲ爲スノ權ハ左ノ條件ニ因テ消滅ス

一 被害者ノ棄權又ハ私和

二 確定裁判

三期滿免除 一二

第十一條 公訴期滿免除ノ期限左ノ如シ

一 違警罪ハ六月

二 輕罪ハ三年

三 重罪ハ十年

第十二條 私訴期滿免除ノ期限ハ被害者無能

年ノ幼者白痴癡癪ノ者及モ治産ノ禁ヲ受ケ者トシテ云フ被害者無能力トシテ自ラ私訴ヲ爲スコト得サル場合ト雖モ刑事附帶ノ民事事ナルヲ以テ私訴ノ期滿免除ノ期限ハ公訴ニ於ケル者ト異ナルコトナシ是レ公訴ノ期滿免除ト爲リタルニ拘ハラズ私訴ヲ爲スコト許ス時ハ被害者既ニ消滅シタル罪惡ヲ鳴ラシテ止マサルノ恐アレハナリ然レモ刑ノ言渡アリタル時ハ其言渡タル即チ有罪ノ確證ナルヲ以テ民法ニ定メタル期滿免除ヲ經サル間ハ私訴ヲ爲スコト得可シ

〔十三〕繼續犯罪トハ擅入ヲ監禁スル罪私兵器

功ナル時又ハ民事裁判所ニ其訴ヲ爲シタル時ト雖モ公訴期滿免除ノ期限ト同一ナリトス

公訴ニ付キ既ニ刑ノ言渡アリタル時ハ民法ニ定メタル期滿免除ノ例ニ從フ

第十三條 公訴私訴期滿免除ノ期限ハ犯罪ノ日ヨリ起算ス但繼續犯罪ニ付テハ其最終ノ日ヨリ起算ス

第十四條

期滿免除ハ刑事裁判所ニ於テ檢察官若クハ民事原告人ヨリ起訴ノ手續ヲ爲シ

又豫審若クハ公判ノ手續アリタルニ因リ其

期限ノ經過ヲ中斷ス其未タ發覺セサル正犯

彈藥ヲ儲藏ナル罪等其
寸時間ニ於テ行ハレ得
サル罪ヲ云フ此罪ニ付テ
ハ其所爲ヲ止メタル日ヨ
リ期滿免除ノ期限ヲ起算
ス

〔十四〕民事原告人トハ被
害者告訴ヲ爲スノ外賠償
ヲ要ム。爲メ別段原告人
ト爲ル可キ申立テ爲シ
タル者ナリ

起訴トハ檢察官公訴ヲ起シ又ハ被害者私訴ヲ爲スヲ云フ
豫審トハ即チ下調キシテ重罪輕罪ノ事件ニ付キ豫メ罪証ノ有無輕重ヲ取調フル者ナリ
期滿免除ノ期限ノ經過ヲ中斷スルノ法ハ既ニ經過シタル日數ヲ除去シ更ニ第十一條ノ
期限ヲ計算スルヲ以テ容易ニ期滿免除ヲ得セシメサル爲メニ設ケタル者トス
正犯從犯ノ區別ハ刑法第百四條以下ニ詳ナリ民事擔當人トハ犯人ニ代リ民事賠償ノ責
ヲ擔當ス可キ者ヲ云フ幼者ノ父母白痴瘋癲人ノ保管者ノ類
中斷ノ場合ニ於テモ第十一條ニ定メタル期限ノ二倍ヲ超過ス可カラストスルハ此中斷
ノ法ヲ行ヒ永シ公訴ノ權ヲ保持スルヲ防ク爲メナリ

從犯及ヒ民事擔當人ニ付テモ亦同シ
期滿免除ノ期限ノ經過ヲ中斷シタル時ハ起
訴豫審又ハ公判ノ手續ヲ止メタル日ヨリ更
ニ其期限ヲ起算ス但前後ノ日數ヲ通算シテ
第十一條ニ定メタル期限ノ二倍ヲ超過ス可
カラズ

第十五條 起訴豫審又ハ公判ノ手續其規則ニ

〔十六〕免訴無罪ト爲ル可
キ者ハ固ヨリ之ヲ訴フ可
カラズ而ルニ被害者ト稱
シテ告訴ヲ爲シ若クハ民
事原告人ト爲リテ私訴ヲ
起シ又犯罪アルヲ知リ
タルト稱シテ告訴ヲ爲シ
タル者アルニ因リ檢察官
ノ爲メニ公訴セラレ遂ニ
損害ヲ被リタル時ハ最初
訴告ヲ爲シタル者ニ對シ
其償ヲ要ムルヲ得但
其者ニ故意若クハ重大ナル
過失アリタル場合ニ限ル

〔十五〕規則ニ背キ無効ト
爲リタル手續ハ中斷ヲ致
ス生ズ可キノ理ナシ然レ
モ管轄ノ下ハ初メヨリ之
ヲ知ルヲ難キヲ以テ管轄
違ニ因リ手續無効ト爲ル
場合ハ格別ナリトス

背キタルニ因リ無効ニ屬スル時ハ期滿免除
ノ期限ノ經過ヲ中斷スルノ效ナカル可シ但
裁判官ノ管轄違ナルニ因リ其手續ノ無効ニ
屬スル時ハ此限ニ在ラス 四一〇
第十六條 被告人免訴又ハ無罪ノ言渡ヲ受ケ
タル場合ニ於テ其訴訟ノ原由告訴人告發人
又ハ民事原告人ノ惡意若クハ重キ過失ニ出
テタル時ハ是等ノ者ニ對シ損害ノ償ヲ要ム
ルヲ得
被告人刑ノ言渡ヲ受ケタリト雖モ告訴人告
發人又ハ民事原告人ヨリ惡意若クハ重キ過
失ニ因リ其犯罪ニ付キ過實ノ申立ヲ爲シタ

可シ其重キ過實ト云フハ
少シク意ヲ用フレハ概シ
事實ノ如何ヲ知ル可キニ
疎漏輕躁ニシテ訴ヲ爲ス
ノ類
過實ノ申立トハ失火ヲ放
火トシ竊盜ヲ強盜トシ過
失殺ヲ故殺ト申立ル等總
テ其事實ニ過クルヲ指
ス

上訴トハ故障控訴上告ノ
總稱ナリ民事原告人爲ス
可カラサルノ上訴ヲ爲シ
因テ被告人ノ勾留ヲ永フ
スル等ノ損害ヲ及ホシタ
ル時ハ之ヲ償フノ責アリ
〔十七〕官吏ハ其職務ヲ以
テ事ヲ執ル者ナリ故ニ過
失アルモ賠償ノ責ニ任セ
シメズ止テ私意ヲ交ヘテ
故サラニ被告人ニ損害ヲ
及ハ陵虐ノ所爲ヲ加ヘ或

ル時亦同シ

民事原告人豫審又ハ公判ノ言渡ニ對シ上訴
ヲ爲シ敗訴シタル時ハ被告人其上訴ニ因リ
生シタル損害ノ償ヲ要ムルヲ得二三四、二三
二五七、三三八、三四六、
三六五、三七一、四〇三

要償ノ訴ハ本案ノ裁判言渡アルマテ何時ニ
テモ其裁判所ニ之ヲ爲スヲ得二二四、

第十七條 被告人無罪ノ言渡ヲ受ケタリト雖
モ裁判官檢察官書記又ハ司法警察官ニ對シ
要償ノ訴ヲ爲スヲ得ス但是等ノ官吏被告
人ニ對シ故意ヲ以テ損害ヲ加ヘ又ハ刑法ニ
定メタル罪ヲ犯シタル場合ハ此限ニ在ラス

刑二七八、二八二、二八三、
二八四、二八六、二八七、

第十八條 此法律ニ於テ期限ヲ計算スルニ時

ヲ以テスル者ハ即時ヨリ起算シ日ヲ以テス
ル者ハ初日ヲ算入セス若シ最終ノ日休暇ニ
當ル時ハ期限ニ算入ス可カラズ但期滿免除
ノ期限ハ此限ニ在ラス一一、二三、

一日ト稱スルハ二十四時ヲ以テシ一月ト稱
スルハ三十日ヲ以テシ一年ト稱スルハ曆ニ
從フ

第十九條 此法律ニ定メタル期限ニハ陸路八
里毎ニ一日ノ猶豫ヲ加フ八里ニ滿サル者ハ
雖モ三里以上ナル時亦同シ

ハ賄賂ヲ收受聽許シテ之
ヲ陷害スル等刑法ニ定メ
タル罪ヲ犯ス時ハ賠償ノ
義務ヲ免カレサルナリ
〔十八〕初日ヲ算入セサル
ハ其日タル必ス既ニ幾分
ヲ經過シタルヲ以テナリ
最終ノ日休暇ナル時ハ亦
期限ニ算入セス是レ公ニ
事ヲ行フ可キ日ニ非サレ
ハナリ期滿免除ノ期限ヲ
以テ例外ニ措クハ被告人
ノ利益ヲ保護スル爲メナ
リ
〔十九〕路程ニ應ジ猶豫ヲ
與フルハ旅行又ハ書類遞
送ノ爲メナリ
島地又ハ外國ニ至ルニハ
必ス海上ヲ航セサルヲ得
ス而シテ其航海ニ定期アル
者アリ又ナキ者アリ此法
律ニ於テ一定シ難シ故ニ

其路程ノ猶豫ハ別段ノ法律ニ讓ル

〔二十〕特別ノ場合トハ第二百五十八條第三百十二條及ヒ第三百十六條ニ定メタル場合ニシテ期限ノ經過ヲ停止シ又ハ既ニ失ヒタル權利ヲ回復スル者ヲ云フ

〔二十一〕訴訟關係人トハ刑事ノ訴訟ニ付キ利害ノ關係アル者即チ檢察官民事原告人被告人民事擔當人ヲ指ス但本條ニハ重モ民事原告人ヲ指ス檢察官ハ決シテ此中ニ在ラス而シテ假住所ヲ定メシムルハ書類送達ニ便スル爲メナリ

島地又ハ外國トノ路程ノ猶豫ハ別ニ法律ヲ以テ之ヲ定ム
第二十條 此法律ニ於テ訴訟ヲ爲スニ付キ定メタル期限ヲ經過シタル時ハ特別ノ場合ヲ除クノ外其權ヲ失フ可シ
第二十一條 訴訟關係人ハ裁判所々在ノ地ニ住セサル時ハ其地ニ假住所ヲ定メ書記局ニ届置ク可シ否ラサル時ハ書類ノ送達ナント雖モ異議ヲ申立ルコトヲ得ス
第二十二條 此法律ニ於テ訴訟關係人ニ書類ヲ送達スルニ付キ別ニ規則アラサル時ハ書記其送達書ヲ作り書記局所屬ノ使丁ヲシテ

監獄ニ巡查之ヲ執行ス書記ハ與ラズ此ノ如ク特別ノ規則アル場合ヲ除キ書記毎ニ送達書ヲ作り送達セシムルノ任アリ凡テ官吏ノ職權ハ其管轄地外ニ及ハス故ニ第二項ノ場合ニ於テハ必ス囑託ヲ爲ス可キ者トス

〔二十三〕本人トシテ何レノ場所ニ於テモ送達ヲ爲スコトヲ得可シト雖モ其同居ノ親屬又ハ雇人ニ付テハ本人ノ住所ニ於テ送達スルノ確實ナラント欲スレハナリ雇人トハ少クトモ一月以上雇使セララル者ニ限ル可シ其日雇ノ如キハ翌日ニ至レハ直チニ本人トシテ關係ヲ絶ツ者ナルヲ以テ

之ヲ送達セシム一三〇
若シ書類ノ送達ヲ受ク可キ者裁判所ノ管轄地外ニ在ル時ハ其地ノ裁判所ノ書記ニ送達ノ事ヲ囑託ス可シ
第二十三條 送達書ハ二通ヲ作り其一通ヲ本人ニ渡ス可シ本人ニ渡スコトヲ得サル時ハ其住所ニ於テ同居ノ親屬又ハ雇人ニ渡ス可シ送達人ハ之ヲ受取タル者ヲシテ其二通ニ署名捺印セシム若シ署名捺印スルコト能ハサル時ハ其旨ヲ附記ス可シ同居ノ親屬又ハ雇人ニ書類ヲ渡スコトヲ得ス若クハ是等ノ者之ヲ受取ルコトヲ肯セサル時

法律ニ於テハ之ニ信ヲ措カズ從テ之ニ書類ヲ渡ス
コトヲ欲セザルナリ
書類ニ署名捺印セシムル
ハ送達シタルコトヲ證スル
爲メナリ

〔二十四〕休暇ノ日ハ公ニ
事ヲ行フ可キ日ニ非ス且
人多ク其住所ニ在ラザル
ナリ又日出前日没後ハ人
ノ休息スル時ナリ故ニ并

ハ其地ノ戸長ニ渡置キ戸長ハ其書類ニ認印
シ速ニ本人ニ送達スルノ處分ヲ爲スコシ
送達人ハ書類ヲ受取リタル者ノ氏名場所及
ヒ日時ヲ其二通ニ記載ス可シ
本條ノ規則ニ背キタル時ハ書類送達ノ效ナ
カル可シ
送達人ハ其一通ヲ書記局ニ還納シ書記局
ニ於テハ送達ノ證トシテ之ヲ保存ス可シ
七
第二十四條 休暇ノ日及ヒ日出前日没後ハ書
類ノ送達ヲ爲スコカラズ此規則ニ背キタル
時ハ其送達ノ效ナカル可シ但本人承諾シテ

ニ送達ヲ爲スコカラズ
〔二十五〕官印ヲ捺スルハ
大ニ書類ノ真正ナルコトヲ
保スルカ爲メナリ故ニ臨
檢等ノ官印ヲ用フルコト能
ハサル場合ヲ除キ必ス之
ヲ捺セシム官吏ニ非サル
者ノ作ル可キ書類トハ告
訴狀告發狀鑑定人ノ申立
書等ヲ云フ

〔二十六〕文字ノ改竄トハ

其送達ヲ受ケタル時ハ此限ニ在ラス
第二十五條 官吏ノ作ル可キ書類ハ其所属官
署ノ印ヲ用ヒ年月日及ヒ場所ヲ記載シテ署
名捺印シ每葉ニ契印ス可シ若シ官署ノ印ヲ
用フルコト能ハサル場合ニ於テハ其事由ヲ記
載ス可シ此規則ニ背キタル時ハ其書類ノ效
ナカル可シ
官吏ニ非サル者ノ作ル可キ書類ニハ本人自
ラ署名捺印ス可シ若シ署名捺印スルコト能ハ
サル時ハ官吏ノ面前ニ於テ作りタル場合ヲ
除クノ外立會人代署シ其事由ヲ記載ス可シ
第二十六條 官吏其他何人ニ限ラス訴訟ニ關

文字ヲ誤書シタル場合ニ於テ強テ其字畫ヲ改更スルヲ云フ是レ法律ノ禁スル所ナリ若シ誤脱シタル時ハ文字ノ中間ニ挿入シ誤書シタル時ハ之ヲ削除シテ更ニ書寫シ數多ノ誤脱アリタル時ハ挿入シ難キヲ以テ欄外ニ記入ス

〔二十七〕訴訟手續ニ關スル規則ハ既往ニ溯リ其頒布以前ヲ追制スルノ効力アリ是レ本條ノ設アル所以ナリ

〔二十八〕此法律ハ普通ノ法ニシテ將來別段ノ犯罪

スル書類ノ正本又ハ謄本ヲ作ルニ付キ文字ヲ改竄ス可カラス若シ挿入削除及ヒ欄外ノ記入アル時ハ之ニ認印ス可シ文字ヲ削除スル時ハ之ヲ讀得ヘキ爲メ字體ヲ存シ其數ヲ記載ス可シ此規則ニ背キタル時ハ其變更増減ノ效チカル可シ

第二十七條 此法律ニ於テ定メタル豫審又ハ公判ニ付テノ規則ハ頒布以前ニ係ル犯罪ニモ亦之ヲ適用ス

第二十八條 此法律ハ將來頒布ス可キ別段ノ法律ニ於テ豫審又ハ公判ノ手續ヲ定メタル犯罪ニモ亦之ヲ適用ス但其法律ニ抵觸スル規則ハ此限ニ在ラス

ニ付キ其審判手續ヲ定メルニハ必ズ此法律ニ對照ス可キ者トス故ニ其別段ノ法律ニ適用ス從前頒布シタル別段ノ法律ニ付テハ前述ノ理由ナシ故ニ互ニ相關係スルヲナシ

〔二十九〕陸海軍律ヲ以テ處分ス可キ者ハ各其法律ニ從フ此普通法ヲ適用ス可カラス

通則トハ此編各章ニ通用ス可キ規則ニシテ重複チ

法律ニ於テ豫審又ハ公判ノ手續ヲ定メタル犯罪ニモ亦之ヲ適用ス但其法律ニ抵觸スル規則ハ此限ニ在ラス從前頒布シタル別段ノ法律ニ於テ豫審又ハ公判ノ手續ヲ定メタル犯罪ニ付テハ前項ノ例ニ在ラス

第二十九條 此法律ハ陸海軍ニ關スル法律ヲ以テ處分ス可キ者ニ適用スルヲ得ス

第三十條 此法律ニ於テ親屬ト稱スルハ刑法第百十四條第百十五條ノ例ニ從フ

第二編 刑事裁判所ノ構成及ヒ權限

第一章 通則

省カシカ爲メ設クル所ナ
 リ
 〔三十一〕本條ノ規則ハ一
 裁判所ニ於テ民刑ヲ併セ
 テ管理ス可キヲ定ム第四
 十九條第五十四條等ノ基
 本ト爲ル者ナリ
 〔三十二〕裁判所ノ位置及
 ビ管轄ノ區劃ハ時々變更
 ナ要スルコトアリ故ニ此法
 律ニ於テ一定セズ
 〔三十三〕檢察官ハ原告ナ
 リ一裁判所中必ス之ヲ置
 ク
 〔三十四〕捜査トハ犯人及
 ビ罪証ヲ搜索査覈スルヲ
 云フ犯罪アルコトヲ知ラス
 シテ探偵ヲ爲スノ謂ニ非
 ス
 公益ヲ保護スルトハ公安
 ノ爲メ裁判ノ傍聴ヲ禁ゼ
 ノコトヲ求ムル等總テ社會

第三十一條 通管刑事ノ裁判權ハ民事ノ裁判
 權上同一ノ裁判所ニ屬ス四九、五四、六三、
七三、七七
 第三十二條 裁判所ノ位置及ヒ管轄ノ區劃ハ
 司法卿ノ奏請ニ因リ上裁ヲ以テ之ヲ定ム
 第三十三條 裁判所ニハ檢察官一名又ハ數名
 ナ置ク五一、五八、六六、
七四、八〇、八七
 第三十四條 刑事ニ付キ檢察官ノ職務左ノ如
 シ
 一 犯罪ヲ捜査ス九二
 二 犯罪ニ付キ取調ノ處分及ヒ法律ノ適用ヲ
 裁判官ニ請求ス一〇七、一一七、一二〇、一二一
三三〇、三三三、三九八
 三 裁判所ノ命令及ヒ言渡ノ執行ヲ指揮ス三

及ヒ被告人ノ利益ヲ保護
 スルヲ云フ
 〔三十五〕檢察官ノ職務ハ
 前條ニ定メタルカ如ク請
 求ヲ爲シ公益ヲ保護スル
 ニ在ルコトヲ必ス公判ニ
 立會ハシム
 〔三十六〕裁判官ハ審判ヲ
 行フノ任ニ在ルコトヲ以テ自
 ラ其記録ヲ掌ル可キニア
 ラス故ニ別ニ書記ヲ置キ
 以テ豫審公判ニ關スル書
 類ヲ作ラシム

四 裁判所ニ於テ公益ヲ保護ス
 第三十五條 檢察官一名又ハ公廷ニ立會フ可
 シ
 第三十六條 裁判所ニハ書記一名又ハ數名ヲ
 置ク五三、五九、六九
七五、一八八
 第三十七條 書記ハ豫審及ヒ公判ニ立會ヒ調
 書公判始末書其他訴訟ニ關スル一切ノ書類
 ナ作ル可シ三一七
 又裁判言渡書其他一切ノ書類ヲ保存ス可シ
 第三十八條 犯罪ノ種類ニ因リ裁判管轄ヲ定
 ムルコト左ノ如シ

是レ罪ノ種類ニ從ヒ管轄
裁判所ヲ異ニスル所以ナ
リ
末項ノ規則ハ小ハ大ヲ容
レサルモ大ハ小ヲ包含ス
ルノ原則ヨリ由テ來ル所
ナリ

〔三十九〕附帶ノ犯罪トハ
數罪ノ互ニ密着ノ關係ヲ
有スル者ヲ云フ第一ノ場
合ハ時ト所トノ關係アリ
第二ハ人ノ罪トノ關係アリ
第三ハ罪各關係アリ
罪ヲ別ナラ附帶犯不附帶
犯ト爲ス利一アリ公廷
ノ辯論中附帶犯ヲ發覺ス

- 一 違警罪ハ違警罪裁判所
 - 二 輕罪ハ輕罪裁判所
 - 三 重罪ハ重罪裁判所
- 重罪及ヒ輕罪又ハ輕罪及ヒ違警罪ニ付キ同
時ニ同一ノ被告人ニ對シ訴アリタル時ハ附
帶ノ犯罪ニ非スト雖モ上等ノ裁判所併セテ
之ヲ管轄ス

第三十九條 左ノ場合ニ於テハ附帶ノ犯罪ナ
リトス

- 一 同一ノ場所ニ於テ同時ニ一人又ハ數人ニ
テ數罪ヲ犯シタル時
- 二 數人通謀シテ日時又ハ場所ヲ異ニシ數罪

ル時ハ檢察官ノ請求ヲ待
タズ裁判所ニテ之ヲ裁判
スルヲ得テ不附帶犯ニ付
テハ之ニ反ス第二百七十
六條ヲ見ル可シ

〔四十〕同等ノ裁判所トハ
重罪裁判所ト重罪裁判所
輕罪裁判所ト輕罪所トノ
類即チ全國中同等ノ裁判
所數箇アルヲ以テ其中ニ
就テ犯罪ノ地ノ裁判所ノ
ミヲ以テ管轄ト定ム

〔四十一〕本條ハ甲乙管轄
境ニテ罪ヲ犯シ又ハ甲地
ヨリ乙地ニ繼續シテ禁止
物品ヲ販賣スル等一箇ノ
罪ヲ犯シタル場合ニ付キ
其管轄ヲ定ム

第四十條 犯シタル時

三 自己又ハ他人ノ犯罪ヲ容易ニスル爲メ又
ハ其罪ヲ免カル、爲メ他ノ罪ヲ犯シタル
時

第四十條 同等ノ裁判所ニ於テハ犯罪ノ地ノ
裁判所ヲ以テ豫審及ヒ公判ノ管轄ナリトス
犯罪ノ地分明ナラサル時ハ被告人逮捕ノ地
ノ裁判所ヲ以テ其管轄ナリトス

第四十一條 數箇ノ裁判所ノ管轄地内ニ於テ
同時ニ又ハ繼續シテ一箇ノ罪ヲ犯シタル時
ハ其中ニテ被告人逮捕ノ地ノ裁判所ヲ以テ
其管轄ナリトス

〔四十二〕管轄ニ非サル裁判所ノ管内ニ於テ准現行犯トシテ被告人ヲ逮捕シタル時ハ最近ノ管轄裁判所ニ移ス可シ
 例ハ長崎神戶ニ於テ罪ヲ犯シタル者ヲ熊本ニテ逮捕スルハ長崎ニ移シ京都ニテ逮捕スルハ神戸ニ移スノ類然レモ管轄裁判所中既ニ令狀ヲ發シタル時ハ路程ノ遠近ニ拘ハラズ其裁判所ニ送致スル者トス

數罪俱發ノ場合ニ於テモ亦同シ
第四十二條 犯罪ノ地ニ非サル裁判所ノ管轄地内ニ於テ被告人ヲ逮捕シタル時ハ最近ノ管轄裁判所ニ送致ス可シ
 令狀ヲ以テ被告人ヲ逮捕シタル時ハ其令狀ヲ發シタル裁判所ニ送致ス可シ
第四十三條 數箇ノ裁判所ノ管轄ナル場合ニ於テ被告人ヲ逮捕スルコト能ハス若クハ法律上逮捕スルコト許サレル時ハ其中ニテ最初豫審又ハ公判ニ著手シタル裁判所ヲ以テ其管轄ナリトス 一二六
第四十四條 從犯ハ正犯ヲ管轄スル裁判所ヲ

從シテ同一ノ罪ヲ犯シタル者ナルヲ以テ主ナル正犯ト共ニ裁判スル時ハ大ニ事實ヲ明カニシ且裁判ノ齟齬ヲ避クノ利アリ
 正犯數名アル時モ亦同シ然レモ正從犯ノ中等法院又ハ陸海軍裁判所ノ管轄ニ屬スル者アル時ハ第八十三條ニ從ヒ正從ヲ併セテ高等法院ニ附シ或ハ引分ケテ通常裁判所陸海軍裁判所ニテ裁判スルコトアル可シ

以テ其管轄ナリトス
 數箇ノ裁判所ノ管轄ニ屬スル正犯數名アル時ハ其中ニテ最初豫審又ハ公判ニ著手シタル裁判所ヲ以テ其管轄ナリトス
 高等法院及ヒ陸海軍裁判所ノ管轄ニ付キ法律ニ於テ特ニ定メタル場合ハ本條ノ例ニ在ラス 三八
第四十五條 外國ニ在テ犯シタル罪日本國ノ法律ニ依リ處斷ス可キ者ニシテ内地ニ於テ被告人ヲ逮捕シタル時ハ逮捕ノ地ノ裁判所ヲ以テ其管轄ナリトス又外國ヨリ送致シタル時ハ送致ノ地ノ裁判所ヲ以テ其管轄ナリ

裁判管轄ヲ定ムルノ訴ハ
第四百四十八條以下ニ詳
ナリ

〔四十六〕官船ハ海軍ニ屬
ス其船中ノ犯罪ハ海軍律
ニ從テ惟コトニハ商船内
ノ犯罪ヲ指ス乃チ船長ニ
豫審權ノ幾分ヲ與フ等
特別ノ制定アル可キヲ以
テ例外ト爲スナリ
〔四十七〕先入主ト爲ルハ
人情ノ免カレサル所ナリ
故ニ前ニ豫審ニ關係シタ
ル裁判官ヲシテ後ノ公判
ニ關係セシメス又豫審公

トス
關席裁判ヲ爲ス可キ場合ニ於テハ被告人最
終住所ノ地ノ裁判所ヲ以テ其管轄ナリトス
其住所分明ナラサル時ハ裁判管轄ヲ定ムル
ノ訴ヲ爲ス可シ

第四十六條 商船内ノ犯罪ニ付テノ管轄及ヒ
訴訟手續ハ別ニ法律ヲ以テ之ヲ定ム

第四十七條 豫審ヲ爲シタル裁判官ハ其公判
ニ干預ス可カラス前ニ豫審又ハ公判ヲ爲シ
タル裁判官ハ哀訴及ヒ關席裁判ニ對スル故
障ヲ除クノ外其上訴ノ裁判ニ干預ス可カラ
ス此規則ニ背キタル時ハ其言渡ノ效ナカル

可シニ七九ノ二

判ヲ爲シタル裁判官ヲシ
テ其ト訴ニ關係セシメス
但哀訴ト關席裁判ニ對ス
ル故障ニ付テハ前ノ裁判
官ヲシテ之ヲ判決セシメ
テ不可ナレトナシ故ニ之
ヲ例外トシ哀訴トハ高等
法院及ヒ大審院ノ判決ニ
對シ第四百三十六條ノ原
由アル時ニ爲ス所ノ訴ヲ
云フ

〔四十八〕裁判所ニ於テハ
檢察官又ハ民事原告人ヨ
リ訴ル所ノ事件或ハ犯
罪ノ性質種類場所或ハ被
告人ノ身分ニ因リ管轄ス
可キ者ニ非ストスル時ハ
管轄違ノ言渡ヲ爲シ又訴
訟關係人ヨリ管轄違ノ申
立ヲ爲フモ其理由ヲシト
スル時ハ之ヲ棄却スルコ
ト得ルナリ

第四十八條 裁判所ハ訴ヲ受ケタル事件ニ付
キ自ラ其管轄ナリヤ否ヲ判決スルノ權アリ
其判決ニ付テハ本案ノ事件終審ナル可キ場
合ト雖モ通常ノ規則ニ從ヒ檢察官其他訴訟
關係人ヨリ上訴スルコト得ルニ三三三、三三四、三四
三七、三三八、三六〇、三六
二、三六五、四一〇ノ三
第二章 違警罪裁判所
第四十九條 治安裁判所ハ違警罪裁判所トシ
テ其管轄地内ニ於テ犯シタル違警罪ヲ裁判
ス 三一、三八以下
第五十條 違警罪裁判所判事ノ職務ハ治安裁

本案ノ事件トハ公訴ニ係ル被告事件ヲ云フ終審トハ控訴ヲ許サ、ル者ヲ云フ

〔四十九〕民事ノ治安裁判所ハ刑事ニ付キ違警罪裁判所ト爲ル是レ第二十一條ニ於テ民事刑事合一ノ原則ヲ定メタロノ結果ナリ

〔五十〕治安判事ハ一人コトテ民刑ノ裁判ヲ行フ者トス

〔五十一〕違警罪裁判所ニハ別段檢事ヲ置カス其地ノ警部ヲシテ檢務ヲ攝行セシム

〔五十二〕未タ裁判ヲ經サシ事件ヲ未決ト稱シ既ニ經タル者ヲ既決ト稱シ其表ヲ作ラシムルハ件數ノ多寡審判ノ迅速ヲ知ラシム

判所判事之ヲ行フ

判事差支アル時ハ判事補其職務ヲ行フ

第五十一條 違警罪裁判所檢察官ノ職務ハ其裁判所々在ノ地ノ警部之ヲ行フ 三三三、三四、

第五十二條 違警罪裁判所檢察官ハ毎月未決既決ノ事件表ヲ作り輕罪裁判所檢事ニ差出ス可シ 六二、

事件表ニハ違警罪裁判所判事認印シ且意見アル時ハ之ヲ附記ス可シ

第五十三條 違警罪裁判所書記ノ職務ハ治安裁判所書記之ヲ行フ 三六三、三七、

第三章 輕罪裁判所

カ爲ソナリ

〔五十四〕本條ハ亦民刑合一ノ主義ヨリ生スル規則ナリ

違警罪ハ罪ノ最モ細微ナル者ニシテ其事情繁雜ナルヲナシ故ニ此罪ニ付テハ豫審ヲ行ハス

始審ハ終審ノ反ニシテ控訴ヲ許ス者ヲ云フ第三百三十八條ヲ參照ス可シ

控訴トハ事實ハ誤アリト中立テ以テ原裁判ヲ取消シ更ニ審判アラントナシ求ムルヲ云フ

〔五十五〕判事ノ職ハ授任ノ順序ヲ追ヒ一年毎ニ交代セシムルヲナシ

第五十四條 始審裁判所ハ輕罪裁判所トシテ其管轄地内ニ於テ犯シタル輕罪ヲ裁判ス 三三八以下

又重罪及ヒ輕罪ノ豫審ヲ行フ 一二三以下、

又其管轄地内ノ違警罪裁判所ノ始審ノ裁判ニ對スル控訴ヲ裁判ス 三三三八

第五十五條 輕罪裁判所判事ノ職務ハ裁判所長ヨリ始審裁判所判事一名又ハ數名ニ順次滿一年間之ヲ命ス

又滿一年間更ニ其職務ヲ繼續セシムルヲ得

〔五十六〕豫審判事ノ職ハ
順次ニ拘ハラズ特別ノ技
能アル者ヲ選ミ司法卿之
ヲ命ス其任期ヲ限ラサル
ヲ得ルナリ

第五十六條 豫審判事ノ職務ハ司法卿ヨリ始
審裁判所判事一名又ハ數名ニ滿一年間之ヲ
命ス
又滿一年以上其職務ヲ繼續ス可キヲ命ス
ルヲ得

第五十七條 判事差支アル時ハ其他ノ判事又
ハ判事補其職務ヲ行フ

第五十八條 輕罪裁判所檢察官ノ職務ハ始審
裁判所檢事又ハ其指名シタル檢事補之ヲ行
フ三六三三

第五十九條 輕罪裁判所書記ノ職務ハ始審裁
判所書記之ヲ行フ三六三三

〔五十八〕判事補ハ公判ヲ
爲ス可キ判事ニ屬スル者
アリ豫審判事ニ屬スル者
アリ孰レノ判事補ト雖モ
豫審及ヒ公判ニ立會ヒ自
己ノ意見ヲ述ルノ權アル
ヲ謂フニ非ス
判事補ハ意見ヲ述ルニ止
マリ決議ニ參スルヲ得

ス其意見ヲ取捨スルハ判
事ノ權内ニ在リ

〔六十〕行政警察ノ職アル
者ニハ亦司法警察ノ權ヲ
與ヘサル可カラス是レ本
條ノ規則アル所以ナリ
東京府ニハ特任ノ警察長
官アリ故ニ其府長官ヲ除
ク

警視以下ノ官吏ハ實ニ檢
事ノ補佐タルコト過キスト
雖モ其犯罪ヲ捜査スルニ
付キ一々檢事ノ指揮ヲ乞
フニ及ハズ惟捜査ヲ終リ
タル後檢事ニ通報シテ其
命ヲ求メ又ハ其捜査シタ
ル所ヲ申立テ以テ檢事訴
ヲ起スノ基礎ト爲ス可キ
ノミ
以下單ニ司法警察官ト稱
スルハ本條ニ記載シタル

第六十條 東京警視本署長及ヒ府縣長官ハ各
其管轄地内ニ於テ司法警察官トシテ犯罪ヲ
捜査スルニ付キ檢事ト同一ノ權ヲ有ス但東
京府長官ハ此限ニ在ラス
左ニ記載シタル官吏ハ檢事ノ補佐トシテ其
指揮ヲ受ケ第三編ニ定メタル規則ニ從ヒ司
法警察官トシテ犯罪ヲ捜査ス可シ

- 一 警視警部
- 二 區長郡長
- 三 治安判事
- 四 警部ノ在ラサル地ノ戶長

第六十一條 司法警察官檢察官又ハ裁判官ハ

者ヲ指スト知ル可シ
〔六十一〕官吏ノ權ハ管外
ニ及ハス管外ニテ取調フ
可キヲアレハ其地ノ官吏
ニ囑託依頼セサ可カラ
ス管内ト雖モ自ラ出張ス
ルニ及ハストスル時ハ亦
同シ
囑託ハ各自職務ノ性質ニ
從ヒ之ヲ爲ス可シ裁判官
ハ裁判官ニ檢察官ハ檢察
官ニ爲スノ類
〔六十二〕第五十二條ノ趣
意ト同シ

他ノ司法警察官檢察官又ハ裁判官ヨリ犯罪
取調ノ爲メ其管轄地内ニ於テ證據其他事實
參考ト爲ル可キ事物ヲ集取ス可キノ囑託ヲ
受クルコアル可シ 一一九、一二四、
一六八、一七二
第六十二條 檢事ハ二月毎ニ豫審及ヒ公判ノ
未決既決ノ事件表ヲ作り控訴裁判所檢事長
ニ差出ス可シ
又違警罪裁判所檢察官ヨリ差出シタル事件
表ヲ同時ニ檢事長ニ差出シ且意見アル時ハ
之ヲ附記ス可シ 五二
事件表ニハ裁判所長認印シ且意見アル時ハ
之ヲ附記ス可シ

第四章 控訴裁判所

第六十三條 控訴裁判所ニ刑事局ヲ置キ輕罪
裁判所ノ始審ノ裁判ニ對スル控訴ヲ裁判ス
但其裁判ハ判事三名以上ニテ之ヲ爲ス可シ
三一、三二、三八以下、
三六五

第六十四條 刑事局判事ノ職務ハ裁判所長ヨ
リ其裁判所判事數名ニ順次滿一年間之ヲ命
ス
又滿一年間更ニ其職務ヲ繼續セシムルコトヲ
得

第六十五條 刑事局判事差支アル時ハ裁判所
長ヨリ民事局判事ヲシテ其職務ヲ行ハシム

〔六十五〕裁判所長ハ民事
局ニ屬セヌ又刑事局ニ屬
セヌ兩局ヲ總括スルノ職

〔六十四〕第五十五條ノ趣
意ト同シ

ニ在ルヲ以テ其意ノ欲ル所ニ從ヒ何時ニテモ此兩局ニ於テ裁判長ト爲ルヲ許ス
 裁判長トハ一事件ノ裁判ニ關シ其長ト爲ル者ニシテ所謂上席人ナリ
 〔六十七〕檢事長ハ其管轄地内ノ檢察官司法警察官ノ長官ニシテ之ヲ監督故ニ下官ニシテ其職ヲ尽サハルヲアレハ命メテ之ヲ行ハシメ又ハ自ラ派出シ或ハ所屬檢事ヲ出張セシメテ警察及ヒ起訴ヲ爲サシムルノ權アリ

〔六十八〕第五十二條第六十二條ノ趣意ト同シ

裁判所長ハ何時ニテモ裁判長ト爲ルヲ得

第六十六條 刑事局檢察官ノ職務ハ其裁判所

檢事長又ハ其指名シタル檢事之ヲ行フ三三三

第六十七條 檢事長ハ其裁判所ノ管轄地内ニ

於テ輕罪裁判所檢事ニ属スル司法警察及ヒ

起訴ノ職務ヲ行ヒ又ハ其所屬ノ檢事ヲシテ

之ヲ行ハシムルヲ得

又起訴及ヒ其他ノ職務ニ付キ其管轄地内ノ

檢察官ニ告達スルヲアル可シ

檢事長ハ其管轄地内ノ檢察官及ヒ司法警察

官ヲ監督ス

第六十八條 檢事長ハ三月毎ニ豫審及ヒ公判

〔七十〕被告事件未遂犯罪宥恕減輕等ニ因リ之ニ該シ可キノ刑變シテ輕罪ノ

ノ未決既決ノ事件表ヲ作り司法卿ニ差出ス可シ

又輕罪裁判所檢事ヨリ差出シタル事件表ヲ

同時ニ司法卿ニ差出シ且意見アル時ハ之ヲ

附記ス可シ 六二二

事件表ニハ裁判所長認印シ且意見アル時ハ

之ヲ附記ス可シ

第六十九條 刑事局書記ノ職務ハ其裁判所書

記之ヲ行フ 三六三三七

第五章 重罪裁判所

第七十條 重罪裁判所ハ其管轄地内ニ於テ犯

シタル重罪ヲ裁判ス 三八以下

刑ト爲ルト雖モ其罪ノ種類常ニ重罪ナルヲ以テ重罪裁判所ノ管理ヲ可キ者トス

〔七十一〕重罪裁判所ハ常ニ之ヲ開カス毎年四回三月毎ニ之ヲ開ク然レハ事件多ク期内ニ於テ裁判ヲ爲シ盡スル能ハサル時ハ臨時開廳スルヲ得ルナリ

〔七十二〕裁判長ハ必ス控訴裁判所判事ヨリ選任ス故ニ始審裁判所ニ開ク時ハ其判事派出スル者トス陪席判事ハ審判ニ立會ヒ決議ニ參ス重罪ハ罪ノ尤モ重キ者ナルヲ以テ判事ノ數ヲ増ス

第七十一條 重罪裁判所ハ三月毎ニ之ヲ開ク

若シ事件夥多ナル時ハ控訴裁判所長及ヒ檢事長ヨリ司法卿ニ具申シ其許可ヲ得テ臨時開廳スルヲ得

第七十二條 重罪裁判所ハ控訴裁判所又ハ始審裁判所ニ於テ之ヲ開ク

第七十三條 重罪裁判所ハ左ノ職員ヲ以テ裁判ヲ爲ス可シ

一 裁判長一名但控訴裁判所長ヨリ其裁判所判事中ニテ之ヲ命ス

二 陪席判事四名但控訴裁判所ニ於テ開ク時ハ裁判所長ヨリ其裁判所判事中ニテ之ヲ

〔七十五〕書記ハ公判ニ立會ヒ書類ヲ作ルコト過キサルヲ以テ必ス之ヲ控訴裁判所ヨリ採ラス開廳ス可キ裁判所ノ書記ヲシテ當然其職務ヲ行ハシム

〔七十六〕第五十二條第六

命シ始審裁判所ニ於テ開ク時ハ其裁判所長及ヒ先任ノ判事ヲ以テ之ニ充ツ

第七十四條 重罪裁判所檢察官ノ職務ハ控訴裁判所檢事長又ハ其指名シタル檢事之ヲ行フ
二三三三四

始審裁判所ニ於テ開ク時ハ檢事長ヨリ始審裁判所檢事ヲシテ其職務ヲ行ハシムルヲ得

第七十五條 重罪裁判所書記ノ職務ハ開廳ス可キ裁判所ノ書記之ヲ行フ
三六三七

第七十六條 控訴裁判所檢事長ハ開廳ノ後既決事件表ヲ作り司法卿ニ差出ス可シ

十二條等ノ趣意ト異ナル
トナシ但重罪裁判所ハ其
訴ヲ受ケタル事件ニ付キ
裁判ヲ終ラサル間ハ閉廳
スルコトナキヲ以テ決シテ
未決事件アルコトナシ故
既決事件表ヲ作ルノミ
〔七十七〕大審院ノ管轄ハ
全國ニ及フ最上等ノ法院
ニシテ其數一箇ニ過キサ
レハナリ
上告再審ノ訴等ハ第五編
ニ詳ナリ

事件表ニハ控訴裁判所長認印シ且意見アル
時ハ之ヲ附記ス可シ

第六章 大審院

第七十七條 大審院ニ刑事局ヲ置キ左ノ條件
ヲ裁判ス 三一、

一 上告 四一〇以下、

二 再審ノ訴 四三九以下、

三 裁判管轄ヲ定ムルノ訴 四四八以下、

四 公安又ハ嫌疑ノ爲メ裁判管轄ヲ移スノ訴
四五二
以下

第七十八條 刑事局ニ於テハ判事五名以上ニ
非サレハ裁判ヲ爲ス可カラス

〔七十八〕控訴ノ裁判ハ判
事三名以上ニテ爲ス可キ
者トス乃チ上告等ノ判決

ハ之ニ比準シテ判事ノ數
ヲ増シ五名以上ト爲スナ
リ
〔七十九〕大審院ハ事實ヲ
審判セシメテ止タ法律適
用ノ事ヲ掌ル故ニ永ク一
局ニ在テ刑民ノ中一方ニ
練熟シ其法理ニ明達スル
ヲ要ス是ヲ以テ法律ニ於
テ判事ノ任期ヲ定メ互ニ
交代セシムルコトナシ是レ
他ノ裁判所ト異ナル者ト
ス

〔八十二〕第五十二條第六
十二條等ノ趣意ト異ナル
コトナシ

第七十九條 刑事局判事ノ職務ハ司法卿ノ奏
請ニ因リ其院判事ニ之ヲ命ス

判事差支アル時ハ民事局判事授任ノ順序ニ
從ヒ其職務ヲ行フ

第八十條 刑事局判事官ノ職務ハ其院檢事長
又ハ其指名シタル檢事之ヲ行フ 三三三三四、

第八十一條 刑事局書記ノ職務ハ其院書記之
ヲ行フ 三六三三七、

第八十二條 檢事長ハ三月毎ニ豫審及ヒ公判
ノ未決既決ノ事件表ヲ作り司法卿ニ差出ス

可シ

事件表ニハ院長認印シ且意見アル時ハ之ヲ

〔八十三〕國事犯及ヒ皇族勅任官ノ犯罪ハ通常裁判所ニ於テ之ヲ管轄セス爲メニ高等法院ヲ設ケテ之ヲ裁判ス是レ裁判ノ公正ニ出ルヲ保シ信憑ヲ固クタル爲メナリ
皇族ノ犯シタル輕罪罰金ノ刑ニ該ル可キ者ハ通常裁判所ヲシテ之ヲ管理セシム是レ罰金ノ刑ニ該ル可キ輕罪ニ付テハ本人出廷セス代人ヲ以テ辯論ヲ爲スコトヲ得可キニ因ル

附記ス可シ
第七章 高等法院
第八十三條 高等法院ニ於テハ刑法第二編第一章第二章ニ記載シタル重罪ヲ裁判ス
又皇族ノ犯シタル重罪及ヒ禁錮ノ刑ニ該ル可キ輕罪ヲ裁判ス
又勅任官ノ犯シタル重罪ヲ裁判ス
前二項ニ記載シタル者ノ正犯及ヒ從犯ハ身分ノ如何ヲ問ハス其既ニ於テ之ヲ裁判ス四
第八十四條 高等法院ハ司法卿ノ奏請ニ因リ上裁ヲ以テ之ヲ開ク其裁判ス可キ事件及ヒ開院ス可キ場所モ亦上裁ヲ以テ之ヲ定ム

〔八十五〕高等法院ハ臨時之ヲ開ク者ナリト雖モ其裁判官ハ毎年豫メ之ヲ命シ置クナリ是レ臨時其人ヲ選フノ嫌ナカラメカ爲メナリ
豫備裁判官トハ陪席裁判官中差支ヲ生スル者ニ代ランカ爲メ命スル所ナリ

第八十五條 高等法院ハ左ノ職員ヲ以テ裁判ヲ爲ス可シ
一 裁判長一名陪席裁判官六名但元老院議官大審院判事中心ヨリ毎年豫メ上裁ヲ以テ之ヲ命ス
二 豫備裁判官二名但前項ノ式ニ從ヒ之ヲ命ス
第八十六條 豫審判事ノ職務ハ上裁ヲ以テ大審院刑事局判事一名又ハ數名ニ之ヲ命ス
第八十七條 高等法院檢察官ノ職務ハ大審院檢事長又ハ司法卿ヨリ指名シタル檢事之ヲ行フ三三三四

〔八十九〕高等法院ノ判決ハ大審院ノ判決ト同シク上訴スルコトヲ許サス他ニ上等ナル裁判所アラザレハナリ然レモ本條ニ定メタル三箇ノ場合ニ於テハ上訴ノ權ヲ奪フコト得ス

第八十八條 高等法院書記ノ職務ハ大審院書記之ヲ行フ 三六二七

第八十九條 高等法院ノ裁判ニ對シテハ上訴ヲ許サス但左ノ條件ニ於テハ其院ニ上訴スルコト得

一 關席裁判アリタル場合ニ於テ故障

二 第四百三十六條ト同一ノ場合ニ於テ哀訴

三 第四百三十九條ト同一ノ場合ニ於テ再審

ノ訴

〔九十〕被告事件夥多ナル時ハ一法院ニシテ盡ク其裁判ヲ爲シ難シ故ニ新ニ職員ヲ命シ別ニ裁判ヲ爲サシムルコト得又再審ノ訴ハ原裁判ノ誤謬ヲ改更

第九十條 被告事件夥多ナル時又ハ再審ノ訴ヲ裁判ス可キ時ハ新ニ職員ヲ命スルコトアル可シ

スルニ在ルヲ以テ前ニ其裁判ヲ爲シタル者ナシテ之ニ關係セシノ難キ情實ヲシトセス故ニ亦新ニ職員ヲ命スルコト得ル者トス

〔九十一〕總テ訴訟手續ハ高等法院ニ於ケルト雖モ毫モ異ナル可キノ理ナシ故ニ豫審公判共ニ通常ノ規則ニ從フ

第九十一條 高等法院ノ訴訟手續ハ通常ノ規則ニ從フ

〔九十二〕本條ニ所謂檢察官トハ單ニ輕罪裁判所ノ檢事ヲ指ス違警罪裁判所ノ檢察官ハ與ラス何トナレハ該檢察官ハ第百七條以下ノ規則ニ從ヒ起訴ヲ爲スノ權ナク止テ違警罪アルコトヲ認知シ又ハ之アリト思料シタル時ハ搜查ノ後直ニ其裁判所ニ公訴ヲ起シ被告人ヲ呼出スニ過ヤサレハナリ

〔九十三〕被害者犯罪事件ヲ申立ルヲ告訴ト名シ其他ノ者ヨリ申立ル者ハ即チ告發ナリ告訴ヲ爲スハ權利ニシテ義務ニ非ス之ヲ爲スト否トハ被害者ノ

第三編 犯罪ノ搜查起訴及ヒ豫審

第一章 搜查

第九十二條 檢察官ハ後ニ記載シタル告訴告發現行犯其他ノ原由ニ因リ犯罪アルコトヲ認知シ又ハ犯罪アリト思料シタル時ハ其證據及ヒ犯人ヲ搜查シ第百七條以下ノ規則ニ從ヒ起訴ノ手續ヲ爲ス可シ

第一節 告訴及ヒ告發

第九十三條 何人ニ限ラス重罪輕罪ニ因リ損害ヲ受ケタル者ハ犯罪ノ地若クハ被告人所在ノ地ノ豫審判事檢事又ハ司法警察官ニ告訴スルコトヲ得

見ニ任ス是レ本條告訴スルヲ得ト書シ告訴ス可シト記セサル所以ナリ
 告訴ヲ受ク可キノ官吏一名ニ限ラズ豫審判事ナリ
 檢事ナリ司法警察官ナリ
 被害者ノ望ム所ノ者ニ告訴スルヲ許シタルハ犯罪ヲ知ルノ途ヲ廣クセシカ爲メナリ

豫審判事告訴ヲ受ケタル時ハ第百十四條以下ノ規則ニ從ヒ其處分ヲ爲ス可シ
 檢事告訴ヲ受ケタル時ハ第百七條ノ規則ニ從ヒ其處分ヲ爲ス可シ
 司法警察官告訴ヲ受ケタル時ハ速ニ其書類ヲ檢事ニ送致ス可シ
 違警罪ニ付テハ犯罪ノ地ノ違警罪裁判所檢察官又ハ司法警察官ニ告訴スルヲ得其告訴ヲ受ケタル司法警察官ハ之ヲ違警罪裁判所檢察官ニ移ス可シ
 第九十四條 告訴人ハ成ル可ク其證據及ヒ事實參考ト爲ル可キヲ申立ツ可シ

本ニ告訴スル者ナキニ至ラン故ニ法律ニ於テハ之ヲ強ヒス成ル可ク差出ス可シト命スルノミ
 民事原告人ト爲ルトハ公訴ニ附帶シテ私訴ヲ行ヒ賠償返還ヲ要ムルヲ云フ
 [九十五] 告訴ハ書面ヲ以テ之ヲ爲スモ口述ヲ以テ之ヲ爲スモ告訴人ノ自由ナリ其法式ヲ嚴密ニスレハ犯罪ヲ知ルノ方法ヲ失ヒ被害者告訴ヲ爲サスシテ止ムニ至ルノ恐アリ

又告訴人ハ第百十條以下ノ規則ニ從ヒ民事原告人ト爲ルヲ得
 第九十五條 告訴ハ告訴人ノ署名捺印シタル書面ヲ以テ之ヲ爲スヘシ 二十五ノ二
 又告訴ハ口述ヲ以テ之ヲ爲スヲ得其告訴ヲ受ケタル官吏ハ調書ヲ作り告訴人ニ之ヲ讀聞カセ共ニ署名捺印ス可シ若シ告訴人署名捺印スルヲ能ハサル時ハ其旨ヲ附記ス可シ
 告訴人ニハ告訴ヲ受ケタルノ證書ヲ渡ス可シ
 第九十六條 官吏其職務ヲ行フニ因リ重罪輕

[九十六] 官吏其職務ヲ行フニ因リ重罪輕

チ知ル時ハ必ス告發ヲ爲
ス可キノ義務アリトス是
レ常人ト異ナル所ニシテ
其公益ヲ保護スルノ任
ルヲ以テナリ
又其告發ハ必ス書面ヲ以
テヒシム文字ヲ知ラサル
等ノコトアル可キノ理ナク
レハナリ
職務ヲ行フニ因リ犯罪
アルコト知ルハ例ヘハ民事
ノ裁判官詞訟ノ取調中書
類ノ偽造ヲ發見シ會計官
吏貨幣ノ贋造ヲ發見スル
ノ類

罪アルコトヲ認知シ又ハ重罪輕罪アリト思料
シタル時ハ速ニ其職務ヲ行フ地ノ檢事ニ告
發ス可シ
告發ハ官吏ノ署名捺印シタル書面ヲ以テ之
ヲ爲シ成ル可ク證據及ヒ事實參考ト爲ル可
キ事物ヲ添フ可シ 二十五
違警罪ニ付テハ違警罪裁判所檢察官ニ告發
ス可シ
第九十七條 何人ニ限ラズ重罪輕罪アルコトヲ
認知シ又ハ重罪輕罪アリト思料シタル時ハ
第九十四條第九十五條ノ規則ニ從ヒ其所在
ノ地若クハ犯罪ノ地ノ豫審判事檢事又ハ司

〔九十八〕告訴告發ハ必ス
本人コト爲ス可キノ責ナ
シ委任狀ヲ以テ他人ニ其
事ヲ委託スルモ妨ナシ
無能力者ノ解ハ第十二條
ニ見ヘタリ
無能力者ト雖モ自ラ告訴
スルノ權アリ但法律上ノ
代人其無能力者ノ名ヲ以
テ告訴スルコト得此場合
ニ於テハ委任狀アルコト
要セス
〔九十九〕一旦告訴告發ヲ
爲シタル後其申立ノ錯誤
アルコト知ル時ハ之ヲ願
下ケ又ハ前ノ申立ヲ變更

法警察官ニ告發スルコトヲ得
告發ヲ受ケタル官吏ハ第九十三條ノ規則ニ
從ヒ其處分ヲ爲ス可シ
第九十八條 告訴告發ハ代人ニ委任シテ之ヲ
爲スコトヲ得但第九十六條ノ場合ハ此限ニ在
ラス
無能力者ノ告訴ハ法律ニ定メタル代人之ヲ
爲スモ其効アリトス
第九十九條 告訴告發ハ其願下ヲ爲シ又ハ其
申立ヲ變更スルコトヲ得此場合ト雖モ第十六
條ノ規則ニ從ヒ被告人ヨリ要償ノ訴ヲ受ク
ルコトアル可シ

スルヲ許ス但既ニ被告
人ニ損害ヲ被ラシメタ
時ハ之ヲ償フノ義務ヲ免
カレヌ
〔百〕現行犯ト雖モ其罪ノ
輕重ヲ變スルコトナシ但官
吏ノ處分上大ニ通常非現
行犯ノ場合ト異ナルコト
ルノミ
〔百一〕本條三箇ノ場合ニ
於テハ時機緊急處分ヲ速
ニセザル可カラズ故ニ犯
罪ノ日ヲ隔ルコト既コ久シ
キ者ト雖モ現行犯ニ准シ
テ取扱フナリ

第二節 現行犯罪

第百條 現行犯罪トハ現ニ行ヒ又ハ現ニ行ヒ
終リタル際ニ發覺シタル罪ヲ謂フ

第百一條 重罪輕罪ニ付キ左ノ場合ハ現行犯
ニ准ス
一 犯人トシテ一人又ハ數人ニ追呼セラレ
時

二 兇器贓物其他犯人ト思料ス可キ物件ヲ携
帶シタル時

三家宅内ニ於テ犯シタル罪ヲ檢證スル爲メ
又ハ其犯人ト思料ス可キ者ヲ逮捕スル爲
メ戶主ヨリ官吏ニ其處分ヲ求メタル時

第百二條 司法警察官及ヒ巡查其職務ヲ行フ
ニ當リ重罪輕罪ノ現行犯アルコトヲ知りタル
時ハ令狀又ハ命令ヲ待タスシテ被告人ヲ逮
捕ス可シ一八以下

違警罪ノ現行犯アルコトヲ知りタル時ハ被告
人ノ氏名住所ヲ問ヒ之ヲ違警罪裁判所檢察
官ニ告發ス可シ其氏名住所分明ナラス又ハ
逃亡ノ恐アル者ハ違警罪裁判所ニ引致スル
コトヲ得

第百三條 巡查被告人ヲ逮捕シタル時ハ速ニ
之ヲ司法警察官ニ引致ス可シ
其被告人ヲ受取リタル司法警察官ハ逮捕及

〔百一〕非現行犯ノ場合ニ
於テハ豫審判事ノ發シ
ル令狀アルニ非レハ被告
人ヲ逮捕スルコトヲ得ス現
行犯ニ付テハ令狀ヲ待ツ
ニ及ハズ是レ至大ナル差
異ナリ
違警罪ハ現行犯ニ係ルト
雖モ逮捕ヲ行フコトヲ許サ
ズ止テ其何人ナルヤヲ糾
シ置キ而シテ後公判ニ附ス
ルノ手續ヲ爲ス者トス

〔百二〕巡查逮捕ヲ行ヒタ
ル時ハ司法警察官ニ引致
シ告發ヲ爲ス可シ乃チ警
察官ハ逮捕ヲ爲シタル模
樣等ニ付キ調書ヲ作り又

其告發ノ調書ヲ作ル可シ
〔百四〕本條ノ處分ヲ爲スニハ第二百五條ノ規則ニ從フ

〔百五〕現行犯ニ付テハ常人ニシテ逮捕ヲ爲スノ權アリ

〔百六〕被告人ヲ逮捕シタル者ハ之ヲ巡查ニ引渡スルヲ得ルト雖モ後ニ至リ必ク速ニ告訴告發ヲ爲サシムル可カラズ是レ通常ノ場合ト異ナル所ナリ
被告人又ハ巡查ニ於テ共ニ官署ニ至ルヲ求メタル時ハ疾病又ハ急用アル

七告發ニ付テノ調書ヲ作ル可シ

第四百四條 司法警察官被告人ヲ逮捕シ又ハ之ヲ受取りタル時ハ假ニ被告人ノ訊問及ヒ檢證處分ヲ爲ス可シ

第四百五條 何人ニ限ラス重罪輕罪ノ現行犯アル場合ニ於テハ直チニ被告人ヲ逮捕スルヲ得

第四百六條 前條ノ場合ニ於テ被告人ヲ逮捕シタル者ハ之ヲ司法警察官ニ引致ス可シ若シ引致スルヲ得サル時ハ自己ノ氏名職業住所及ヒ其逮捕ノ事由ヲ陳述シ假ニ之ヲ巡查ニ引渡スヲ得

等正當ノ事由アルノ外ハ必ス其求メニ應ス可シトス

被告人ヲ巡查ニ引渡シタル時ハ速ニ告訴又ハ告發ヲ爲ス可シ 九三九七

被告人又ハ巡查ハ逮捕ヲ爲シタル者ニ對シ共ニ官署ニ至ルヲ求ムルヲ得但逮捕ヲ爲シタル者ハ正當ノ事由アルニ非サレハ其求ヲ拒ムヲ得ス

第二章 起訴

第一節 檢察官ノ起訴

第四百七條 檢察官ノ起訴ニ付テハ左ノ手續ヲ爲ス可シ 三四九二

一重罪ト思料シタル事件ニ付テハ豫審判事ニ豫審ヲ求ム可シ 一三三

檢察官ノ起訴トハ公訴ヲ起スヲ云フ

〔百七〕本條第一第二ノ場合ハ所謂起訴ナリ其他ハ起訴ト稱ス可カラズ
末項ノ公訴受理ス可カラザルトハ第九條ノ原由ニ因リ公訴消滅シ又ハ姦罪等告訴ヲ要スル場合ニ於

テ其告訴ナキヲ以テ受理
シ難キヲ云フ

二 輕罪ト思料シタル事件ニ付テハ其輕重難
 易ニ從ヒ豫審ヲ求メ又ハ直チニ輕罪裁判
 所ニ其訴ヲ爲ス可シ 一三三四七

三 違警罪ト思料シタル事件ニ付テハ證據書
 類ニ意見書ヲ添ヘ之ヲ違警罪裁判所檢察
 官ニ送致ス可シ

四 被告人ノ身分犯罪ノ種類又ハ場所ニ因リ
 其管轄ニ屬セサル者ト思料シタル事件ニ
 付テハ之ヲ管轄裁判所檢察官ニ送致ス可
 シ

被告事件罪ト爲ラス又ハ公訴受理ス可カラ
 サル者ト思料シタル時ハ起訴ノ手續ヲ爲ス

ス可カラス

第百八條 前條ノ場合ニ於テ被告事件告訴ニ
 係ル時ハ檢事ヨリ其處分ヲ被害者ニ通知ス
 可シ 九三

第百九條 檢事豫審ヲ求ムル時ハ證據及ヒ事
 實參考ト爲ル可キ事物ヲ送致シ且臨檢ス可
 キ場所逮捕ス可キ人名及ヒ原被ノ證人ト爲
 ル可キ者ヲ指示ス可シ 一〇七ノ一、二

第二節 民事原告人ノ起訴

第百十條 重罪輕罪ノ被害者公訴ニ附帶シテ
 私訴ヲ爲サントスル時ハ告訴ト共ニ之ヲ申
 立テ又ハ告訴ヲ爲シタル後其旨ヲ豫審判事

〔百八〕檢事起訴ヲ爲スト
 否トテ問ハス其處分ヲ被
 害者ニ通知スルハ其公訴
 ニ附帶シテ私訴ヲ爲シ又
 ハ民事裁判所ニ出訴スル
 ノ權アルヲ以テ何レノ道
 ニ就クヘキ乎ヲ知ルニ便
 ナラシムルナリ此通知ハ
 被告事件告訴ニ係ル場合
 ニ限ル者トス
 民事原告人ノ起訴トハ私
 訴ヲ指ス

〔百十〕民事原告人ト爲リ
 賠償返還ヲ要スルノ申立
 ハ告訴ト同時ニ爲スモ又
 其後ニ爲スモ自由ナリ但
 後ニ之ヲ爲スニハ必ス豫

審判事ニ申立ツ可シ
 豫審判事ニ於テ直接ニ此
 申立ヲ受ケル時ハ私訴ト
 共ニ公訴ヲ受理シタル者
 ト着做シ檢事ノ起訴ヲ待
 タス豫審ニ取掛ル可シ此
 場合ニ於テハ私訴ニ因テ
 公訴ヲ提起スルト云フ
 豫審判事私訴ヲ受ケル時
 ハ公訴モ亦從テ之ヲ受理
 シタル者ト定ムト雖モ法
 律ニ於テハ成ル可ク通常
 ノ手續ヲ行フヲ欲スルヲ
 以テ判事ヨリ其旨ヲ檢事
 ニ通知シ檢事ノ更ニ豫審
 ナ求ムルヲ望ムナリ
 〔百十一〕控訴ヲ許ス事
 件ハ始審ナリ許サ、ル者
 ハ終審ナリ其始審ナルコ
 セヨ終審ナルコセヨ裁判
 言渡アル迄ハ私訴ヲ爲ス

ニ申立ツ可シ 四七九四
 豫審判事直チニ被害者ヨリ民事原告人ト爲
 ル可キノ申立ヲ受ケタル時ハ檢察官ノ起訴
 ナシト雖モ公訴私訴ヲ併セテ受理シタル者
 トス
 豫審判事ハ何レノ場合ニ於テモ直チニ被害
 者ヨリ民事原告人ト爲ル可キノ申立ヲ受ケ
 タル時ハ其旨ヲ檢事ニ通知ス可シ
 第百十一條 被害者ハ公訴ノ本案ニ付キ始審
 終審ノ裁判言渡アルマテ何時ニテモ私訴ヲ
 爲シ若クハ其要ムル所ヲ變更スルヲ得
 又私訴ノ願下ヲ爲シタル後更ニ其申立ヲ爲

ヲ得言渡アリタル後ハ
 民事裁判所ニ出訴ス可シ
 是レ刑事裁判所ニ於テハ
 公訴事件ニ付キ關係ヲ脱
 カレタルヲ以テ其裁判所
 ニ出訴スルヲ得ルノ因
 縁アラサレハナリ
 〔百十二〕私訴及ヒ其願下
 等ハ代人ニ委任シテ之ヲ
 爲スヲ得ルト雖モ無能
 力者ハ固ト財産ヲ管理ス
 ルヲ能ハサルヲ以テ法律
 上ノ代人ニ爲サ、ル可
 カラス
 〔百十三〕重罪事件及ヒ輕
 罪ノ事情繁雜ナル者ニ付
 テハ必ス豫審ヲ行ヒ以テ
 證據ノ有無輕重ヲ取調フ
 可シ否ラヌシテ直チニ公
 判ニ付スル時ハ證據ノ不
 充分ナルカ爲メ遂ニ無罪

シ若クハ其要ムル所ヲ變更スルヲ得
 第百十二條 被害者ハ代人ニ委任シテ私訴ヲ
 爲シ又ハ其願下若クハ棄權ヲ爲スヲ得
 被害者無能力ナル時ハ法律ニ定メタル代人
 之ヲ爲ス可シ
 第三章 豫審
 第百十三條 現行ノ重罪輕罪ヲ除クノ外豫審
 判事ハ前章ニ定メタル規則ニ從ヒ檢事又ハ
 民事原告人ノ請求アルニ非サレハ豫審ニ取
 掛ルヲ得ス此規則ニ背キタル時ハ其請求
 ヨリ以前ニ係ル手續ノ效ナカル可シ一〇〇一、
 第百十四條 豫審判事ハ重罪輕罪ニ付キ直チ

ノ言渡ヲ爲スニ至ラン豫審ハ檢事又ハ民事原告人ノ起訴ニ因リ公訴起リタル時ニ非サレハ之ヲ行フコトヲ許サス但規行犯ノ場合ニ在テハ格別ナリ第百一十條ヲ參照ス可シ

〔百十四〕此條及ヒ後二條ノ規則ハ公訴起ラサルニ先チ取調ヲ爲スコトヲ許ス者ニシテ一大變則ナリトス

召喚狀ハ令狀ノ一ニシテ被告人ヲ呼出スニ用フ第百十八條ヲ見ル可シ

引續キ取調ヲ爲ストハ眞ニ犯罪アリト認メタルコトナリ

〔百十五〕勾引狀勾留狀ハ共ニ令狀ナリ次ノ節ニテ解説セシ

本條ノ規則ニ從ヒ豫審判

ニ告訴又ハ告發ヲ受ケタル時ハ召喚狀ヲ以テ被告人ヲ呼出シ之ヲ訊問スルコトヲ得若シ引續キ取調ヲ爲ス可キ者ト思料シタル時ハ其事件ヲ檢事ニ送致ス可シ

〔九三、九七、一一八〕

第百十五條 豫審判事ハ告訴告發ノ事件急速ヲ要スル時ハ直チニ被告人ニ對シ勾引狀ヲ發シ又ハ訊問シタル後勾留狀ヲ發スルコトヲ得此場合ニ於テハ速ニ其旨ヲ檢事ニ通知シ且證憑及ヒ事實參考ト爲ル可キ事物ヲ送致ス可シ

〔九三、九七、一一八〕

若シ其通知ヲ爲シタルヨリ一日内ニ檢事起訴ヲ爲サル時ハ速ニ被告人ヲ放免ス可シ

事件狀ヲ發スルト雖モ豫審未タ始マリタル者トモス故ニ檢事ノ起訴ナキ時ハ判事之ヲ奈何トモスルコト能ハス必ス被告人ヲ放免ス可キナリ

〔百十六〕被告人所在ノ地ハ犯罪ノ地ニ非ス因テ告訴告發ニ係ル事件ヲ管轄ス可キニ非サルナリ

然レモコ、ニハ事件急速ヲ要スルヲ以テ變例トシテ取調ヲ爲スコトヲ許ス

〔百十七〕檢事ハ判事ニ對シ取調ヲ求ムルノ職アリ

但後日起訴ヲ爲スル妨礙ト爲ルコトナカル可シ

第百十六條 被告人所在ノ地ノ豫審判事直チニ告訴告發ヲ受ケ又ハ檢事ヨリ其送致ヲ受ケ被告事件急速ヲ要スル時ハ通常ノ規則ニ從ヒ被告人ノ訊問又ハ檢證處分ヲ爲シタル後證憑及ヒ事實參考ト爲ル可キ事物ヲ犯罪ノ地ノ豫審判事ニ送致ス可シ

〔九三、九七〕

若シ禁錮以上ノ刑ニ該ル可キ者ト思料シタル時ハ勾留狀ヲ以テ被告人ヲ送致スルコトヲ得

〔一一六〕

第百十七條 檢事ハ豫審中何時ニテモ豫審判

其求ヲ爲サントスルハ
訴訟書類ヲ檢閲セサル可
ガラス故ニ其檢閲ヲ求ム
ルノ權アリトス

事ニ請求シテ訴訟書類ヲ檢閲スルヲ得但
二十四時内ニ之ヲ還付ス可シ 三四
又必要ナリトスル處分ニ付キ臨時其請求ヲ
爲スヲ得

第一節 令狀

令狀ニ四種アリ召喚狀ハ
被告人ヲ呼出スニ用ユル
者ニシテ力ヲ用ヒス勾留
狀ハ力ヲ用ヒテ被告人ヲ
法廷ニ引致シ勾留狀收監
狀ハ公力ヲ用ヒテ或ハ勾
留場ニ留置シ或ハ永ク収
監スル者ナリ

第百十八條 豫審判事ハ檢事又ハ民事原告人
ノ起訴ニ因リ重罪輕罪ノ事件ヲ受理シタル
時ハ被告人ニ對シ先ツ召喚狀ヲ發ス可シ但
召喚狀ノ送達ト被告人出廷トノ間少クトモ
二十四時ノ猶豫アル可シ一〇七ノ一、
召喚狀ニ因リ出廷シタル被告人ハ即時ニ之
ヲ訊問ス可シ又遅クトモ出廷ノ日ヲ過クル

〔百十九〕被告人營外ニ在
ル時ハ其地ノ書記ニ囑託
シテ召喚狀ヲ送達スルモ
又其地ノ豫審判事ニ訊問
ノ事ヲ依頼スルモ妨ケナ
キ者トス

〔百二十一〕本條三箇ノ場
合ニ於テハ何レモ正當ナ
ル嫌疑アルヲ以テ召喚狀
ヲ發セスシテ先ツ勾引狀
ヲ發スルヲ許スナリ
未遂罪ノ解ハ刑法第百十
二條ニ見ヘタリ即チ罪ヲ

ヲ得ス

第百十九條 豫審判事ハ召喚狀ヲ受ク可キ被
告人其管轄地内ニ住セサル時ハ訊問ス可キ
條件ヲ明示シテ被告人所在ノ地ノ豫審判事
ニ其處分ヲ囑託スルヲ得 六一

第百二十條 豫審判事ハ召喚狀ヲ受ケタル被
告人其日時ニ出延セサル時ハ勾引狀ヲ發ス
ルヲ得

第百二十一條 豫審判事ハ左ノ場合ニ於テ直
チニ勾引狀ヲ發スルヲ得

- 一 被告人定リタル住所アラサル時
- 二 被告人罪證ヲ湮滅シ又ハ逃亡スルノ恐ア

犯サントシテ己ニ其事ヲ行フト雖モ意外ノ障礙又ハ舛錯ニ因リ其罪ヲ遂ケサル者ヲ云フ
脅迫罪トハ刑法第三百二十六條ニ定メタル罪ヲ云フ

仍ホ其目的ヲ遂ケントスルトハ未遂罪ナレハ更ニ其事ヲ行ヒ以テ前ニ企圖シタル所ノ罪ヲ遂ケ脅迫罪ナレハ其脅迫シタル事即チ殺傷放火等ヲ行ハントスルノ恐レアルヲ云フ
〔百二十二〕勾引狀執行ノ命ヲ受ケタル者ハ巡查ナリ
勾引狀ハ之ヲ執行シタルヨリ四十八時間其效力ヲ有ス四十八時ヲ過クルニ於テハ秩放ヲ爲スカ又ハ勾留狀ヲ發スルカ何レカ

ル時

三被告人未遂罪又ハ脅迫罪ヲ犯シ仍ホ其目的ヲ遂ケントスルノ恐アル時

第二百二十二條 勾引狀執行ノ命ヲ受ケタル者ハ其令狀ヲ發シタル豫審判事ニ被告人ヲ引致ス可シ 一三〇

勾引狀ヲ以テ引致シタル被告人ハ四十八時内ニ之ヲ訊問ス可シ若シ其時間ヲ經過スル時ハ勾留狀ヲ發スルニ非サレハ當然之ヲ釋放ス可シ

第二百二十三條 勾引狀ヲ發シタル前被告人既ニ豫審判事ノ管轄地外ニ在ル時ハ被告人ヨ

其處分ヲ爲ス可シ
〔百二十二〕勾引狀ヲ發シタル前被告人既ニ其令狀ヲ發シタル豫審判事ノ管轄地外ニ在ルハ其令狀ノ發セラレタルヲ知リ逃亡シタルニ非ス他ニ正當ノ事故アリテ其地ニ在ル者ト推測セサル可カラス故ニ直チニ之ヲ勾引セス其所在ノ地ノ豫審判事ノ取調ヲ求ムルヲ許ス

リ其所在ノ地ノ豫審判事ノ取調ヲ求ムルヲ得其求ヲ受ケタル豫審判事ハ假ニ被告人ヲ勾留シ速ニ勾引狀ヲ發シタル豫審判事ニ其旨ヲ通知ス可シ

第二百二十四條 前條ノ場合ニ於テ勾引狀ヲ發シタル豫審判事ハ被告人ヲ勾留シタル豫審判事ニ訊問ノ條件ヲ明示シテ其處分ヲ囑託シ又ハ前ニ發シタル勾引狀ヲ以テ被告人ヲ送致ス可キヲ請求ス可シ 六一

其囑託ヲ受ケタル豫審判事ハ被告人ヲ訊問シタル後其旨ヲ勾引狀ヲ發シタル豫審判事ニシ其通知意見ヲ聽キ被告人ヲ放免シ又ハ

〔百二十六〕勾留狀ハ人ノ自由ヲ停止スルヲ十日ニ及フ者ナルヲ以テ容易ニ之ヲ發スルヲ許サスニ應訊問ヲ爲シ其事件禁錮以上ノ刑ニ該ル可キトスルニ非サレハ發スルヲ得

前ニ發シタル勾引狀ヲ以テ管轄豫審判事ニ送致ス可キノ言渡ヲ爲ス可シ

第百二十五條 豫審判事ハ召喚狀又ハ勾引狀ヲ受ケタル被告人疾病其他正當ノ事由アリテ令狀ニ應スル能ハサルヲ證明シタル時ハ被告人ノ所在ニ就テ之ヲ訊問スルヲ得若シ被告人其管轄地外ニ在ル時ハ其所在ノ地ノ豫審判事ニ訊問ノ事ヲ囑託ス可シ
第百二十六條 勾留狀ハ被告人逃亡シ又ハ第百二十三條ノ場合ヲ除クノ外被告人ヲ訊問シタル後禁錮以上ノ刑ニ該ル可キ者ト思料スルニ非サレハ之ヲ發スルヲ得ス

得ス但被告人逃亡シタル時ハ其訊問ヲ行フヲ能ハサルヲ以テ之ヲ例外トシ又第百二十三條ノ場合ハ格別ナリ
〔百二十七〕勾留狀ハ十日間ノ効力アリ勾留狀ヨリ長キヲ殆ト五倍トス責付トハ被告人ヲ監察シテ其逃亡ヲ防ク可キノ約ヲ爲サシノ之ヲ其親屬又ハ故舊ニ引渡スヲナリ
〔百二十八〕収監狀ニ付テハ期限ナク永遠ニ及フノ効アリ故ニ之ヲ發スルハ必ス深ク取調ヲ爲シタル後ニシテ且檢事ノ意見ヲ聽カサル可カラス
〔百二十九〕加重減輕ノ模様トハ再犯加重其他法律ニ定ムタル特別ノ加重及ヒ宥恕減輕自首減輕等ヲ

第百二十七條 豫審判事ハ勾留狀ヲ執行シタルヨリ十日ヲ過クル時ハ之ヲ収監狀ニ換ヘ若クハ第百二十九條ノ規則ニ從ヒ被告人ヲ責付ス可シ
檢事ハ被告人ヲ責付スルヲナク更ニ十日間之ヲ勾留ス可キヲ豫審判事ニ求ムルヲ得
第百二十八條 収監狀ハ既ニ取掛リタル豫審ノ手續ヲ檢事ニ通知シ且其意見ヲ聽キタル後ニ非サレハ之ヲ發スルヲ得ス
第百二十九條 収監狀ニハ左ノ條件ヲ記載ス可シ
一 被告事件ノ概略及ヒ加重減輕ノ模様アル

云々

〔百二十〕被告事件ヲ記載スルハ被告人ヲシテ其訴ヘテレタル事件ノ何タルヲ知ラシメ以テ其辯護ノ豫備ヲ爲スノ用ニ供スルナリ

氏名職業等ヲ記載スルハ八達ヒナキト保スル爲メナリ

勾引狀勾留狀収監狀ハカヲ用ヒテ執行ス故ニ巡查ニ渡シ執行ヲ爲サシム

〔百三十一〕召喚狀ハカヲ用ヒテ通常ノ規則ニ從ヒ

時ハ其概畧

二其罪ヲ罰ス可キ法律ノ正條
三檢察官ノ意見ヲ聽キタルヲ

第百三十條 總テ令狀ニハ被告事件及ヒ被告人ノ氏名職業住所ヲ記載ス可シ但召喚狀ヲ除クノ外其氏名分明ナラサル時ハ容貌體格等ヲ明示ス可シ

又令狀ニハ之ヲ發スルノ年月日時ヲ記載シ豫審判事及ヒ書記署名捺印ス可シ

勾引狀勾留狀収監狀ハ巡查ヲシテ之ヲ執行セシム

第百三十一條 召喚狀ハ第二十三條ノ規則ニ

之ヲ被告人ニ送達ス

〔百三十二〕豫審判事ノ職權ハ其管轄地外ニ及ハサルモ其發スル所ノ令狀ハ全國中何レノ地ニ於テモ之ヲ執行スルノ効力アリ是レ一裁判所ノ判決全國ニ其効ヲ及ホスト同一ナリ

〔百三十三〕家宅ハ侵ス可カラサルノ巢窟ナリト雖モ令狀執行ニ當リテハ侵入スルヲ許ス但戸長若クハ隣佑二名以上ノ者ヲ立會ハシメ以テ專横ノ處置アルヲ防シ

從ヒ書記局所屬ノ使丁ヲシテ被告人又ハ其住所ニ之ヲ送達セシム

第百三十二條 勾引狀勾留狀収監狀ハ日本全國ニ於テ之ヲ執行ス但時宜ニ因リ正本數通ヲ作り巡查數人ニ分付スルヲアル可シ

前項ノ令狀ヲ執行スルニハ被告人ニ正本ヲ示シ其謄本ヲ下付ス可シ此場合ニ於テハ第二十三條第二項第四項ノ規則ニ從テ

第百三十三條 令狀執行ノ命ヲ受ケタル巡查ハ被告人其家宅若クハ他人ノ家宅ニ潛匿シタルト思料シタル時ハ其地ノ戸長又其差支アル時ハ隣佑二名以上ノ立會ヲ求メ之ヲ搜

日出前日没後ニ於テ家宅
搜索ヲ許ス時ハ或ハ言フ
可カラサルノ弊ヲ生ゼン
故ニ之ヲ禁ス但巡查ハ其
家宅ヲ圍ミ被告人ノ逃走
ヲ防シハ妨ナシ

〔百三十四〕巡查令狀ヲ帶
行シテ他管ニ至ルモ自ラ
之ヲ執行スルコトヲ得ヌ必
ズ其地ノ官吏ニ令狀ヲ示
シテ執行ヲ求ム可シ是レ
令狀ハ各地ニ其效ヲ及ホ
スト雖モ巡查ノ職權ハ他
管ニ及ハサレハナリ

索ス可シ
巡查ハ被告人ヲ發見シタルト否トニ拘ハラ
ス搜索調書ヲ作り立會人ト共ニ署名捺印ス
可シ

家宅搜索ハ日出前日没後之ヲ爲スコトヲ得ス

第百三十四條 豫審判事ハ被告人他ノ管轄地
内ニ潛匿シタルコトヲ知り又ハ潛匿シタリト
思料シタル場合ニ於テ被告事件急速ヲ要ス
ル時ハ巡查ニ令狀ヲ帶行セシムルコトヲ得
巡查ハ被告人所在ノ地ノ豫審判事檢事又ハ
司法警察官ニ令狀ヲ示シテ即時ニ執行ヲ求
ム可シ

〔百三十五〕被告人ノ所在
知レサル時ハ入相書ヲ各
地ニ移シテ百方搜索セシ
メサル可カラヌ是レ亦自
然ノ事ナリトス

〔百三十六〕令狀ハ軍門内
ニ於テ直チニ之ヲ執行ス
ルコトヲ得ヌ必ズ其長官ノ
認可ヲ經ルヲ要ス
己ムコトヲ得サル差支トハ
對抗運動又ハ觀兵式ヲ行
フ等ノ理由ニ因リ其軍人
軍屬ヲ關シ可カラサル者
ヲ云フ

第百三十五條 豫審判事ハ被告人所在ノ地ヲ
覺知スルコト能ハサル時ハ各控訴裁判所檢事
長ニ被告人ノ人相書ヲ送致シ搜索及ヒ逮捕
ヲ爲スコキコトヲ請求スルヲ得
請求ヲ受ケタル檢事長ハ其管轄地内ノ檢事
ヲシテ搜索及ヒ逮捕ノ處分ヲ爲サシム可シ
第百三十六條 陸海軍在營ノ軍人軍屬ニ對シ
令狀ヲ發シタル時ハ所屬長官ニ令狀ヲ示ス
可シ長官ハ己ムコトヲ得サル差支アルニ非サ
レハ本人ヲシテ速ニ令狀ニ應セシム可シ其
行軍ノ際亦同シ
第百三十七條 勾留狀又ハ収監狀ヲ受ケタル

〔百三十七〕監倉ニ引致ス

ルコ能ハストハ日己ニ没
スルモ路猶ホ遠キ等ノ場
合ヲ指ス

〔百二十九〕在監在獄ノ被
告人ニ對シ勾留狀収監狀

被告人ハ速ニ其令狀ニ記載シタル監倉ニ引
致ス可シ若シ其監倉ニ引致スルコト能ハサル
時ハ假ニ最近ノ監倉ニ引致スルコトヲ得
何レノ場合ニ於テモ監倉長ハ令狀ヲ檢閲シ
テ被告人ヲ受取り其證書ヲ渡ス可シ

第三百三十八條 令狀執行ノ命ヲ受ケタル巡査

ハ之ヲ執行シタルコト又執行スルコト能ハサル

時ハ其事由ヲ令狀ノ正本ニ記載ス可シ

三三三、
三三四、

巡査ハ令狀執行ニ關スル書類ヲ書記局ニ差

出シ書記ハ其受取證書ヲ渡ス可シ

第三百二十九條 勾留狀又ハ収監狀ヲ受ク可キ

ヲ發スルモ別ニ力ヲ用フ
ルコトナシ故ニ書記ヲシテ
送達ヲ爲サシム

〔百四十〕密室監禁ノ何タ
ルコトハ次節ニ詳ナリ未決
勾留中ノ被告人ハ監獄ノ
規則ニ從ヘハ何時ニテモ
其親屬朋友等ニ接見スル
コトヲ許ス

書類ハ隨意ニ外人ト被告
人ト授受スルコトヲ許ス時
ハ或ハ相通謀シテ罪證ヲ
湮滅スル等ノ恐アリ故ニ
一々豫審判事ノ檢閲ヲ經
可キ者トス而シテ判事ハ後
日ノ證憑ト爲ル可キ者ト
思料スル時ハ其書類ヲ自
己ノ手ニ留置クノ權アリ
〔百四十一〕禁錮以上ノ刑

被告人既ニ監倉若クハ獄舎ニ在ル時ハ書記
ヨリ之ヲ本人ニ送達シ其旨ヲ正本及ヒ謄本
ニ記載ス可シ

第四百十條 密室監禁ノ場合ヲ除クノ外被告

人ハ監獄則ニ從ヒ官吏ノ立會ニ依リ其親屬

故舊又ハ代言人ニ接見スルコトヲ得

書翰書籍其他ノ書類ハ豫審判事ノ檢閲ヲ經

タル後ニ非サレハ被告人ト外人ト之ヲ授受

スルコトヲ許サス但豫審判事ハ其書類ヲ留置

クコトヲ得

第四百十一條 豫審判事ハ被告事件禁錮以上

ノ刑ニ該ル可キ者ニ非スト思料シタル時ハ

ニ該ラサル事件ニ付テハ法律上逮捕拘留スルヲ許サズ故ニ本條ノ場合ニ於テハ勾留狀又ハ收監狀ヲ取消サハル可カラズ其収監狀ヲ取消スニ付キ檢事ノ意見ヲ聽クハ曾テ該狀ヲ發スルニ付キ其意見ヲ聽キタルヲ以テナリ

〔百四十二〕刑法治罪法ヲ監倉ニ備置キ被告人ニ貸與ズルハ法律ヲ知ラザルヨリシテ辨護ヲ尽スル能ハサルノ憾ナカラシムル爲メナリ

〔百四十二〕未決勾留中ノ被告人容易ニ他人ト接シ又他ノ被告人ト共ニ之ヲ一室ニ置ク時ハ大ニ弊害ヲ生スルヲ以テ故ニ其恐アル時ハ一人ヲ一室ニ監禁シ他人ト交通スルヲ能

豫審中何時ニテモ勾留狀又ハ收監狀ヲ取消ス可シ但收監狀ヲ取消ス時ハ豫メ檢察官ノ意見ヲ聽ク可シ

第二百四十二條 監倉ニハ刑法治罪法ヲ備置キ被告人ノ請求ニ從ヒ之ヲ貸與ス可シ

第二節 密室監禁

第二百四十三條 豫審判事ハ豫審中事實發見ノ爲メ必要ナリト思料シタル時ハ檢事ノ請求ニ因リ又ハ職權ヲ以テ勾留狀若クハ收監狀ヲ受ケタル被告人ヲ密室ニ監禁スルノ言渡ヲ爲スヲ得

第二百四十四條 密室監禁ノ言渡ヲ受ケタル被

ハサラシム之ヲ密室監禁ト稱ス

〔百四十四〕其他監倉ヨリ給ス可キ物品トハ衣服紙片等ヲ云フ

〔百四十五〕密室監禁ハ被告人ノ自由ヲ停止スルヲ尤モ甚クシキ者ナリ故ニ其期限ヲ十日ト定ム然レモ事實發見ノ爲メ眞ニ必要ナル時ハ更ニ其言渡ヲ爲シ引續キ交通ヲ絶ツヲ得但其事由ヲ裁判所長ニ報告セシメ以テ豫審判事ノ專横ヲ防ク

告人ハ一名毎ニ之ヲ別室ニ置キ豫審判事ノ允許ヲ得ルニ非サレハ他人ト接見シ又ハ書類貨幣其他ノ物品ヲ授受スルヲ許サズ

食物飲料藥餌其他監倉ヨリ給ス可キ物品ト雖モ監倉長ノ特ニ指名シタル者ヲシテ之ヲ給與セシム

第二百四十五條 密室監禁ハ十日ヲ超過ス可カラズ但十日毎ニ其言渡ヲ更改スルヲ得

言渡ヲ更改スル時ハ其事由ヲ裁判所長ニ報告ス可シ

豫審判事ハ十日間ニ少クトモ二度被告人ヲ訊問シ通常ノ規則ニ從ヒ調書ヲ作ル可シ

〔百四十六〕民事ニ於テハ法律上ノ推測アリ妻ノ生ミタル子ハ其夫ノ子トスルノ類刑事ニ於テハ決シテ法律上有罪ノ推測ヲ爲スコトナシ

被告人ノ白狀等總テノ證據憑ハ裁判官必ス之ニ依テ裁判ヲ爲ス可シト命スルコトナシ惟裁判官ノ心ニ感スル所ニ從ヒ判定ヲ爲サシム之ヲ稱シテ心證ニ依テ裁判ヲ爲スト云フ〔百四十七〕證據トハ直接ニ罪ノ有無ヲ證スル者ヲ云フ證人ニ於テ被告人ノ犯罪ヲ目撃シタリト陳述スルノ類證據ハ其力較々薄シ犯所ニ存スル足跡被被告人ノ足跡ト符合スルノ類

〔百四十八〕豫審判事豫審

第三節 證據

第四百十六條 法律ニ於テハ被告事件ノ模様ニ因リ有罪ナルノ推測ヲ定ムルコトナシ

被告人ノ白狀官吏ノ檢證調書證據物件證人ノ陳述鑑定人ノ申立其他諸般ノ證據ハ裁判官ノ判定ニ任ス

第四百十七條 豫審判事ハ檢察官民事原告人被告人ノ請求ニ因リ又ハ職權ヲ以テ事實發見ノ爲メ必要ナリトスル證據證據ヲ集取ス可シ

第四百十八條 豫審判事臨檢家宅搜索物件差押又ハ被告人証人ノ訊問ヲ爲スニハ書記ノ

處分ヲ爲スニ付キ書記ノ立會ヲ必要トスル者ハ其處分ノ公正ニシテ法律ニ背カザルノ信憑ヲ堅フセシカ爲メナリ蓋シ一人ニシテ處分ヲ爲ス或ハ專横ニ涉ルノ恐アリ傍ニ書記アリ調書ヲ作り以テ其處分ノ如何ヲ記録スル時ハ決シテ此恐ナシ

〔百四十九〕豫審ハ被告人ノ訊問ヲ以テ第一着手ト

立會ヲ必要トス書記ハ調書ヲ作り豫審判事ト共ニ署名捺印ス可シ三七、一四九、一五八、一六〇以下裁判所外ニ於テ急速ノ際書記ノ立會ヲ得ルヲ能ハサル時ハ立會人二名アルヲ要ス但監倉ニ就テ被告人ヲ訊問スル時ハ其監倉ノ官吏一名ヲシテ立會ハシム可シ

第四節 被告人ノ訊問及ヒ對質

第四百十九條 豫審判事ハ先ツ被告人ヲ訊問

〔百四十九〕豫審ハ被告人ノ訊問ヲ以テ第一着手ト

爲大可シ然レ地地上ノ足跡消散スルノ恐アルヲ以テ之ヲ檢證シ又證人遠ク海外ニ航スルヲ以テ速ク之ヲ訊問ス可キ等總テ至急ヲ要スル事件ハ先ツ之ヲ行フ可シ
〔百五十〕恐嚇トハ白狀セサルコト於テハ拷訊ヲ用フヘシト云ヒ被告人ヲ恐怖セシムルノ類詐言ヲ用フルトハ共犯捕ニ就キ尽ク其罪ヲ白狀シタリト詐リ稱スルノ類

ス可シ但檢證ヲ爲シ又ハ證人ヲ訊問スルニ付キ急速ヲ要スル時ハ此限ニ在ラス
第一百五十條 豫審判事ハ被告人ヲシテ其罪ヲ白狀セシムル爲メ恐嚇又ハ詐言ヲ用フ可カラズ

第一百五十一條 書記ハ訊問及ヒ陳述ヲ錄取シ被告人ニ之ヲ讀聞カス可シ 三七
豫審判事ハ被告人ニ其陳述ノ相違ナキヤ否ヲ問ヒ署名捺印セシム可シ若シ署名捺印スルコト能ハサル時ハ其旨ヲ附記ス可シ
書記ハ本條ノ式ヲ履行シタルコトヲ記載シ豫審判事ト共ニ署名捺印ス可シ

〔百五十二〕被告人前言ヲ變更増減セント申立ル時ハ再ヒ訊問ヲ爲ス可シ其前後ノ陳述ニ因リ事實ヲ得ルノ利アル可シ

〔百五十四〕豫審ハ密行スル者ナリト雖モ必要ナル時ハ被告人ト他ノ者ト相對シテ質疑辯論セシムルナリ

〔百五十五〕對質ヲ爲サシムル時ト雖モ其對質ニ關

第一百五十二條 被告人其陳述ニ付キ變更増減ス可キコトヲ申立タル時ハ更ニ訊問ヲ爲シ前條ノ規則ニ從ヒ其訊問及ヒ陳述ヲ錄取シ之ヲ讀聞カセ署名捺印ス可シ
第一百五十三條 被告人ハ陳述書ノ謄本ヲ求めルコトヲ得

第一百五十四條 豫審判事ハ被告人ノ共犯ナルコト人違ナキコト其他事實ヲ發見ス可キ一切ノ模様ヲ證スル爲メ必要ナリトスル時ハ被告人ト他ノ被告人證人又ハ其他ノ者ト對質セシムルコトヲ得 一八四、

第一百五十五條 書記ハ對質人ノ陳述及ヒ對質

スル部分ヲ讀聞カスニ止
マリ餘ハ皆秘シ置ク者ト
ス是レ豫審ノ性質ナリ

〔百五十六〕聾者文字ヲ解
スル時ハ書面ヲ以テ問ヒ
之ニ答ヘシム哑者ハ口ヲ
以テ問ヒ其文字ヲ解スル
時ハ書面ニテ答ヘシム共
ニ文字ヲ知ラサルニ於テ
ハ通事ヲ命シ手標等ヲ以
テ事ヲ通セシム

〔百五十七〕宣誓ハ其言ノ
正實ヲ保スル爲メニ爲サ
シムル所ナリ以下皆同シ

ニ因リ生スル一切ノ事件ヲ錄取シ對質人ニ
其對質ニ關スル部分ヲ讀聞カス可シ 三七
第五百一十一條 第五百十二條ノ規則ハ對質ニ
付テモ亦之ヲ適用ス

第五百十六條 被告人又ハ對質人聾ナル時ハ
書面ヲ以テ問ヒ哑ナル時ハ書面ヲ以テ答ヘ
シム若シ聾者哑者文字ヲ知ラサル時ハ通事
ヲ命ス可シ

被告人又ハ對質人國語ニ通セサル時亦同シ
第五百十七條 通事ハ正實ニ通譯ス可キノ宣
誓ヲ爲ス可シ 一八〇、

書記ハ通事ニ調書ヲ讀聞カセ之ニ署名捺印

セシム可シ

第九十二條 第九十三條 第二百條ノ規則
ハ本條ニモ亦之ヲ適用ス

第五節 檢證及ヒ物件差押

第五百十八條 豫審判事ハ事實發見ノ爲メ必
要ナリトスル時ハ重罪輕罪ノ犯所ニ臨ミ檢
證ヲ爲ス可シ

又檢事ノ請求アリタル時ハ如何ナル場合ト
雖モ臨檢ス可シ

第五百十九條 豫審判事ハ犯罪ノ性質方法日
時場所及ヒ被告人ノ人違ナキヲ證明ス可
キ模様ニ付キ調書ヲ作ル可シ

〔百五十八〕犯所ニ臨ミ檢
證ヲ爲ストハ其場所ノ景
狀ヲ檢視シ罪ヲ犯スノ方
法ハ如何ナリヤ犯人ハ
如何シテ逃亡セシヤ等ヲ
逐一取調ヘ其證據ヲ取集
ムルヲ云フ

〔百五十九〕犯罪ノ性質ト
ハ強盜ナルカ竊盜ナルカ
又謀殺カ故殺カ其罪ノ固
有ノ性質ヲ云フ方法トハ
門戸ヲ踰越シテ家宅ニ入

リタルカ破壊ノ入カカル
又刃刃ヲ以傷ケタルカ棍
棒ヲ以傷ケタルカ等其罪
ヲ犯スノ手立ヲ云フ
被告人ノ利益ト爲ル可キ
模様トハ其無罪ト爲リ又
ハ其罪ヲ輕シス可キ情狀
ヲ云フ
豫審判事ハ罪ノ有無輕重
ノ証ト爲ル可キヲ取調
フルノ任アリ故ニ被告人
ノ利ト爲リ害ト爲ル可キ
一切ノ模様ヲ詳悉セサル
可カラズ
〔百六十〕物件ノ出所ニ因
リ被告人ノ人違ナキヲ知
ルトハ犯所ニ遺シタル
物件ノ所有主被告人ナル
時ハ其犯人ニ相違ナキノ
推測ヲ生スルノ類ヲ云フ
物件重大ニシテ運搬難
キ時ハ其地ニ於テ監護セ

又被告人ノ利益ト爲ル可キ模様ヲモ記載ス
可シ

第百六十條 豫審判事ハ臨檢ノ場所ニ於テ發
見シタル物件其出所及ヒ模様ニ因リ被告人
ノ人違ナキヲ又ハ犯罪ノ模様ヲ知ルニ足ル
可シト思料シタル時ハ之ヲ差押ヘテ認印ヲ
爲シ目錄ヲ作ル可シ但其物件ヲ監護シ又ハ
遞送スルハ書記之ヲ擔任ス可シ 一八四

第百六十一條 豫審判事ハ臨檢家宅搜索物件
差押ニ付キ其日ニ處分ヲ終ラサル時ハ場所
ノ周圍ヲ閉鎖シ又ハ看守者ヲ置クヲ得
第百六十二條 豫審判事ハ被告人ノ住所又ハ

シノ運搬スルヲ得ル時
ハ之ヲ書記局ニ遞送セシ
ム
〔百六十一〕場所ノ周圍ヲ
閉鎖シ又ハ看守者ヲ置ク
ハ他人ノ濫入及ヒ物件等
ヲ他ニ出スヲ防クカ爲
メナリ
〔百六十二〕家宅臨檢ノ場
合ニ於テ同居ノ親屬若シ
ハ戸長ヲ立會ハシムルハ
豫審判事他ヨリ嫌疑ヲ受
ケサル爲メニシテ其處分
ノ正實ナルヲ保スル者
ナリ
〔百六十三〕勾留ヲ受クル
被告人ハ臨檢等ノ處分ニ
立會フヲ許サズ若シ之
ヲ許ス時ハ其逃亡ヲ招ク
ノ恐アレハナリ

事實ヲ證明ス可キ物件ヲ藏匿スルノ疑アル
者ノ住所ニ臨檢スルヲ得

被告人又ハ物件ヲ藏匿スル者其住所ニ在ラ
サル時ハ同居ノ親屬若シ其在ラサル時ハ戸
長ノ立會アルヲ要ス

第百三十三條第三項ノ規則ハ本條ニモ亦之
ヲ適用ス

第百六十三條 被告人ハ臨檢家宅搜索ノ處分
ニ立會ヒ又ハ代人ヲシテ立會ハシムルヲ得

若シ被告人勾留ヲ受ケタル時ハ自ラ立會フ
ヲ得ス但豫審判事本人ノ立會ヲ必要ナリ

〔百六十四〕家宅搜索ノ場合トハ第百六十二條ノ場合ヲ指ス

〔百六十五〕差押ヘタル物件ハ何レモ犯罪ニ關係アリテ證據ト爲ル可キ物ナリ故ニ之ヲ被告人ニ示シ辯解セシム其當否如何ニ

トスル時ハ此限ニ在ラス

民事原告人及ヒ其代人ハ前ニ記載シタル處分ニ立會フヲ得但豫審判事ハ其立會ノ爲メ豫審ヲ遲延ス可カラス

第百六十四條 家宅搜索ノ場合ニ於テ豫審判事ハ第百六十條ノ規則ニ從ヒ物件ヲ差押フ可シ

物件ヲ差押ヘタル時ハ其目錄ノ謄本ヲ立會人ニ渡ス可シ

第百六十五條 豫審判事ハ被告人物件差押ノ處分ニ立會ヒタルト否トヲ問ハス其物件ヲ被告人ニ示シ辯解ヲ爲サシム可シ

因リ罪ノ有無ヲ推知スルコトヲ得ルヲ以テナリ

其訊問及ヒ陳述ハ之ヲ調書ニ記載ス可シ

第百六十六條 豫審判事ハ臨檢ノ場所ニ於テ證人ノ陳述ヲ聽クヲ必要ナリトスル時ハ書記ノ立會ニ依リ各別ニ之ヲ訊問ス可シ
第百七十條以下ノ規則ハ本條ニモ亦之ヲ適用ス

〔百六十七〕臨檢家宅搜索ノ場合ニ於テ他人其場所ニ濫入シテ處分ヲ妨ケ又ハ其場所ニ在ル者濫ニ離散シテ立會ヲ爲サハルヲナシトセス此場合ニ於テハ入ル者ヲ逐斥シ出ル者ヲ留置スルヲ得

第百六十七條 豫審判事ハ前數條ニ記載シタル處分中何人ニ限ラス允許ヲ得スシテ其場所ニ出入スルヲ禁スルヲ得

〔百六十八〕豫審判事ノ管轄地内ト雖モ判事自ラ臨

處分ヲ終ルマテ之ヲ留置スルヲ得
第百六十八條 豫審判事ハ其管轄地内ト雖モ

檢家宅搜索ヲ爲スコト必
要トス事件重大ナラズ且
其處分ヲ爲ス可キ場所遠
隔スル時ハ治安判事ニ囑
託スルコトヲ許ス
〔百六十九〕通信ノ秘密ハ
容易ニ侵ス可カラザル者
ナリト雖モ治罪上必要ナ
リトスル時ハ書類電報又
ハ物件ヲ開披スルコトヲ許
ス是レ亦已ムコトヲ得ザル
ニ出ル者トス

〔百七十〕檢事民事原告人
又ハ被告人ヨリ證人トシ

時宜ニ因リ臨檢家宅搜索ノ事ヲ其地ノ治安
判事ニ囑託スルコトヲ得

第百六十九條 豫審判事ハ事實發見ノ爲メ必
要ナリトスル時ハ驛遞電信鐵道ノ官署諸會
社ニ其事由ヲ通知シ被告人又ハ豫審ニ關係
アル者ヨリ發シ若クハ是等ノ者ニ對シ發シ
タル書類電信又ハ物件ヲ受取開披スルコトヲ
得但受取證書ヲ渡ス可シ
前項ノ書類物件不用ニ屬シタル時ハ其官署
又ハ會社ニ還付ス可シ

第六節 證人訊問

第百七十條 豫審判事ハ檢事民事原告人又ハ

テ指名シタル者夥多ナル
時ハ一時ニ皆之ヲ呼出シ
訊問スルコトヲ得ス故ニ事
件ノ輕重ニ從ヒ原被ノ証
人五名ツ、又ハ十名ツ、
ヲ先ツ呼出シ其訊問ヲ爲
シタル後餘ノ証人ヲ呼出
ス可シ
証人ト爲ル可キ者ハ特ニ
犯罪ヲ目撃シ又ハ開知シ
タル者ニ限ラス犯罪前後
ノ模様ヲ知り又ハ被告人
ノ素行ヲ知ル者ハ皆証人
トシテ訊問ス可シ若シ然
ラハ大ニ事實ヲ得ルコト
ヲ得

被告人ヨリ證人トシテ指名シタル者ヲ呼出
ス可シ

原告證人被告證人ノ員數夥多ナル時ハ指名
ノ順序ニ從ヒ又ハ最モ事實ヲ知ル可シト思
料シタル者輕罪事件ニ付テハ各五名重罪事
件ニ付テハ各十名ヲ限り先ツ之ヲ呼出ス可
シ但事實發見ノ爲メ必要ナリトスル時ハ此
限ニ在ラス

又原被ノ指名セサル者ト雖モ豫審判事ノ職
權ヲ以テ證人トシテ之ヲ呼出スコトヲ得

第百七十一條 證人ハ豫審判事ノ名ヲ以テ之
ヲ呼出ス可シ但其呼出狀ハ第二十三條ノ規

〔百七十二〕證人遠隔ノ地ニ在ル時ハ直チニ之ヲ呼出スモ又ハ其地ノ治安判事ニ囑託シテ訊問ヲ爲サシムルモ豫審判事ノ所見ニ任ス
又管轄地外ニ在ル時ハ其所在ノ地ノ書記ニ囑託シテ呼出狀ヲ送達スルモ又其地ノ判事ニ訊問ヲ囑託スルモ自由ナリトス

則ニ從ヒ之ヲ送達ス可シ
若シ證人管轄地外ニ在ル時ハ其所在ノ地ノ輕罪裁判所書記ニ送達ノ事ヲ囑託ス可シ
二二ノ三

第百七十二條 豫審判事ハ證人裁判所々在ノ地ニ在セサル時ハ其住所ノ地ノ治安判事ニ訊問ノ事ヲ囑託スルヲ得 六一
若シ證人管轄地外ニ在ル時ハ其所在ノ地ノ豫審判事又ハ治安判事ニ訊問ノ事ヲ囑託スルヲ得 六二
本條ノ場合ニ於テ呼出狀ハ囑託ヲ受ケタル判事ノ名ヲ以テ其裁判所ノ書記局ヨリ之ヲ

送達ス可シ

〔百七十二〕呼出狀ニ違背スル時ハ罰金ヲ言渡シ且勾引ス可キ旨ヲ記載スルハ證人法律ヲ知ラサルヨリシテ刑ヲ受ケ又ハ力ヲ用ヒテ引致セラルハニ至ルヲ避ケン爲ノナリ

第百七十三條 呼出狀ニハ證人ノ氏名住所及

ヒ職業ヲ記載ス可シ
又出頭ノ日時場所及ヒ呼出ニ應セサル時ハ罰金ヲ言渡シ且勾引スルヲアル可キ旨ヲ記載ス可シ 一七六

呼出狀ノ送達ト出廷トノ間少クトモ二十四時ノ猶豫アル可シ

第百七十四條 證人疾病公務其他正當ノ事故

ニ因リ呼出ニ應スル能ハサルヲ證明シタル時ハ豫審判事其所在ニ就テ之ヲ訊問ス可シ

〔百七十五〕本條ノ趣旨ハ
第百二十六條ノ規則ト大
同小異ナリ惟被告入ト證
人トノ差異アルノミ

〔百七十六〕證人呼出ニ應
ササルハ即チ判事ノ命ニ
違フナリ故チ罰金ヲ科シ
仍ホ其訊問ヲ必要トスル
時ハ再ヒ呼出狀ヲ發シ或
ハ勾引狀ヲ發シテ力ヲ用
ヒ之ヲ引致セシムルコト
得其呼出狀又ハ勾引狀ヲ
發スルハ畢竟證人前ノ呼
出ニ應セサルニ原ツクテ
以テ其費用ヲ擔當セシム

第百七十五條 證人ト爲ル可キ者陸海軍在營
ノ軍人軍属ナル時ハ其所屬長官ヲ經由シテ
呼出狀ヲ送達ス其長官ハ即時ニ出廷セシム
可キコトヲ認可シ又ハ職務上己ムコトヲ得サル
差支アル時ハ其事由ヲ付シテ出廷ノ延期ヲ
豫審判事ニ請求ス可シ

第百七十六條 豫審判事ハ前二條ニ定メタル
差支ノ場合ヲ除クノ外證人呼出ニ應セサル
時ハ檢事ノ意見ヲ聽キ二圓以上十圓以下ノ
罰金ヲ言渡ス可シ但其言渡ニ對シテハ故障
及ヒ控訴ヲ許サス
豫審判事ハ其證人ニ對シ罰金ノ言渡書ト共

再度ノ呼出狀ヲ爲スニ仍
ホ出廷セサル時ハ其刑ヲ
加重シ四圓以上二十圓以
下ノ罰金ヲ言渡ス可シ

〔百七十七〕證人初度又ハ
再度ノ呼出狀ノ送達ヲ受
ケサルカ其呼出狀ニ出廷
ノ日時等ヲ記載セサルカ
又ハ急病ニ罹リ豫メ出廷
セサルノ届書ヲ差出スコ
ト得サル時ハ毫モ其身ニ
過失アラサルナリ故ニ前
ノ罰金ノ言渡ヲ取消ス可
シ

〔百七十八〕証人ヲシテ呼
出狀ヲ差出サシメ若クハ

ニ再度ノ呼出狀ヲ送達シ又ハ直チニ勾引狀
ヲ發スルコトヲ得但其費用ハ證人ヲシテ之ヲ
擔當セシム
若シ証人再度ノ呼出ニ應セサル時ハ二倍ノ
罰金ヲ言渡シ且勾引狀ヲ發スルコトアル可シ
第百七十七條 豫審判事ハ證人初度又ハ再度
ノ呼出狀ヲ受ケサルコト其呼出狀第百七十三
條ノ規則ニ背キタルコト又ハ豫知シ難キ正當
ノ事故アリテ出廷スル能ハサリシコトヲ證明
シタル時ハ檢事ノ意見ヲ聽キ其罰金ノ言渡
ヲ取消ス可シ

第百七十八條 証人呼出狀ニ因リ出廷シタル

其人違ナキヲ証明セシムルハ被告人ヲ曲庇陷害セシメ爲メ詐テ呼出テ受ケタル証人ト稱シ詐僞ノ陳述ヲ爲ス者ナキヲ保ゼサレハナリ

時ハ其呼出狀ヲ書記ニ差出ス可シ若シ之ヲ遺失シタル時ハ其人違ナキヲ證明ス可シ
第七十九條 豫審判事ハ証人トシテ呼出シタル者ニ對シ其氏名年齢職業住所及口第八十一條ニ記載シタル者ナリヤ否ヲ問フ可シ

第八十條 豫審判事ハ証人ヲシテ愛憎畏懼ノ心ナク正實ニ陳述ヲ爲ス可キヲ宣誓セシム可シ
豫審判事ハ証人ニ宣誓書ヲ讀聞カセ之ニ署名捺印セシム若シ署名捺印スルヲ能ハサル時ハ其旨ヲ附記ス可シ

宣誓書ハ訴訟書類ニ添置ク可シ

〔百八十一〕本條ニ記載シタル者ハ何レモ其陳述スル所正實ナラサルノ嫌疑アリ故ニ証人ト爲リ宣誓シテ陳述ヲ爲スヲ許サズ惟參考ノ爲メ之ヲ聽クヲ得ルノミ

〔百八十二〕幼者白痴瘖啞者ノ如キハ事理ヲ解セザル者ナリ公權剝奪又ハ停止ヲ受ケタル者ハ証人ト爲ルノ公權ヲ行フヲ能ハ

第八十一條 左ニ記載シタル者ハ証人ト爲ルヲ許サズ但事實參考ノ爲メ其陳述ヲ聽クヲ得
一 民事原告人
二 民事原告人及ヒ被告人ノ親屬
三 民事原告人及ヒ被告人ノ後見人又ハ是等ノ者ノ後見ヲ受クル者
四 民事原告人及ヒ被告人ノ雇人
第八十二條 左ニ記載シタル者亦前條ニ同シ
一 十六歲未滿ノ幼者

サル者ナリ又第五ニ記載
スル者ハ他ノ事件ニ付キ
被告人ト爲リ現ニ輕カラ
サルノ嫌疑ヲ受クル者ナ
リ第六ニ記載シタル者ハ
現ニ取調フル所ノ事件ニ
付キ自身曾テ被告ト爲リ
証憑不充分ナルニ因リ免
訴ト爲リタル者ニシテ新
ナル証憑生スル時ハ更ニ
第二百六十一條ニ從ヒ訴
テ受ク可キヤノ恐テ懷ク
テ以テ早ク他人其事件ニ
付キ刑ヲ受クルヲ欲ス
ル者ナリ故ニ是等ノ者ノ
陳述ハ參考ノ爲メニ非サ
レハ之ヲ聽クコト得ス信
テ其言ニ措キ難キヲ以テ
ナリ

〔百八十二〕証人宣誓ヲ肯
セズ又ハ宣誓シタル上ニ
テ陳述ヲ肯セサルハ即チ

二知覺精神ノ不充分ナル者
三瘡啞者
四公權ヲ剝奪セラレ又ハ公權ヲ停止セラレ
タル者刑三二二三三
五重罪事件ニ付キ重罪裁判所ニ移スノ言渡
ヲ受ケ又ハ重禁錮ノ刑ニ該ル可キ輕罪事件
ニ付キ公判ニ付セラレタル者三二七以下
六現ニ陳述ヲ爲ス可キ事件ニ付キ曾テ訴ヲ
受ケ其證憑充分ナラサルニ因リ免訴ノ言
渡ヲ受ケタル者三二四二六一
第百八十三條 證人宣誓ヲ肯セス又ハ宣誓シ
テ陳述ヲ肯セサル時ハ豫審判事檢事ノ意見

公務ヲ行フヲ拒ムノ罪ヲ
犯スナリ故ニ刑法ニ從ヒ
處斷ス
醫師以下神官僧侶ニ至ル
マテハ皆其身分職業ニ關
シ他人ノ陰私ノ事件ヲ知
ルモ其委託ヲ受ケタル時
ハ之ヲ漏告ス可カラサル
者ナリ故ニ其事件ニ付キ
陳述ヲ肯セサル時ハ之ヲ
罰ス可カラス

〔百八十四〕証人數名ヲ共
ニ訊問スル時ハ五ニ雷同
シ其己レノ知ル所ヲ盡ク
陳述セサルノ弊アリ又被
告人ノ面前ニテ訊問スル
時ハ愛憎畏懼ノ念ヲ發シ
遂ニ亦同上ノ弊ナキヲ能
ハス故ニ一人毎ニ別々ニ
之ヲ訊問スルナリ

ヲ聽キ刑法第百八十條ニ從ヒ罰金ヲ言渡ス
可シ但其言渡ニ對シテハ故障及ヒ控訴ヲ許
サス
醫師藥商穩婆又ハ代言人辯護人代書人公證
人若クハ神官僧侶其身分職業ニ關スル秘密
ノ事件ニ付キ委託ヲ受ケタル者ハ前項ノ例
ニ在ラス刑三六〇、

第百八十四條 證人ハ他ノ證人及ヒ被告人ト
各別ニ之ヲ訊問ス可シ但事實發見ノ爲メ必
要ナリトスル時ハ證人ト他ノ證人又ハ被告
人ト對質セシムルヲ得一五四一五五
第百八十五條 豫審判事ハ證人ノ陳述ヲ確實

〔百八十五〕証人ノ陳述犯所ノ模様等ニ關スル時ハ實地ニ臨ムコト非ヤレハ其確實ナルヤ否ヲ知リ難シ故ニ同行スルコトヲ許ス
〔百八十六〕証人國語ニ通セサル時其通事ヲ命スルハ當然ノ事ナリ若シ雙語ナル時ハ第百八十二條ニ從ヒ証人ト爲ルコトヲ許サスト雖モ事實參考ノ爲メ訊問スル場合ニ於テハ亦同
〔百八十七〕皇族勅任官ハ其身分至テ貴キ者ナリ故ニ之ヲ法廷ニ呼出サス所ニ就テ陳述ヲ聽ク者ナリ

ナラシムル爲メ必要ナリトスル時ハ重罪輕罪ノ犯所又ハ其他ノ場所ニ同行スルコトヲ得
若シ證人同行スルコトヲ肯セサル時ハ第百七十六條ノ規則ニ從ヒ罰金ヲ言渡ス可シ
第百八十六條 第百五十六條第百五十七條ノ規則ハ證人ニ付テモ亦之ヲ適用ス
第百八十七條 皇族又ハ勅任官證人ナル時ハ豫審判事書記ト共ニ其所在ニ就テ陳述ヲ聽ク可シ
第百八十八條 書記ハ證人ノ陳述ニ付キ各別ニ調書ヲ作ル可シ 一四八、
其調書ニハ證人宣誓ヲ爲シタルコト又ハ爲サ

〔百八十九〕調書ニ記載スル所ニ付キ証人他日異議ヲ申立ルコトアル可キニ因リ之ヲ讀聞カセシム若シ証人前ノ陳述ヲ變更増減セシムコトヲ請求シタル時ハ更ニ其陳述ヲ聽キ調書ヲ作り再ヒ之ヲ讀聞カセテ其訊問ヲ結了スル者トス

〔百九十〕証人ハ出廷シテ陳述ス可キノ義務ト雖モ其出廷ニ付テノ旅費日當

ノ事由ヲ記載ス可シ
第百八十九條 豫審判事ハ證人ニ其陳述ノ相違ナキヤ否ヲ知ラシムル爲メ書記ヲシテ調書ヲ讀聞カセシム可シ
證人ハ其陳述ヲ變更増減セシムコトヲ請求スルヲ得書記ハ其請求アリタルコト及ヒ變更増減ノ條件ヲ調書ニ記載シ豫審判事及ヒ證人ト共ニ署名捺印ス可シ
若シ證人署名捺印スルコト能ハサル時ハ其旨ヲ附記ス可シ
第百九十條 證人ハ即時ニ出廷ニ付テノ旅費日當ヲ要ムルコトヲ得

ヲ自ラ負擔ス可キノ責ナシ故ニ其請求アリタル時ハ豫審判事日程ト日數トニ應シ其金額ヲ算定シテ之ヲ言渡ス可シ
日稼ヲ以テ生業トスルトハ其日ニ得ル所ヲ以テ繼ニ其日ノ生計ヲ營ム者ヲ云々例ハ車夫ノ如シ

〔百九十一〕毒殺コ付キ死体ノ解剖偽造貨幣コ付キ金貨ノ如何等學術又ハ職業ニ因リ知り得ヘンシテ通常豫審判事ノ鑑定シ難キ事件コ付テハ必ス醫師化學者礦物學者ヲ命シ鑑定人ト爲ス可シ

〔百九十二〕呼出狀ニ記ス

若シ日稼ヲ以テ生業トスル者ナル時ハ族費日當ノ外日稼高二等シキ償金ヲ要ムルヲ得
本條ノ場合ニ於テ豫審判事ハ其金額ヲ定メ之ヲ言渡ス可シ

第七節 鑑定

第百九十一條 豫審判事ハ犯罪ノ性質方法及結果ヲ分明ナラシムル爲メ鑑定人ヲ必要ナリトスル時ハ學術職業ニ因リ鑑定スルヲ得可キ者一名又ハ數名ヲシテ鑑定ヲ爲サシム可シ

第百九十二條 鑑定人ハ書記局ヨリ呼出狀ヲ

所ハ本條ニ定ムル所ノ條件ノ外第百七十三條ノ例ニ從ヒ鑑定人ノ氏名職業住所出廷ノ口時場所ヲ記載セサル可カラフ又本條ニ明文ナシト雖モ呼出狀ノ送達ト出廷トノ附少クモ二十四時ノ猶豫アリ可キナリ
鑑定人出廷セサルモ勾引スルヲ許サハルハ証人ノ犯罪ヲ目撃シタル者等ト異ナリテ其呼出ヲ受ケタル者ニ非ザレハ鑑定スルヲ得サルノ理ナクハナリ

以テ之ヲ呼出ス可シ其呼出狀ニハ犯罪事件ニ付キ鑑定ヲ命スルヲ及ヒ呼出ニ應セサル時ハ罰金ヲ言渡ス可キヲ記載ス可シ
一七 鑑定人呼出ニ應セサル時ハ第百七十六條ノ規則ニ從ヒ處分ス可シ但勾引狀ヲ發スルヲ得ス

第百七十七條ノ規則ハ本條ニモ亦之ヲ適用ス

第百九十三條 鑑定人ハ正實ニ鑑定ス可キノ

宣誓ヲ爲ス可シ其宣誓ハ第百八十條ノ式ニ從フ

書記ハ鑑定人ノ宣誓シタルヲ鑑定命令書

〔百九十四〕宣誓シタル上ニテ鑑定ヲ肯セサルハ即チ公務ヲ行フヲ拒ム者トシテ故ニ刑法ニ從ヒ之ヲ四圓以上四十圓以下ノ罰金ニ處ス

〔百九十五〕第百八十一條第百八十二條ニ記載シタル者ハ証人ト爲ルヲ得サル者ニシテ其陳述ニ信ヲ措キ難キヲ以テ事實參考ノ爲メニ非サレハ其陳述ヲ聽クコトナシ乃チ鑑定ヲ爲サシムルニ付テモ亦其正實ニ出テサルノ疑アリ是本條ヲ設クル所以ナリ

ノ紙尾ニ記載シ之ニ宣誓書ヲ添置ク可シ
第百九十四條 鑑定人宣誓ヲ肯セス又ハ宣誓シテ鑑定ヲ肯セサル時ハ豫審判事檢察ノ意見ヲ聽キ刑法第七十九條ニ從ヒ罰金ヲ言渡ス可シ但其言渡ニ對シテ故障及ヒ控訴ヲ許サス

第百九十五條 第百八十一條第百八十二條ニ記載シタル者ニハ鑑定ヲ命スルヲ得ス但急遽ノ際正當ノ鑑定人ト爲ル可キ者ナキ時ハ事實參考ノ爲メ鑑定ヲ命スルヲ得
第百九十六條 豫審判事ハ成ル可ク鑑定ニ立會フ可シ

〔百九十七〕鑑定人一名ニシテ好結果ヲ得ス若シハ其鑑定ノ命ヲ受ケタル者中途ニシテ差支テ生ズル等ノ事アル時ハ鑑定人ヲ増加シ又ハ別ニ鑑定人ヲ命スルハ理ノ當然ナリトス

〔百九十八〕鑑定書ハ鑑定人自ラ之ヲ作り其如何ナル手續ヲ以テ鑑定シタル乎又其手續ヲ爲シタル末如何ナル結果ヲ得タル乎及ヒ何時ヨリ何時ニ至リタル乎ヲ記ス可シ
結果ヲ得サルトハ死休腐敗シテ其毒殺ニ係ルヤ否ヤ知ル能ハサル類
〔百九十九〕外國人ヲシテ鑑定ヲ爲サシムル時ハ必ス通事ヲ命シ鑑定書ニ記載スル所ヲ國語ニ譯セシ

第百九十七條 豫審判事ハ鑑定人ノ請求ニ因リ又ハ職權ヲ以テ鑑定人ヲ増加シ又ハ別人ヲシテ鑑定セシムルヲ得
第百九十八條 鑑定人ハ鑑定書ヲ作り其手續結果及ヒ鑑定ヲ爲シタル時間ヲ詳記ス可シ
若シ結果ヲ得サル時ハ其推測スル所ヲ記載ス可シ
鑑定人意見ヲ異ニスル時ハ各自鑑定書ヲ作り又ハ各自ノ意見ヲ一箇ノ鑑定書ニ記載ス可シ
第百九十九條 鑑定人ハ鑑定書ニ年月日ヲ記載シ署名捺印及ヒ契印ス可シ 二五ノ二、

ム而ノ其通事ヲ命スルハ
第五百十六條第五百十七
條ニ定ツタル規則ニ從テ
可シ

又鑑定書ニハ豫審判事之ヲ受取リタル年月
日ヲ記載シ書記ト共ニ檢印ス可シ
鑑定書ハ鑑定命令書ニ添置ク可シ
外國人鑑定ヲ爲シタル時ハ其鑑定人ニ裁判
所ヨリ命シタル通事ノ作りタル譯本ヲ添置
ク可シ

第二百條 鑑定人及ヒ通事ニハ旅費給料其他
相當ノ費用ヲ給與ス可シ

第八節 現行犯ノ豫審

第二百一節 豫審判事ハ檢事ヨリ先ニ現行ノ
重罪輕罪アルヲ知リタル場合ニ於テ其事
件急速ヲ要スル時ハ檢事ノ請求ヲ待タズ直

二百一、豫審判事ハ公訴
起リタル場合ニ非サレハ
豫審ニ取掛ルヲ待サレハ
者ナリ然レモ現行犯ノ場
合ニ於テハ事件急速ヲ要

スルヲ以テ變例トシテ直
チニ豫審ニ取掛ルヲ許
スナリ

チニ其旨ヲ通知シ豫審ニ取掛ルヲ得三
豫審判事ハ犯所ニ臨檢シ令狀ヲ發シ其他此
章ニ定メタル規則ニ從ヒ豫審ノ處分ヲ爲ス
ヲ得

第二百二條 前條ノ場合ニ於テハ檢事ノ起訴

ナシト雖モ豫審判事檢證調書ヲ作ルヲ以テ
公訴ヲ受理シタル者トス其調書ニハ現行ノ
重罪又ハ輕罪ナルヲ記載ス可シ
豫審判事ハ速ニ書類ヲ檢事ニ送致ス可シ但
檢事ヨリ其豫審手續ヲ繼續ス可キ者ニ非サ
ルノ意見アリト雖モ通常ノ規則ニ從ヒ之ヲ
終結ス可シ 二二〇以下、

二百二、公訴ノ起テサル
ニ先チ豫審判事豫審ニ取
掛リ檢證調書ヲ作リタル
時ハ法律ニ於テ公訴既ニ
起リタル者ト看做ス故ニ
後日檢事ニ於テ繼續シテ
豫審ヲ爲ス可カラズ棄却
シテ取調ヲ止ム可キト申
立ルト雖モ之ニ拘ハラズ
必ス第二百二十三條以下
ノ規則ニ從ヒ豫審終結ノ
言渡ヲ爲サハス可カラズ

〔二百二〕檢事ハ捜査起訴ノ職ニ任スル者ニシテ豫審處分ヲ爲スノ權ナシ然レモ現行犯ニ付テハコレニ其權ヲ與ヘ犯所ニ臨檢シ令狀ヲ發スル等ノ處分ヲ爲スヲ得シム但其職タル固ト判事ト同シカラサルヲ以テ証人鑑定人出廷セサルモ之ニ對シ罰金ノ刑ヲ言渡スヲ許サス

〔二百五〕現行犯ニ付キ司法警察官ノ權ハ殆ト檢事ト異ナルヲナガラシム惟

第二百三條 檢事ハ豫審判事ヨリ先ニ現行ノ

重罪輕罪アルヲ知リタル時ハ豫審判事ヲ

待ツヲナク其旨ヲ通知シテ犯所ニ臨檢シ豫

審判事ニ屬スル處分ヲ爲スヲ得但罰金

ノ言渡ヲ爲スヲ得ス 一七六一九二

証人及ヒ鑑定人ノ陳述ハ宣誓ヲ用フルヲナ

ク之ヲ聽ク可シ

第二百四條 前條ノ場合ニ於テ檢事ハ證憑書

類ニ意見書ヲ添ヘ速ニ之ヲ豫審判事ニ送致

ス可シ

第二百五條 第二百三條ニ於テ檢事ニ許シタ

ル職務ハ司法警察官モ亦假ニ之ヲ行フヲ

令狀ヲ發スルヲ得サラシムルナシ

〔二百六〕前條ニ從ヒ司法警察官被告人ヲ送致シタ時ハ檢事之ヲ訊問シテ其調書ヲ作ル可シ若シ其事件豫審ヲ要スル者アリトスル時ハ勾留狀ヲ發シ又ハ之ヲ發シテ速ニ豫審ヲ求ム可シ其起訴ヲ爲フ可カラサル者トスル時ハ速ニ被告人ヲ放免ス可シ但後日證憑ノ生シタル時更ニ訴ヲ起ヌノ妨礙ト爲ルヲナシ

〔二百七〕豫審ノ請求アリタル時ハコトニ始メテ通常ノ手續ニ復シ豫審判事

得但令狀ヲ發スルヲ得ス 一〇二以下

司法警察官ハ證憑書類ニ意見書ヲ添ヘ被告

人ト共ニ速ニ之ヲ檢事ニ送致ス可シ

第二百六條 檢事被告人ヲ受取りタル時ハ二

十四時内ニ之ヲ訊問シ調書ヲ作り勾留狀ヲ

發スルト否トヲ問ハス一切ノ書類ニ請求書

ヲ添ヘ豫審判事ニ送致ス可シ 一〇七、一二六、

若シ起訴ヲ爲ス可カラサル者ト認メタル時

ハ直チニ被告人ヲ放免ス可シ 一〇七末項

第二百七條 豫審判事ハ二十四時内ニ被告人

ヲ訊問ス可シ此場合ニ於テハ檢事ノ發シタ

ル勾留狀ヲ解キ又ハ之ヲ存スルヲ得 一〇

全權ヲ有スルニ至ルナリ

二百八 檢事及司法警察官ハ事件急遽ニ處分ヲ行フニ過キス故ニ通常ノ手續ニ復シ豫審判事其事ヲ承管スルニ至リタル時ハ前ノ手續規則ノ不完分ナル者ヲ改更スルヲ得判事此權ヲ有サル時ハ不充分ナル手續アリ己ノ得テ判決ヲ爲スニ至ラン

二百九 輕罪ノ現行犯ニシテ其事情繁雜ナラサル時ハ豫審ヲ經スルテ直チ被告人ヲ輕罪裁判所ニ呼出シ其公判ニ付スルヲ許ス

二百十 被告事件重大ナリト雖モ其被告人逃亡シ

二百八條 豫審判事ハ檢事又ハ司法警察官ノ爲シタル手續ニ付キ更ニ其取調ヲ爲ストヲ得但檢事又ハ司法警察官ノ作りタル調書ハ之ヲ訴訟書類ニ添置ク可シ

二百九條 檢事ハ輕罪ノ現行犯ニ係ル場合ニ於テ勾留狀ヲ發シタルト否トニ拘ハラヌ被告人ヲ訊問シタル後豫審ヲ求ムルニ及ハスト思料シタル時ハ直チニ輕罪裁判所ニ呼出ストヲ得二〇七、二〇八

第九節 保釋

二百十條 豫審判事ハ豫審中勾留狀又ハ收

又ハ証憑ヲ湮滅スルノ恐ナキ時ハ之ヲ勾留ス可キノ要ナシ故ニ金圓ヲ以テ出廷ス可キヲ保證シシメタル上ニテ假ニ其勾留ヲ釋クヲ得之ヲ保釋ト名ツク

二百十二 保釋ニハ必ス金圓ヲ以テ保証スルヲ要ス其金圓ハ即チ被告人萬一出廷セサルヲアラハ没入セラルモ異議ナシ

監狀ヲ受ケタル被告人ノ請求ニ因リ檢事ノ意見ヲ聽キ何時ニテモ呼出ニ應シ出廷ス可キノ證書ヲ差出サシメ保釋ヲ許ストヲ得被告人無能力ナル時ハ親屬又ハ代人ヨリ保釋ヲ求ムルヲ得

二百十一條 前條ノ證書ハ書記局ニ差出ヌ可シ

保釋中被告人ヲ呼出ス時ハ出廷ヨリ二十四時前ニ其報知ヲ爲ス可シ

二百十二條 保釋ヲ許スニハ金圓ヲ以テ被告人ノ出廷ヲ保證セシム可シ但豫審判事其金額ヲ定メ保釋ヲ許スノ言渡書ニ記載ス可

トシテ差出ス者ナリ

〔二百十二〕保証金ヲ爲スニハ必ス即時現金ヲ差出スルヲ要セス貯金預所又ハ銀行ノ預証書ヲ出スモ又第二項ノ要件ヲ具有スル者ヨリ保証書ヲ出シテ保証金ニテツルモ妨ナシ

〔二百十四〕保釋中呼出ニ應ジサルハ即チ前約ニ背ク者ナリ故ニ其保証金ヲ官ニ没入ス

〔二百十五〕保証金トシテ現金ニテ差出シタル時ハ單一ニ之ヲ没入スルノ

シ

第二百十三條 保証金ヲ爲スニハ被告人又ハ其他ノ者ヨリ保証金若クハ貯金預所又ハ銀行ノ預証書ヲ書記局ニ差出ス可シ
又裁判所ノ管轄地内ニ住シ且充分ナル資力アル者ヨリ金額ニ充ツ可キ保証書ヲ差出スルヲ得

第二百十四條 保釋中被告人呼出ヲ受ケ正當ノ事由ナクシテ出廷ヒサル時ハ保証金ノ全部又ハ幾分ヲ没入ス可シ

第二百十五條 保証金ヲ没入スルニハ檢事ノ意見ヲ聽キ豫審判事其言渡ヲ爲ス可シ

若シ他人ノ保証ニ係ル時ハ民事ノ規則ニ從ヒ之ヲ徵收ス可シ
二二二

第二百十六條 豫審判事保証金ヲ没入シタル時ハ保釋ノ言渡ヲ取消ス可シ
二二〇、二一四、

又豫審中保釋ノ言渡ヲ取消スルヲ必要ナリトスル時ハ檢事ノ意見ヲ聽キ其言渡ヲ取消ス可シ

第二百十七條 豫審判事保証金ヲ没入シタル後免訴ノ言渡違警罪裁判所ニ移スノ言渡又ハ罰金ニ該ル可キ輕罪ニ付キ輕罪裁判所ニ移スノ言渡ヲ爲シタル時ハ檢事ノ意見ヲ聽キ前ニ没入シタル金額ヲ還付ス可シ
二二四、二二五、

〔二百十七〕免訴ノ言渡及ヒ罰金以下ノ刑ニ該ル可キ被告人ハ法律ノ勾留スルヲ許サズ勾留ノ可カラサル者ニハ保釋アリ可シ
〔二百十八〕保証金ヲ没入スルハ被告ハ呼出ニ應ジサルニ因リ然ラハ他日更ニ呼出シタル時ハ從ク出廷セサルノ恐アリ故ニ保釋ヲ止メ再ヒ之ヲ勾留シ保釋ノ言渡ヲ取消スルヲ必要ナリトスルハ被告ハ逃亡等ノ恐アル場合ナリ

〔二百十九〕預証書ニ係ル時ハ其貯金預所又ハ銀行ヲシテ金圓ニ換ヘシメ又第二百十三條第二項ノ保証書ナル時ハ其者ヨリ之ヲ徵收シ完納セサル時ハ民事裁判所ニ訴フ可キ者ナリトス
〔二百十八〕保証金ヲ没入スルハ被告ハ呼出ニ應ジサルニ因リ然ラハ他日更ニ呼出シタル時ハ從ク出廷セサルノ恐アリ故ニ保釋ヲ止メ再ヒ之ヲ勾留シ保釋ノ言渡ヲ取消スルヲ必要ナリトスルハ被告ハ逃亡等ノ恐アル場合ナリ

キノ理ヲシテ其被告ハ
呼出ニ應ゼヨルモ保計金
ヲ没入スルノ謂レナシ故
ニ前ニ誤テ其事件ヲ重大
ナル者ト爲シテ勾留ヲ爲
シ後保釋ヲ行ヒ遂ニ保證
金ヲ没入セシヨアリト則
ニ後ニ至リ前ノ處分不違
ナリシヲ知ル時ハ曾テ
没入シタル保證金ヲ還付
セサル可ラス

〔二百十八〕本條ノ規則ハ
前條ニ付キ解釋シタル所
ヲ推シ以テ其至當ナルコ
ヲ知ル可シ
保釋ノ言渡ヲ取消ストハ
第二百十六條第二項第二
百二十七條ノ場合ノ如シ
〔二百十九〕責付ハ保釋ト
異ナリテ被告人ノ請求ア
ルヲ要セス又金圓ヲ以テ
其出廷ヲ保證セシムルコ
ト

二二六

第二百十八條 豫審判事免訴ノ言渡違背罪裁
判所ニ移スノ言渡又ハ罰金ニ該ル可キ輕罪
ニ付キ輕罪裁判所ニ移スノ言渡ヲ爲シ若ク
ハ保釋ノ言渡ヲ取消シタル時ハ保證金ヲ還
付ス可シ 二二六ノ二、二二四、二二五、
二二六ノ二、二二七

第二百十九條 豫審判事ハ保釋ノ請求アルト
否トヲ問ハス檢事ノ意見ヲ聽キ被告人ヲ其
親屬又ハ故舊ニ責付スルコトヲ得

第十節 豫審終結

第二百二十條 豫審判事ハ被告事件其管轄ニ
非ストモ又ハ他ニ取調ヲ要スルコトナシト思

ナシ惟親屬若クハ故舊ヲ
シテ監察ノ責ニ任セシム
ルノミ
〔二百二十一〕犯罪ノ場所性
質又ハ被告人ノ身分ニ因
リ管轄ニ非サル時ハ管轄
違ノ言渡ヲ爲シ又豫審終
ニ終リ別ニ取調ヲ可キ事
アラサシ時ハ其罪ノ種類
ニ應シ公判ヲ爲ス可キ裁
判所ニ移スノ言渡ヲ爲サ
シ可カラス然レモ豫審
判事一名ニテ直ニ其言
渡ヲ爲スコトヲ得ス必ズ原
告官タル檢事ノ意見ヲ聽
クコトヲ要スルヲ以テ訴訟
書類ヲ檢事ニ送致ス可キ
ナリ

料シタル時ハ豫審終結ノ處分ニ付キ檢事ノ
意見ヲ求ムル爲メ一切ノ訴訟書類ヲ送致ス
可シ
檢事ハ訴訟書類ニ意見ヲ付シ三日内ニ之ヲ
還付ス可シ三四
第二百二十一條 檢事ハ豫審充分ナラスト思
料シタル時ハ其條件ニ付キ更ニ取調ヲ請求
スルコトヲ得若シ豫審判事其請求ヲ肯セサル
時ハ檢事訴訟書類ニ意見ヲ付シ二十四時内
ニ之ヲ還付ス可シ三四
第二百二十二條 豫審判事ハ檢事ノ意見如何
ナルヲ問ハス後ニ記載シタル言渡ヲ以テ豫

〔二百二十一〕檢事ハ前條
ニ從ヒ書類ノ送致ヲ受ケ
タルニ因リ三日内ニ意見
ヲ付シ之ヲ還付セシトス

ルモ如何セシ豫審充分ナ
ラサル時ハ其不充分ナリ
トスル廉ニ付キ更ニ取調
ト求ムルコト得若シ豫審
判事ニ於テハ既ニ充分ナ
リトシテ其求メニ應ヒサ
シ時ハ已ムコト得ス再三
其等類ヲ檢閲シ不満足ナ
カラモ自己ノ意見ヲ付シ
テ終結ノ言渡ヲ請求ス可
シ

審ヲ終結ス可シ三〇一、
第二百二十三條 豫審判事ハ被告事件其管轄
ニ非サルコトヲ認メタル時ハ其旨ヲ言渡ス可
シ若シ勾留ヲ要スル者ト認メタル時ハ前ニ
發シタル令狀ヲ存シ又ハ新ニ令狀ヲ發シ其
事件ヲ檢事ニ交付ス可シ三八下、四八、
一二六、
第二百二十四條 豫審判事ハ左ノ場合ニ於テ
免訴ノ言渡ヲ爲シ且被告人勾留ヲ受ケタル
時ハ放免ノ言渡ヲ爲ス可シ
一 犯罪ノ證據充分ナラサル時
二 被告事件非ト爲ラサル時刑、三七五以下、
三七七、
三公訴ノ期滿免除ト爲リタル時九

〔二百二十〕管轄違ノ言
渡ヲ爲ス場合ト雖モ被告
人ヲシテ自由ヲ得セシム
ル時ハ或ハ逃亡スルノ恐
アルヘシ故ニ前ノ令狀ヲ
存シテ依然勾留ヲ爲シ又
ハ新ニ令狀ヲ發スルコトヲ
許ス

〔二百二十四〕免訴ノ言渡
ヲ爲ス可キ場合六箇アリ
第一ハ罪証充分ナラス又
ハ無罪ノ証明白ナル時第
二ハ現ニ道德ニ反スル所
爲アルモ法律ニ於テ之ヲ
罰セサル時第三第四第五
ハ第九條ニ定メタル期滿
免除確定裁判大赦ニ因リ
公訴消滅シタル時第六ハ
刑法第二百二十六條等ノ
場合ニ於テ犯罪アルモ之
ヲ全免スル時ナリトス
豫審判事ハ罪証ノ有無輕

四 確定裁判ヲ經タル時九
五 大赦アリタル時九
六 法律ニ於テ其罪ヲ全免スル時刑、一九二、二二
六、三五六、
本條ノ場合ニ於テ被害者ハ民事裁判所ニ非
サレハ要償ノ訴ヲ爲スコトヲ得ス四、
第二百二十五條 被告事件違警罪ナリト思料
シタル時ハ違警罪裁判所ニ移スノ言渡ヲ爲
シ且被告人勾留ヲ受ケタル時ハ釋放ノ言渡
ヲ爲ス可シ
第二百二十六條 被告事件輕罪ナリト思料シ
タル時ハ輕罪裁判所ニ移スノ言渡ヲ爲ス可
シ

重罪裁判所ニ止マレ事ノ
 曲直ヲ裁セテ故ニ被害者
 ノ要償ハ民事裁判所ニ爲
 サシムルナリ
 (二百二十五)本條以下ハ
 公判ヲ爲ス可キ裁判所ニ
 移スノ言渡ヲ定ム
 釋放ハ放免ト同シカラス
 罪アルモ法律上勾留スル
 ヲ許サ、ルヲ以テ其勾
 留ヲ釋キ自由ニ任放スル
 ナク以下皆同シ

(二百二十七)重罪裁判所
 ニ移スノ言渡ヲ爲ス時ハ
 必ス被告人ヲ勾留シ復タ
 保釋責付ヲ許サズ事件重
 大ナルヲ以テ深ク被告人
 ノ逃亡ヲ恐レ之ヲ防カン
 カ爲メナリ
 控訴裁判所檢事長ノ指揮
 トハ第二百六十條ニ定ム

被告人勾留ヲ受ケタル場合ニ於テ罰金ノ刑
 ニ該ル可キ者ト思料シタル時ハ釋放ノ言渡
 ナ爲ス可シ
 禁錮ノ刑ニ該ル可キ者ト思料シタル時ハ保
 釋ヲ許シ又ハ責付ヲ爲スヲ得 二一〇以下
 若シ被告人未タ勾留ヲ受ケサル時ハ令狀ヲ
 發スルヲ得

第二百二十七條 被告事件重罪ナリト思料シ
 タル時ハ重罪裁判所ニ移スノ言渡ヲ爲ス可
 シ若シ保釋ヲ許シ又ハ責付ヲ爲シタル時ハ
 其言渡ヲ取消ス可シ 二一〇以下
 重罪裁判所ニ移スノ言渡書ニハ控訴裁判所

ル所ヲ指ス
 (二百二十八)總テ裁判所
 ノ言渡ニハ其理由ヲ付セ
 サル可カラズ而シテ其理由
 ハ事實ト法律トノ二者ニ
 依ル可シ事實ニ依ルノ理
 由ハ例ヘハ管轄違ノ言渡
 ナレハ犯罪ノ場所他ノ裁
 判所ノ管轄ナルヲ被告人
 皇族勅任官ナルヲ等チ云
 フ又法律ニ依ルノ理由ハ
 此法律ニ據ルニ犯罪ノ地
 ナリテ管轄ト定ムルニ因
 リ我カ管轄ス可キ者ニ非
 ストスルヲ又皇族勅任官
 ハ高等法院ヲ以テ管轄ト
 スルニ因リ通常裁判所ノ

檢事長ノ指揮アルマテ豫審ヲ爲シタル裁判
 所ノ監倉ニ被告人ヲ留置ス可キヲ記載ス
 可シ 二六〇、
 第二百二十八條 豫審終結ノ言渡ニハ事實及
 ヒ法律ニ依リ其理由ヲ付ス可シ
 管轄ニ非サルノ言渡ヲ爲スニハ其理由ヲ明
 示シ若シ被告人ヲ勾留ス可キ時ハ其理由ヲ
 明示ス可シ 二二三、
 免訴ノ言渡ヲ爲スニハ被告事件罪ト爲ラザ
 ルヲ公訴受理ス可カラサルヲ及ヒ其理由又
 犯罪ノ證據充分ナラサル時ハ其旨ヲ明示ス
 可シ 二二四、

管轄ニ屬セスドスルノ類
餘ノ言渡ヲ爲スコ付テモ
亦此例ニ倣フ可シ

違警罪裁判所輕罪裁判所又ハ重罪裁判所ニ
移スノ言渡ヲ爲スニハ犯罪ノ性質模様證據
ノ充分ナルヲ及ヒ其罪ヲ罰ス可キ法律ノ正
條ヲ明示ス可シ 二二五以下

第二百二十九條 前條ノ言渡書ニハ第三百十
條ノ規則ニ從ヒ被告人ノ氏名等ヲ明示ス可
シ

〔二百二十〕豫審ハ密行ス
ル者ナルカ故ニ其終結ノ
言渡ト雖モ判事之ヲ口ツ
カラ宣告セス必ス其言渡
書ヲ作り之ヲ訴訟關係人
ニ送達シ以テ結局ノ如何
ヲ知ラシム乃チ關係人不
服ノ條件アレハ會議局ニ
故障スルヲ得可シ

第二百三十條 書記ハ速ニ豫審終結ノ言渡書
ノ謄本ヲ檢事民事原告人及ヒ被告人ニ送達
ス可シ但是等ノ者ハ第二百四十六條以下ノ
規則ニ從ヒ其言渡ニ對シ故障ヲ爲スヲ得
第二百三十一條 被告人ヲ逮捕スルヲ能ハサ

〔二百二十一〕令狀ヲ發シ
テ普ク國內ヲ捜査スルモ
被告人ヲ逮捕スルヲ能ハ
サルノ場合ナシトセズ此
場合ニ於テモ終結ノ言渡
ヲ爲スヲ妨ケス事件ヲ
公判ニ付シ闕席裁判ヲ爲
スヲ得ルヲ以テナリ

ル場合ニ於テ重罪裁判所又ハ禁錮ノ刑ニ該
ル可キ輕罪ニ付キ輕罪裁判所ニ移スノ言渡
ヲ爲シタル時ハ其旨ヲ言渡書ニ記載ス可シ
但被告人ハ現ニ勾留ヲ受クルニ非サレハ其
言渡ニ對シ上訴ヲ爲スヲ得ス 三二〇、

〔二百二十二〕被告人チシ
テ財産管理ノ權ヲ有セシ
ムル時ハ或ハ販賣シテ逃
亡ノ資ト爲シ又ハ之カ爲
メ民事原告人賠償ヲ得ル
ニ基本ヲ失フニ至ラン故
ニ財産差押ノ請求ヲ爲ス
ヲ許ス

第二百三十二條 前條ノ場合ニ於テ檢事又ハ
民事原告人ハ假ニ被告人ノ財産ヲ差押フ可
キヲ民事裁判所ニ請求スルヲ得

〔二百二十三〕本條ハ豫審
ノ延滞ヲ防カンカ爲メ判
事チシテ時々終結未決ノ
事件ニ付キ報告ヲ爲サシ
ムル者ト定メタリ

第二百三十三條 豫審終結ノ言渡ヲ爲シタル
時ハ豫審判事ヨリ速ニ其旨ヲ裁判所長ニ報
告ス可シ
又十五日毎ニ未決ノ豫審事件ニ付キ簡畧ナ

〔二百三十四〕管轄違ノ申立ヲ爲スト雖モ判事之ヲ棄却シタル時ハ其申立ヲ爲シタル者不服ヲ唱ヘ會議局ニ故障ヲ爲スヲ得之ヲ第一ノ場合トス
 第二第三ノ場合ハ令狀ヲ發シ又ハ發セサルニ付キ法律ニ定メタル規則ニ背クヲアルカ又保釋責付ヲ爲シ又ハ爲サ、ルニ付キ法律ヲ犯スヲアル時ナリトス第四ハ越權ノ處分即チ判事其權限ヲ超越シテ專横ノ處分ヲ爲シタル時ニ於テ況ク故障ヲ爲スヲ許ス
 民事原告人ハ公訴ニ關係

ル報告書ヲ差出ス可シ

第四章 豫審上訴

第二百三十四條 左ノ場合ニ於テハ檢事又ハ

被告人ヨリ豫審終結ニ至ルマテ何時ニテモ故障ヲ爲スヲ得

一管轄違ノ申立ヲ棄却シタル時 四八、

二法律ニ背キ令狀ヲ發シ又ハ之ヲ發セサル時 二八以下

三法律ニ背キ保釋責付ヲ爲シ又ハ之ヲ爲サ、ル時 二一〇

四越權ノ處分アル時

民事原告人ハ私訴ニ付キ第四ノ場合ニ於テ

スルノ權ナシ故ニ私訴ニ付キ判事ノ越權アル時ニ非サレハ故障ヲ爲スヲ得ス
 〔二百三十五〕本條ハ故障ヲ爲スノ法式ヲ定ム趣意書ハ前條ニ定メタル原由アルヲ鳴ラシ豫審判事ノ處分ヲ非ナリトスルノ旨ヲ記載スル者ナリ故障ノ申立アリト雖モ其故障ニ係ル處分ハ之ヲ執行ス惟檢事ヨリ保釋責付ヲ爲シタルニ付キ故障アル時ハ會議局ノ判決アルマテ始ク其執行ヲ見合ス是レ判事ハ弊害ナシトスルモ檢事ニ於テ被告人逃亡ノ恐アリトシテ故障スル者ナレハ會議局ノ判決ヲ以テ何レカ是ナルヤ否ヲ定ムルヲ要シ且萬一

故障ヲ爲スヲ得

第二百三十五條 故障ヲ爲サントスル者ハ其

裁判所ノ書記局ニ趣意書ヲ差出ス可シ

故障アリタル時ハ書記其趣意書ノ謄本ヲ對

手人ニ送達シ對手人ハ三日内ニ答辨書ヲ差

出スヲ得

故障ニ付テハ豫審處分ノ執行ヲ停止セス但

保釋責付ヲ爲シタルニ付キ檢事ヨリ故障アリタル時ハ其執行ヲ停止ス

第二百三十六條 故障ハ其裁判所ノ會議局ニ

於テ判事三名以上ニテ趣意書答辨書其他訴

訟書類及ヒ檢事ノ意見書ニ依リ之ヲ判決ス

保釋責付ヲ執行シ爲メニ
被告人ノ逃亡ヲ致ス時ハ
復タ奈何トモシ難キヲ以
テナリ

〔二百二十六〕豫審ハ密行
ヲ主義トスルヲ以テ故障
ノ判決モ亦書類ニ依ル原
被ヲシテ迭ヒニ辯論セシ
ムルコトナシ

會議局ノ判決ニ對シ直チ
ニ上告スルコトヲ許ス時ハ
爲メニ豫審處分ヲ遲延ス
ルノ恐アリ故ニ豫審終結
ノ言渡アリタル後ニ非サ
レハ之ヲ爲スコトヲ許サス

〔二百二十七〕忌避トハ本
條ニ定メタル三箇ノ場合
ニ於テハ豫審判事公平ヲ
枉クルノ疑アルニ因リ訴
訟ノ關係ヲ免カレ他ノ判
事ノ之ニ代ランコトヲ求
ル者ナリ

可シ 四七、
會議局ノ言渡ハ速ニ之ヲ執行ス但其言渡ニ
對シテハ豫審終結ノ言渡アリタル後上告ヲ
爲スコトヲ得 四一〇以下

第二百三十七條 左ノ場合ニ於テハ檢事被告
人又ハ民事原告人ヨリ豫審終結ニ至ルマテ
豫審判事ヲ忌避スルコトヲ得

一 豫審判事又ハ其配偶者ト被告人被害者又
ハ是等ノ者ノ配偶者ト親屬ナル時

二 豫審判事被告人又ハ民事原告人ノ後見人
ナル時

三 豫審判事又ハ其配偶者ニ於テ民事原告人

〔二百二十八〕忌避ノ申立
ハ直チニ會議局ニ爲スコ
トヲ許サス先ツ豫審判事ニ
申立テ其棄却アリタル時
故障スルコトヲ得

〔二百二十九〕忌避ノ申立
ヲ棄却シタルニ付キ故障
アリタル時ハ豫審判事其

被告人又ハ是等ノ者ノ親屬ヨリ賄賂ニ非
スト雖モ贈物ヲ收受シ若シ聽許シタル時

第二百三十八條 忌避ノ申立ハ豫審判事ニ之
ヲ爲ス可シ但其申立ヲ爲スニハ趣意書二通
ヲ書記局ニ差出ス可シ

書記ハ趣意書ヲ豫審判事ニ送致シ豫審判事
ハ其送致ヲ受ケタルヨリ二十四時内ニ其申
立ヲ認可シ又ハ棄却スルコトヲ趣意書ノ紙尾
ニ記載シ一通ヲ書記局ニ藏置シ一通ヲ本人
ニ送達ス可シ

第二百三十九條 豫審判事忌避ノ申立ヲ棄却
シタル時ハ其申立人ヨリ故障ヲ爲スコトヲ得

對手人ト爲リ如何ナルモアリテ之ヲ棄却シタル乎ヲ辯明セシム

〔二百四十〕訴訟關係人豫審ヲ遲延セシムル爲メニ忌避ノ申立ヲ爲シ又其棄却ニ付キ故障ヲ爲スノ恐アリ故ニ本條ニ於テハ其弊ヲ防ガンガ爲メ必ス豫審ノ手續ヲ繼續ス可キ者ト定ム然レモ事件急速ヲ要セサル者ナリ時ハ姑ク之ヲ停止スルニ妨ケナキナリ

〔二百四十一〕本條ノ趣旨ハ第二百三十六條第二項ノ規則ト異ナルヲナシ

會議局ニ於テハ故障ノ趣意書及ヒ豫審判事ノ辯明書ニ依リ判決ヲ爲ス可シ

第二百四十條 豫審判事ハ忌避ノ申立アリタル時又ハ其申立ヲ棄却シタルニ付キ故障アリタル時ト雖モ豫審ノ手續ヲ繼續ス可シ但終結ノ言渡ヲ爲スヲ得ス

又急速ヲ要セサル事件ニ付テハ豫審ノ手續ヲ停止スルヲ得

第二百四十一條 會議局ニ於テ忌避ニ付テノ故障ヲ棄却シタル時ハ上告ヲ爲スヲ得但豫審終結ノ言渡アリタル後ニ非サレハ之ヲ爲スヲ得ス 四一〇以下

〔二百四十二〕豫審判事ハ訴訟關係人忌避ノ申立ヲ爲サスト雖モ其身正當ナル嫌疑ヲ受ク可キノ地位ニ在リテ自ラ處分ヲ爲スヲ難カル時ハ回避ノ申立ヲ爲スヲ得 回避ノ原由ハ法律上之ヲ一定セス會議局ノ判決ニ任ス蓋シ判事訴訟關係人ト故舊朋友ナルカ又ハ實際アル時ハ必ス回避ヲ許スニ至ラン

〔二百四十四〕書記ハ調書

第二百四十二條 豫審判事自ラ第二百三十七條ニ定メタル原由アルヲ認メ又ハ回避ス可キ者ト思料シタル時ハ會議局ニ回避ノ申立ヲ爲ス可シ

回避ノ申立ハ會議局ニ於テ之ヲ判決ス可シ 第二百四十三條 會議局ニ於テ忌避又ハ回避ノ申立ヲ認可シタル時ハ裁判所長更ニ他ノ判事ヲシテ豫審ヲ爲サシム可シ其判事ハ檢

事其他訴訟關係人ノ請求ニ因リ又ハ職權ヲ以テ前豫審判事ノ爲シタル處分ト雖モ更ニ取調ヲ爲スヲ得

第二百四十四條 書記ハ自ラ回避シ又ハ檢事

ヲ作ルノ任アルヲ以テ若シ訴訟關係人其調書ヲ作ルニ付キ公平ヲ失フノ恐アリトスル時ハ之ヲ忌避スルヲ得又書記ハ自ラ回避スルノ申立ヲ會議局ニ爲スヲ得ル也

〔二百四十五〕檢察官ハ原告官ナリ又訴訟關係人ノ一ナリ訴訟關係人相互ニ忌避スルノ理ナシ故ニ之ヲ忌避スルヲ許サス惟其自ラ公訴ヲ行フニ忍ビサルノ情實アル時ハ回避スルヲ許ス

其他訴訟關係人ヨリ會議局ニ申立テ之ヲ忌避スルヲ得

第二百四十五條 檢察官ハ被告人又ハ民事被告入ヨリ之ヲ忌避スルヲ得ス若シ自ラ回避ス可キ者ト思料シタル時ハ其旨ヲ會議局ニ申立ツルヲ得

檢事補自ラ回避ス可キ者ト思料シタル時ハ其旨ヲ檢事ニ申立ツ可シ檢事ハ其申立ヲ許否ス可シ

第二百四十六條 檢事ハ總テ豫審終結ノ言渡ニ對シ故障ヲ爲スヲ得 二二三以下 民事原告人ハ私訴ニ付キ越權ノ處分アルニ

ニ大ナル差異アリ即チ檢事ハ何レノ言渡ニ對シテモ故障ヲ爲スヲ得ルモ被告人ハ利害ノ關係至大ナル時ニ非サレハ故障スルノ權ナシ又民事原告人ハ私訴ニ付キ越權ノ處分アリタル場合ニ非サレハ不服ヲ申立ルヲ得サルナリ是レ公益ノ爲メニ出ルト私利ニ基クトノ區別アルニ由ル

因リ豫審終結ノ言渡ニ對シ故障ヲ爲スヲ得 二二三以下、 得三四四

被告人ハ重罪裁判所ニ移スノ言渡ニ對シ故障ヲ爲スヲ得輕罪裁判所又ハ違警罪裁判所ニ移スノ言渡ニ對シテハ豫審判事ノ管轄違越權又ハ其事件ヲ移ス可キ裁判所ノ管轄違ニ非サレハ故障ヲ爲スヲ得ス 四八二三五以下

第二百四十七條 故障ノ期限ハ一日ナリトス但言渡書ノ送達アリタルヨリ之ヲ起算ス

第二百四十八條 檢事民事原告人及ヒ被告人故障ヲ爲スニハ申立書ヲ書記局ニ差出ス可シ書記ハ速ニ其旨ヲ對手人ニ通知ス可シ

〔二百四十九〕附帶ノ故障トハ訴訟關係人ノ一名故障ヲ爲シタルニ因リ已レモ亦之ニ附帶シテ不服ノ條件ヲ申立テ會議局ノ判決ヲ求ムルコトヲ云フ

〔二百五十〕豫審終結ノ言渡ハ故障ノ期限内及ビ故障ノ取調中又上告ノ期限内及ビ上告ノ取調中ハ未

故障申立人ハ三日内ニ趣意書ヲ書記局ニ差出す可シ

書記ハ速ニ趣意書ヲ對手人ニ送達シ對手人ハ三日内ニ答辯書ヲ差出スコトヲ得

第二百四十九條 故障アリタル時ハ對手人ヨリ其判決アルマテ何時ニテモ附帶ノ故障ヲ爲スコトヲ得

附帶ノ故障アリタル時ハ書記ヨリ其趣意書ヲ對手人ニ送達ス可シ對手人ハ三日内ニ答辯書ヲ差出スコトヲ得

第二百五十條 豫審終結ノ言渡ハ故障ノ期限内又故障アリタル時ハ其判決アルマテ執行

ヲ確定セサル者ナリ故ニ之ヲ執行スルコトヲ得ス但勾留ノ言渡及ビ保釋責付ヲ取消スノ言渡ニ付テハ被告人逃亡ノ恐アルヲ以テ之ヲ執行ス是レ第二百四十六條ニ於テ訴訟關係人ノ間ニ上訴ノ區別ヲ定メタルト同シ豫審ニ付テハ公益ヲ重スルコトヲ主トスレハナリ

ヲ停止ス但被告人ヲ勾留シ又ハ保釋責付ヲ取消スノ言渡ハ其執行ヲ停止セス^{二二二五}

第二百五十一條 書記ハ故障趣意書答辯書其他訴訟書類ヲ會議局ニ差出ス可シ

第二百五十二條 會議局ニ於テハ第二百三十六條ノ規則ニ從ヒ故障ノ判決ヲ爲ス可シ

豫審判事ノ言渡ヲ認可シタル時ハ其旨ヲ言渡シ若シ其全部又ハ幾分ヲ取消シタル時ハ全部ニ付キ更ニ言渡ヲ爲ス可シ

又被告人ヲ保釋責付シ又ハ勾留スルノ言渡ヲ爲スコトヲ得^{二二二六、二二二七}

第二百五十三條 會議局ニ於テ必要ナリトス

〔二百五十三〕故障ノ申立

ヲ取調スルニ當リ會議局ニ於テ原豫審ノ盡サ、ルヲ發見シ爲メニ判決シ難キ時ハ更ニ全ク豫審ヲ爲シ又ハ幾分ノ調替ヲ爲サシムルヲ得而シテ是等ノ處分ハ特ニ判事一名ニ命シテ爲サシム局員二名ニテ行ヘハ却テ遅延錯雜ヲ生スルノ恐アリ

〔二百五十四〕管轄違越權及ヒ公訴受理ス可カラサルヲハ關係ノ尤モ大ナル者ナリ故ニ是等ノコトアル時ハ訴訟關係人ノ請求ヲ待タス原言渡ヲ取消シタル上ニテ更ニ相當ノ言渡ヲ爲ス可キナリ

〔二百五十五〕共犯ニシテ未ダ訴ヲ受ケス又第三十九條ニ明示シタル附帶ノ犯罪未ダ豫審ニ係ラザル

ル時ハ判事一名ヲシテ更ニ豫審ヲ爲シ又ハ其指示スル所ノ條件ニ付キ更ニ取調ヲ爲シ其報告書ヲ差出サシム可シ

第二百五十四條ニ於テ故障ノ取調中管轄違越權又ハ公訴受理ス可カラサルヲ發見シタル時ハ職權ヲ以テ豫審判事ノ言渡ヲ取消ス可キナリ得 四八

第二百五十五條 會議局ニ於テ故障ノ取調中共犯ノ起訴ヲ受ケサル者アルヲ附帶ノ犯罪ニ付キ豫審ヲ受ケサル者アルヲ發見シタル時ハ檢事ノ請求ニ因リ又ハ職權ヲ以テ判事一名ヲシテ豫審ヲ爲シ其報告書ヲ差出サ

者アル時ハ事實ヲ明瞭ニシ且併シテ裁判ヲ爲スノ便ニ供スル爲メ其事件ニ付キ豫審ヲ爲サシムルヲ得

〔二百五十七〕上告ノ原由期限等ハ第四百十條以下ニ之ヲ定ム

〔二百五十八〕被告人上訴即チ故障及ヒ上告ヲ爲スノ權アリト雖モ之ヲ知ラサルニ因リ徒ニ期限ヲ經過シ遂ニ其權ヲ行フヲ能

シム可シ 三九

檢事ハ意見書ヲ差出ス可シ

會議局ニ於テハ報告書其他訴訟書類ニ依リ故障ト共ニ之ヲ判決ス可シ

第二百五十六條 故障ノ判決アリタル時ハ速ニ其言渡書ノ謄本ヲ檢事民事原告人及ヒ被告人ニ送達ス可シ

第二百五十七條 檢事其他訴訟關係人ハ會議局ノ言渡ニ對シ上告ヲ爲ス可キナリ得 四一〇以下

第二百五十八條 被告人ニ送達ス可キ言渡書ニハ其言渡ニ對シ上訴スルヲ得可キナリ及ヒ其期限ヲ記載ス可シ其記載ナキ時ハ規則ニ

ハサルニ至ル者アラソ是
チ以テ法律ニ於テハ厚ク
被告人チ保護セシメ爲メ其
上訴ノ權アルコト上訴ノ
期限幾日ナルコトヲ告知
ス可シト定メ以テ冤罪ニ
服スルノ憾ナカラシム

〔二百六十〕重罪裁判所ニ
移スノ言渡確定シタル時
ハ第二百七十三條ニ從ヒ
公訴狀ヲ作ル可キヲ以テ
一切ノ書類ヲ檢事長ニ差
出サシム

檢事長ハ自ラ公訴狀ヲ作
ルト他ノ檢事ヲシテ之ヲ
作ラシムルコトヲ問ハス前
ニ豫審ニ干預シタル檢事
ヲシテ被告人及ヒ證據物
件等ヲ重罪裁判所ニ移サ

從ヒ更ニ言渡書ノ送達アルマテ被告人上訴
ノ權ヲ失フコトナカル可シ
二百五十九條 第三百十一條ヨリ第三百十
三條マテノ規則ハ豫審ノ上訴ニ付テモ亦之
ヲ適用ス

第二百六十條 重罪裁判所ニ移スノ言渡確定
シタル時ハ檢事其言渡書ニ一切ノ書類ヲ添
ヘ速ニ之ヲ控訴裁判所檢事長ニ送致ス可シ
三四二
二七
檢事長ハ一切ノ書類證據物件及ヒ被告人ヲ
重罪裁判所ニ移スノ處分ヲ檢事ニ命ス可シ
三四二
二七

シム
違警罪裁判所輕罪裁判所
ニ移スノ言渡ニ付テハ檢
事ノ手限リコトヲ之ヲ執行
ス

〔二百六十一〕一タヒ免訴
ノ言渡ヲ受ケタル者後日
更ニ幾回トナク公訴ヲ受
クルコトアル可シトスル時
ハ其者終身安堵スルコトヲ
得サル可シ故ニ前訴ニ稱
スル所ノ罪名ヲ變更シ盜
罪ヲ詐僞取財ト爲シ故殺
ヲ過失殺ト爲スモ決シテ
同一ノ事件ニ付キ再ヒ訴
テ起スコトヲ許サハルナリ
然レモ豫審ハ證據ノ有無
ヲ判スル者ニシテ前ニ免
訴ノ言渡ヲ爲シタルハ全
ク當時証憑ヲ分ナラサ
リマカ故ナリ是ヲ以テ後日新ニ確誌ノ生ズル時ハ更ニ訴フルコトヲ許ス惟其更ニ訴テ起
スコトハ檢事 人ノ見ル所ニ任セズ必ニ會議局ノ認許ヲ經サル可カラズ

重罪裁判所以外ノ裁判所ニ移スノ言渡確定
シタル時ハ檢事速ニ其執行ヲ爲ス可シ
三四
二二
五二
二六

第二百六十一條 豫審ニ於テ被告人免訴ノ言
渡ヲ受ケ其言渡確定シタル時ハ罪名ノ變更
アルモ同一ノ事件ニ付キ更ニ訴ヲ受クルコ
トナル可シ但新ナル證據アル時ハ此限ニ在
ラス
新ナル證據アル時ハ檢事ヨリ之ヲ會議局ニ
差出シ會議局ニ於テハ其起訴ヲ許ス可キヤ
否ヲ判決ス可シ

裁判ハ豫審ト異ナリテ必
ズ之ヲ公行シ傍聴ヲ許ス
故ニ公判ト云フ
通則トハ違警罪輕罪重罪
ノ公判ヲ爲スニ付キ通シ
用ユ可キノ規則ト云フノ
意ナリ

〔二百六十二〕凡テ訴訟ア
レハ直チニ簿冊ニ登記シ
其順序ヲ追ヒ裁判ヲ爲ス
ナリ
甲ノ事件ニハ被告人未決
勾留ヲ受ケス乙ノ事件ニ
ハ勾留ヲ受クル者アル時
ハ順序ヲ變シ先ツ乙件ヲ
裁判スルヲ得是レ未決
勾留ハ己ムヲ得サルノ
場合ニ於テ施ス所ナルコ
因ル荷クモ他ニ之ヲ救フ
ノ途アルニ於テハ便チ其
途ニ就ク可キヲ以テナリ
〔二百六十三〕裁判ハ必ズ

第四編 公判

第一章 通則

第二百六十二條 訴訟事件ハ書記局ノ簿冊ニ
登記シタル順序ニ從ヒ之ヲ公判ニ付ス可シ
裁判所長ハ未決勾留ノ日數ヲ減縮スル爲メ
職權ヲ以テ其順序ヲ變更スルヲ得
又重要ナル事由ノ爲メ檢察官其他訴訟關係
人ノ請求アリタル時モ亦順序ヲ變更スルヲ
得

第二百六十三條 重罪輕罪違警罪ノ訊問辯論
及ヒ裁判言渡ハ之ヲ公行ス否ラサル時ハ其
言渡ノ效ナカル可シ

公ニ行ヒ衆人ノ傍聴ヲ許ス
 是レ其公平ニ出ルノ信
 憑ヲ固クシ被告入ヲ保護
 シ冤罪ニ陥ルコトナカラシ
 ムル爲メナリ

〔二百六十四〕公安ヲ害ス
 ルトハ犯罪ノ性質ニ因リ
 其裁判ノ傍聴ヲ許ス時ハ
 之ガ爲メ人民ノ紛擾ヲ來
 シ審判ノ妨礙ト爲リ又ハ
 人心ヲ動搖スルニ至ル可
 キ恐アル時ヲ云フ猥褻ニ
 涉リ風俗ヲ害スルトハ猥
 褻姦淫ノ罪ヲ治ムルコト付
 キ其裁判ヲ公行スル時ハ
 醜事ヲ世上ニ泄シ遂ニ良
 風美俗ヲ害シ人ノ淫心ヲ
 激スルノ恐アル時ヲ云フ
 傍聴禁止ノ場合ニ於テモ
 裁判言渡ヲ公行スル者ハ
 其公安又ハ風俗ノ害トナ
 ス可キ事件ノ詳細ヲ示ス

第二百六十四條 被告事件公安ヲ害シ又ハ猥
 褻ニ涉リ風俗ヲ害スルノ恐アル時ハ裁判所
 ニ於テ檢察官ノ請求ニ因リ又ハ職權ヲ以テ
 其訊問及ヒ辯論ノ傍聴ヲ禁スルコトヲ得其裁
 判言渡ヲ爲スニ付テハ傍聴ヲ許ス可シ

第二百六十五條 被告人ハ公庭ニ於テ身體ノ
 拘束ヲ受クルコトナシ但守卒ヲ置クコトアル可
 シ

禁錮以上ノ刑ニ該ル可キ被告人疾病アルニ
 非スシテ出廷ヲ肯セサル時ハ之ヲ引致スル
 コトヲ得若シ出廷シテ辯論スルコトヲ肯セサル
 時ハ對審トシテ裁判言渡ヲ爲ス可シ

コトヲ止タ云々ノ罪アリ
 ト言渡スニ過キサレハナ
 リ

〔二百六十五〕公庭ノ辯論
 中ハ被告人ノ身體ヲ拘束
 セスト雖モ其粗暴ノ所行
 等アリ時ハ之ニ守卒ヲ附
 置シコトヲ許ス

禁錮以上ノ刑ニ該ル可キ
 被告人ハ其身疾病ニ罹リ
 タル場合ヲ除クノ外必ス
 出廷セシム若シ之ヲ肯セ
 サル時ハ力ヲ用ヒ之ヲ引
 致スルコトヲ得ルナリ

出廷シタル上ニテ辯論ス
 ルコトヲ肯セサルハ即チ自
 ラ辯護ノ權ヲ拋棄シタル
 ナリ故ニ對審トシテ裁判
 ヲ爲ス者トス

〔二百六十六〕辯護人ハ即
 チ代言人ニシテ刑事ノ訴
 訟ニ付キ被告人ヲ保護ス

第二百六十六條 被告人ハ辯論ノ爲メ辯護人
 ナ用フルコトヲ得 三七八以下

辯護人ハ裁判所々属ノ代言人中ヨリ之ヲ選
 任ス可シ但裁判所ノ允許ヲ得タル時ハ代言
 人ニ非サル者ト雖モ辯護人ト爲スコトヲ得

第二百六十七條 被告人公庭ニ於テ暴行又ハ
 喧噪ヲ爲シ辯論ヲ妨礙スル時ハ裁判長ヨリ
 再度告戒ヲ爲シ仍ホ之ニ從ハサル時ハ檢察
 官ノ請求ニ因リ又ハ職權ヲ以テ被告人ヲ退
 廷セシメ若クハ勾留スルコトヲ得

前項ノ場合ニ於テハ對審トシテ引續キ辯論
 及ヒ裁判言渡ヲ爲スコトヲ得

ル爲メ飽マテモ其利益トナリ可キヲ弁スル者ナリ
 辯護人ト爲ル可キ者訴訟ニ習シタル時ハ之カ爲メ審判ノ遲滞ヲ招クノ恐アリ故ニ代言人ヨリ選任ス可シト定ム然レモ被告人ノ親屬故舊又ハ他ノ裁判所々屬ノ代言人ヲ用ユルモ妨ナキ時ハ裁判所ニ於テ之ヲ允許スルヲ得可シ
 (二百六十七) 被告人暴行又ハ喧嘩ヲ爲スト雖モ直チニ退庭若シハ勾留セシメ成ル可ク辯護ヲ盡シシムル爲メニ之ヲ裁判長ヨリ之ヲ告戒シ從ハザルニ及ヒ止ムヲ得ズ退庭勾留ノ處分ヲ爲スヲ得

若シ辯論二日ニ渉ル時ハ更ニ被告人ヲ出廷セシム可シ
 第二百六十八條 被告人精神錯亂又ハ疾病ニ因リ出廷スルヲ能ハサル時ハ痊癒ニ至ルマテ辯論ヲ停止ス
 辯論ニ取掛リタル後被告人精神錯亂シタル時ハ其痊癒ノ後新ニ辯論ヲ爲ス可シ其他ノ疾病ニ罹ル時ハ痊癒ノ後前ニ停止シタルヨリ以後ノ手續ヲ爲ス可シ但五日間辯論ヲ停止シ又ハ檢察官其他訴訟關係人ノ請求アリタル時ハ新ニ辯論ヲ爲ス可シ
 若シ被告事件及ヒ法律ノ適用ニ付キ既ニ辯

辯論二日ニ渉ル時更ニ被告人ヲ出廷セシムルハ前日暴行喧嘩ヲ爲スモ翌日ニ至リ其事ヲ爲スヲナカレ可キヲ以テナリ
 (二百六十八) 精神錯亂又ハ疾病ニ罹ル者ハ自ラ辯護ヲ盡スト能ハス故ニ痊癒ノ後再ヒ辯論ノ席ヲ開ク
 辯論中精神錯亂シタル者ハ其前ニ陳述シタル所ヲ遺忘スルハ恐アリ故ニ痊癒ノ後ニ至リ更ニ改メテ最初ヨリ辯論ヲ爲サシム
 普通ノ疾病ニ付テハ前言ヲ遺忘スルヲナシ故ニ前ニ停止シタル所ノ手續ヨリ更ニ辯論ヲ爲サシム
 被告事件及ヒ法律ノ適用ニ付キ辯論ヲ終リ裁判言渡ヲ爲サントスルニ當リ

論ヲ終リタル時ハ其痊癒ノ後更ニ取調ヲ爲スヲナク裁判言渡ヲ爲ス可シ
 第二百六十九條 禁錮以上ノ刑ニ該ル可キ被告人公判ノ日時ニ出廷セスト雖モ豫審終結ノ言渡書又ハ呼出狀ヲ本人ニ送達シタルノ證アルニ非サレハ關席裁判ヲ爲ス可カラス
 二二〇、
 三四八、
 豫審終結ノ言渡書又ハ呼出狀ヲ本人ニ送達スルヲ能ハサル場合ニ於テハ裁判所ニテ猶豫ノ期限ヲ定メ其期限内ニ被告人出廷セサル時ハ關席裁判ヲ爲ス可キノ告知書ヲ親屬若クハ戸長ニ送達ス可シ

疾病ヲ生シタル者ニ付テハ前既ニ辯護ヲ盡シタルニ因リ後ニ至リ取調ヲ爲スコトナシ

〔二百六十九〕 闕席裁判ハ己ムコトヲ得サル場合ニ行フ者ニシテ容易ニ之ヲ爲ス可カラズ是レ本條ノ設アル所以ナリ

豫審終結ノ言渡書又ハ公判ノ呼出狀ヲ本人ニ送達シタル時ハ本人其裁判ノ近キニ在ルコトヲ知リタルナリ然ルニ出廷ヲ爲サ、ルハ是レ自ラ辯護ノ權ヲ拋棄スルナリ故ニ闕席ノ儘裁判ヲ爲ス可シ

禁錮以下ノ刑ニ該ル可キ被告人ニ付テハ呼出狀ヲ本人ニ送達シタルト否トナ問ハス出廷セサル時ハ直チニ闕席裁判ヲ爲ス

第二百七十條 闕席シタル被告人ニ付テハ辯護人ヲ用フルコトヲ許サス但其親屬故舊ハ被告人ノ出廷スルコト能ハサルノ事由ヲ證明スルコトヲ得

裁判所ニ於テ其事由ヲ正當ナリトスル時ハ檢察官ノ意見ヲ聽キ裁判ヲ延期スルコトヲ得

第二百七十一條 被告人中ノ一名又ハ數名出廷セスト雖モ出廷シクル者ニ付テハ通常ノ規則ニ從ヒ對審裁判ヲ爲ス可シ

第二百七十三條 裁判長ハ公廷ニ於テ諸般ノ取締ノ爲メ相當ノ處置ヲ爲ス可シ

稱讚誹謗其他辯論ヲ妨礙スル者アル時ハ之

レ其事件ノ輕微ナルヲ以テナリ

〔二百七十〕 闕席シタル被告人ニ付テハ辯護人ヲ用フルコトヲ許ス時ハ必ズ辯護人ヲ出シテ辯論ヲ爲サシメ自己ニ利益アル言渡アルハ出テ不利益ナラハ出テス依然法網ヲ免カル、ノ弊ヲ生セン故ニ辯護人ヲ用フルコトヲ許サス

〔二百七十一〕 本條ハ同一ノ事件ニ付キ被告人數名アル場合ヲ慮レリ此場合ニ於テハ出廷シタル者ニ付キ對審裁判ヲ爲シ闕席シタル者ニ付キ闕席裁判ヲ爲スモ妨ナシ

〔二百七十二〕 公廷ノ靜肅ヲ保テ法廳ノ威嚴ヲ瀆スコトナカラシムル等取締ノ處分ヲ爲スハ裁判長ノ特

之ヲ制止シ又ハ退廷セシムルコトヲ得

第二百七十三條 公廷ニ於テ輕罪違警罪ヲ犯シタル者アル時ハ其身分ノ如何ニ拘ハラス裁判長ノ命令ニ因リ之ヲ取押へ檢察官ノ意見ヲ聽キ直チニ裁判ヲ爲シ又ハ次ノ公判ニ付スルノ言渡ヲ爲ス可シ

書記ハ犯罪ノ事件及ヒ裁判長ノ處分ニ付キ即時ニ調書ヲ作ル可シ

第二百七十四條 前條ノ場合ニ於テ違警罪裁判所ニテハ違警罪ニ付キ終審ノ裁判ヲ爲シ輕罪ニ付キ始審ノ裁判ヲ爲ス可シ

輕罪裁判所其他上等ノ裁判所ニテハ輕罪ニ

權ニ屬ス
 〔二百七十二〕本條ハ公廷
 内ノ犯罪ニ付キ其處分ヲ
 示シ重罪ヲ犯ス者ハ第二
 百七十五條ニ從ヒ處分ス
 身分ノ如何ニ拘ハラセト
 云フヲ以テ皇族勅任官又
 ハ軍人ト雖モ本條ノ處分
 ナ受ク可キナリ
 〔二百七十四〕公廷内ノ犯
 罪ハ現行ノ尤モ現行ナル
 者ト謂フ可シ而シテ其証據
 モ亦顯然タリ故ニ裁判所
 ノ權限ヲ擴ムルコト本條ノ
 明文ノ如シ
 〔二百七十五〕重罪ハ罪ノ
 極ナリ故ニ公廷内ニテ犯
 ス者ト雖モ直チニ之ヲ裁
 判セズ通常ノ規則ニ從ヒ
 豫審ヲ爲サシム
 〔二百七十六〕告ナケレハ
 理セサルノ原則ハ民刑ニ

付キ終審ノ裁判ヲ爲ス可シ

第二百七十五條 公廷ニ於テ重罪ヲ犯シタル
 者アル時ハ裁判長被告人及ヒ證人ヲ訊問シ
 調書ヲ作り裁判所ニ於テ檢察官ノ意見ヲ聽
 キ通常ノ規則ニ從ヒ裁判スル爲メ豫審判事
 ニ送付スルノ言渡ヲ爲ス可シ

第二百七十六條 裁判所ニ於テハ訴ヲ受ケサ
 ル事件ニ付キ裁判ヲ爲ス可カラズ但辯論ニ
 因リ發見シタル附帶ノ事件及ヒ公廷内ノ犯
 罪ニ付テハ此限ニ在ラス三九二七
三以下
 若シ附帶ノ事件ニ付キ豫審ヲ必要ナリトス
 ル時ハ本案ノ裁判ヲ停止スルコトヲ得

通シテ用フ可キ者ナリ但
 本件ニ附帶スル事件ヲ辯
 論中ニ發見シ及ヒ前數條
 ニ定メタル公廷内ノ犯罪
 アリタル時ハ檢察官ノ起
 訴ヲ待タズ便宜ノ爲メ直
 チニ裁判スルコトヲ許ス
 〔二百七十七〕公訴受理ス
 可カラストハ第九條ノ原
 由ニ因リ公訴既ニ消滅シ
 又ハ告訴ヲ要スル事件ニ
 付キ其告訴ナキ等ノ原由
 ニ因リ公訴ヲ受理シテ其
 裁判ヲ爲ス同カラサルコ
 ト云フ
 〔二百七十八〕管轄違又ハ
 公訴受理ス可カラサルノ
 申立ヲ棄却シタル時ハ其
 申立人ヨリ直チニ上訴ス
 ルコトヲ許ス是レ其關係至
 大ナルヲ以テ本案ノ裁判
 ナ待ツニ違アラサルハナ

第二百七十七條 檢察官被告人及ヒ民事擔當

人ハ始審終審ヲ問ハズ本案ノ裁判言渡アル
 マテ何時ニテモ管轄違又ハ公訴受理ス可カ
 ラサルノ申立ヲ爲スコトヲ得四八

裁判所ニ於テハ職權ヲ以テ管轄違又ハ公訴
 受理ス可カラサルノ言渡ヲ爲スコトヲ得四八

第二百七十八條 裁判所ニ於テ前條ノ申立ヲ
 棄却シタル時ハ本案ノ裁判言渡ヲ待タズ直
 チニ控訴又ハ上告ヲ爲スコトヲ得此場合ニ於
 テハ本案ノ辯論ヲ停止ス四八二三四ノ一

第二百七十九條 檢察官其他訴訟關係人ハ第
 二百三十七條ニ定メタル原由アル時ハ違警

罪裁判所輕罪裁判所控訴裁判所又ハ重罪裁判所ノ裁判官及ヒ書記ニ對シ忌避ノ申立ヲ爲スコトヲ得

豫審ヲ爲シタル裁判官其公判ニ干預シ又ハ始審裁判ヲ爲シタル裁判官其終審裁判ニ干預シタル時亦同シ 四七

第二百八十條 忌避ノ申立ハ本案ノ裁判言渡ニ至ルマテ何時ニテモ之ヲ爲スコトヲ得

忌避ノ申立アリタル時ハ本案ノ辯論ヲ停止ス 二四〇

第二百八十一條 忌避又ハ回避ノ申立及ヒ其判決ヲ爲スニハ第二百三十八條ヨリ第二百

四十五條マテニ定メタル規則ニ從フ

第二百八十二條 忌避又ハ回避ノ申立ヲ棄却シタル時ハ前ニ停止シタルヨリ以後ノ手續ニ取掛ル可シ但五日間辯論ヲ停止シタル時ハ新ニ辯論ヲ爲ス可シ

變災厄難ノ爲メ訴訟手續ヲ停止シタル時亦同シ

第二百八十三條 公判ニ於テ用フ可キ證據ハ豫審ニ於テ用フ可キ證據ニ同シ 一四六以下

第二百八十四條 裁判長ハ檢察官其他訴訟關係人ノ請求ニ因リ又ハ職權ヲ以テ豫審中管轄官吏ノ作りタル調書及ヒ檢證書類ヲ朗讀

〔二百八十二〕忌避又ハ回避ノ申立ヲ認可シタル時ハ他ノ判事代ツテ職務ヲ行フ若シ之ヲ棄却シタル時ハ前ノ手續ニ引續キ弁論ヲ爲サシム

〔二百八十三〕證據ニシテ豫審ニ於テ法律上證據ト爲ス可キ者ハ公判ニ於テモ亦證據ト爲ルナリ例ヘハ証人ノ陳述ノ如キ豫審ニ於テ證據ノ一ト爲ス公判ニ於テモ亦然リ

〔二百八十四〕公判ハ固ト口陳辯論ヲ用ヒ書類ニ依

テサハチ原則トス然レモ
 時宜ニ依リ調書ヲ朗讀セ
 シムルコトアリ是レ事實ヲ
 分明ナラシムル爲必要ナ
 リトスル場合ニ於テス
 官吏ノ作リタル書類ハ證
 人ノ陳述ト其效ヲ同フス
 ルヲ以テ反對ノ証ヲ擧ゲ
 テ之ヲ攻撃スルヲ得可シ
 二百八十五 司法警察官
 ハ証人トシテ之ヲ呼出ス
 コトヲ得ルモ豫審判事ハ調
 書説明ノ爲シニ非サレハ
 呼出スコトヲ得ス又之ヲ呼
 出スモ裁判所ノ職權ニ因
 ルカ又ハ其允許ヲ得ル場
 合ニ限ルナリ是レ其裁判
 官ノ位地ニ在ルヲ以テ輕
 々シク呼出サシコトヲ防
 可キニ因ル

セシムルコトヲ得
 是等ノ書類ハ原被證人ノ陳述ト同一ノ效ヲ
 有ス
 第二百八十五條 調書ヲ作りタル司法警察官
 ハ檢察官其他訴訟關係人ヨリ證人トシテ之
 ヲ呼出シ又ハ裁判所ノ職權ヲ以テ之ヲ呼出
 スコトヲ得
 豫審判事ハ裁判所ノ職權ニ因リ又ハ檢察官
 其他訴訟關係人ヨリ其裁判所ノ允許ヲ得テ
 調書説明ノ爲メ之ヲ呼出スコトヲ得
 第二百八十六條 豫審ニ於テ訊問シタル證人
 ハ更ニ之ヲ呼出スコトヲ得 一七〇以下

述書アルヲ以テ更ニ公判
 ニ呼出スコトヲ要セサルニ
 似タリ然レモ公判ハ書類
 ニ依ラザルヲ原則トスル
 ナリテ口ツカテ陳述セシ
 ムル爲メ訴訟關係人ヨリ
 之ヲ呼出スコトヲ許ス

豫審ニ於テ錄取シタル證人ノ陳述書ハ更ニ
 其證人ヲ呼出サシル時證人呼出ヲ受ケ出廷
 セサル時又ハ豫審及ヒ公判ニ於テノ陳述ヲ
 比較ス可キ時ハ檢察官其他訴訟關係人ノ請
 求ニ因リ又ハ裁判長ノ職權ヲ以テ之ヲ朗讀
 セシムルコトヲ得 一八八二九三
 第二百八十七條 第七十八條以下ノ規則ハ
 公判ノ證人ニモ亦之ヲ適用ス
 第二百八十八條 證人ハ互ニ言語ヲ接ス可カ
 ラス又陳述前辯論ニ立會フ可カラス 三八九
 第二百八十九條 證人ハ左ノ順序ニ從ヒ訊問
 ス可シ

恐アリ
〔二百八十九〕弁論ノ順序ハ原告ヨリ始メ被告ヲ終尾トス其証人ニ付テモ亦之ニ倣ハサル可カラズ

〔二百九十〕原告証人數名ナキ時ハ其中ニテ順序ヲ定メサル可カラズ被告証人數名アル時モ亦同シ是レ本條ノ設アル所以ナリ
氏名目錄ノ順序ニ從フハ概テ最モ事實ヲ知ル者ヲ最初ニ記載スルヲ以テナリ

〔二百九十一〕訴訟關係人ヲシテ証人及ビ被告人ヲ訊問セシムルコトヲ許ス時ハ弁論錯雜シ事實分明ナラサルニ至ルヤ必セリ故

一 檢察官ノ請求ニ因リ呼出シタル證人

二 民事原告人ノ請求ニ因リ呼出シタル證人

三 被告人及ビ民事擔當人ノ請求ニ因リ呼出シタル證人

シタル證人

第二百九十條 證人數名アル時ハ氏名目錄ノ順序ニ從ヒ之ヲ訊問ス可シ但裁判長ハ證人ヲ呼出シタル者ノ意見ヲ聽キ其順序ヲ變更スルコトヲ得

第二百九十一條 證人及ビ被告人ハ裁判長ニ非サレハ之ヲ訊問スルコトヲ得ス

陪席判事及ビ檢察官ハ裁判長ニ告ケ證人及ビ被告人ヲ訊問スルコトヲ得

公廷取締ノ權アル裁判長ノ之ヲ訊問スルコトヲ得ル者トス但陪席判事及ビ檢察官ニ付テハ此恐ナキニ因リ之ヲ例外ニ措ク
〔二百九十二〕証人被告人ヲ曲庇又ハ陷害スル爲メ詐偽ノ陳述ヲ爲スハ刑法第二百十八條以下ニ定メタル罪ヲ犯スナリ故ニ之ヲ取押ヘテ豫審判事ニ付ス

証人ノ陳述不實ナリトスル時ハ固ヨリ之ニ依ルコトナカレ可シト雖モ先入主ト爲リ知ラス識ラス之ニ泥ムノ恐ナシトセズ故ニ本條ノ裁判ヲ延期スルコトヲ許ス
問本條禁錮以上ノ刑ニ該ル可キ者云々トアリ其禁

訴訟關係人ハ辯論ニ必要ナリトスル條件ヲ分明ナラシムル爲メ證人ヲ訊問ス可キコトヲ裁判長ニ求ムルヲ得

第二百九十二條 證人ノ陳述不實ニシテ故意

ニ出テ禁錮以上ノ刑ニ該ル可キ者ト思料シ

タル時ハ裁判所ニ於テ檢察官其他訴訟關係人ノ請求ニ因リ又ハ職權ヲ以テ之ヲ取押ヘ

勾引狀ヲ以テ豫審判事ニ送致ス可キノ言渡ヲ爲ス可シ

其證人ノ陳述ハ書記之ヲ錄取シ豫審判事ニ送致ス可シ

本條ノ場合ニ於テハ裁判所ニテ檢察官其他

錮以下ニ該ル可キ者ハ如何處分スル乎答ヘテ曰ク第二百七十二條ニ從ヒ公廷内ニテ違警罪ヲ犯シタル者トシテ直ニ裁判ヲ爲シ又ハ次ノ裁判ニ付ス可シ

〔二百九十二〕豫審ハ重罪ノ事件ニ限リ之ヲ行フ故ニ其証人出廷セサル時ハ二圓以上十圓以下ノ罰金ヲ科ス公判ニハ違警罪アリ其本犯科料ノ刑ニ處セラレハニ証人ハ輕罪ノ刑即チ罰金ノ言渡ヲ受クルノ理ナシ故ニ本條ヲ設ケ違警罪事件ト輕罪以上ノ事件トノ間差等ヲ定ム
被告人關席シタル時ハ原告ノ申立チ聽キ關席裁判ヲ爲スノニ其呼出シタル

訴訟關係人ノ請求ニ因リ又ハ職權ヲ以テ本案ノ事件ニ付キ裁判ノ延期ヲ言渡スヲ得
第二百九十三條 證人呼出ニ應セサル時ハ裁判所ニ於テ即時ニ檢察官ノ意見ヲ聽キ左ノ科料罰金ヲ言渡ス可シ但其言渡ニ對シテハ故障及ヒ控訴ヲ許サス 一七六

- 一 違警罪事件ニ付テハ五十錢以上一圓九十錢以下ノ科料
- 二 輕罪以上ノ事件ニ付テハ二圓以上十圓以下ノ罰金

被告人關席シタル時ハ其呼出シタル證人出廷セスト雖モ科料罰金ヲ言渡ス可カラズ

証人出廷セサルモ毫モ審判ニ妨ナク又被告入ニ害ナシ故ニ科料罰金ヲ言渡スルナリ

〔二百九十四〕前條ニ定ムタル罰金及ヒ科料ノ言渡ニ對シテハ故障及ヒ控訴ヲ爲スヲ許サスト雖モ証人ノ不參正當ノ事由ニ出ル時例ヘハ自己又ハ父母ノ急病或ハ公務等ニテ不參ノ屆書ヲ差出スノ間ナキニ於テハ前ノ言渡ヲ存シ置ク可キノ理ナシ故ニ其事由ヲ證明スル時ハ之ヲ取消ス可キナリ
〔二百九十五〕證人出廷セサル時ハ爲シニ事實ヲ得ルヲ能ハサルノ場合アリ此場合ニ於テハ更ニ呼出狀ヲ發シ其証人ノ出廷スルマテ裁判ヲ延期スルヲ

第二百九十四條 前條ノ言渡書ハ即時ニ書記ヨリ本人ニ送達ス可シ

其言渡ヲ受ケタル者三日内ニ出廷スルヲ能ハサリシ正當ノ事由ヲ證明シタル時ハ裁判所ニ於テ檢察官ノ意見ヲ聽キ科料又ハ罰金ノ言渡ヲ取消ス可シ但重罪裁判所閉廳ノ後ハ其開廳シタル裁判所ニ其申立チ爲ス可シ 一七七

第二百九十五條 證人呼出ニ應セサル時ハ檢察官其他訴訟關係人ノ請求ニ因リ又ハ裁判所ノ職權ヲ以テ公ヲ延期スルノ言渡ヲ爲ス可キ得

ヲ得

〔二百九十六〕本條ハ第百七十六條ニ定ムル所ト殆ト相同シ

〔二百九十七〕鑑定人ニ關スル規則ハ豫審ニ付キ定ムル所ト異ナルトナシ惟呼出ニ應セサル時ハ事件ノ違警罪ナルト輕罪以上ナルトニ從ヒ科料又ハ罰金ヲ言渡ス者トス

檢察官自ラ其請求ヲ爲サ、ル時ハ公判ノ延期ニ付キ意見ヲ陳述ス可シ

第二百九十六條 證人再度ノ呼出ヲ受ケ仍ホ出廷セサル時ハ檢察官ノ意見ヲ聽キ前ニ定メタル科料罰金ノ二倍及ヒ再度ノ呼出ノ費用ヲ言渡ス可シ此場合ニ於テモ亦前條ニ從ヒ再ヒ公判ヲ延期スルコトヲ得但延期シタル時ハ其證人ニ對シ勾引狀ヲ發ス可シ
第二百九十七條 第百九十一條以下ノ規則ハ公判ニ於テ新ニ命シタル鑑定人ニモ亦之ヲ適用ス但呼出ニ應セサル時ハ第二百九十三條ノ規則ニ從ヒ處分ス可シ

豫審中既ニ鑑定セシタル事件ヲ說明スル爲メ之ヲ呼出ス時ハ証人ト同ク之ヲ待ス是レ其實自己鑑定シタル所ヲ証スル者ナレハナリ

〔二百九十九〕同一ノ事件ニ付キ被告人數名アル時ハ同時ニ之ヲ訊問スルコトヲ得サルヲ以テ其順序ヲ定ム蓋シ正犯ヲ先ニシ從犯ヲ後ニシ又正犯數名アル時ハ其情最モ重キ者ヲ先ニスルヲ至當トス

〔三百〕原被証憑ノ取調終リタル後ハ訴訟關係人各

鑑定人ノ鑑定シタル事件ニ付キ說明ノ爲メ更ニ之ヲ呼出ス時ハ證人ニ付キ定メタル前數條ノ規則ニ從ヒ處分ス可シ

第二百九十八條 被告人聾者啞者又ハ國語ニ通セサル者ナル時ハ第百五十六條第百五十七條ノ規則ニ從フ

第二百九十九條 被告人數名アル時ハ裁判長其意見ヲ述ヘ且檢察官其他訴訟關係人ノ意見ヲ聽キ訊問ノ順序ヲ定ム可シ

裁判長ハ事實發見ノ爲メ必要ナリトスル時ハ職權ヲ以テ其順序ヲ變更スルコトヲ得

第三百條 證憑調濟ノ後檢察官民事原告人被

順序ヲ追ヒ辯論ヲ爲ス可
シ其最終ニハ被告人又ハ
辯護人ヲシテ發言セシム
ルハ全ク被告人ヲ保護ス
ル爲メナラス物ノ順序然
ラサルヲ得サルニ由ル

告人其辯護人及ヒ民事擔當人ハ順次發言ス
可シ三三〇三三三
三九六

檢察官其他訴訟關係人ノ陳述ハ他ヨリ妨礙
スルヲ得ス

檢察官其他訴訟關係人ハ迭ヒニ辯論ヲ爲ス
ヲ得但辯論ノ最終ニハ被告人又ハ辯護人
ヲシテ發言セシム可シ

第三百一一條 檢察官公訴ヲ拋棄スト雖モ裁判
所ニ於テハ本案ニ付キ相當ノ裁判ヲ爲ス可
シ
第三百二條 辯論中公判ノ手續ニ付キ異議ノ
申立アリタル時ハ裁判所ニ於テ檢察官ノ意

「三百一」裁判所ニ於テ一
旦訴ヲ受ケタル以上ハ檢
察官之ヲ拋棄スルモ必ス
其事件ニ付キ裁判ヲ爲ス
可シ但私訴ハ被害者ニ屬
スルヲ以テ被害者其權ヲ
拋棄スル時ハ之ヲ裁判ス
ルヲ得ス
「三百二」公判ノ手續規則

ニ背キタリトシテ異議爭
論ヲ生スル時ハ直チニ之
ヲ判決ス此判決ニ對シテ
ハ上訴スルヲ許スモ元
來事ノ重大ナラサルニ因
リ本案ノ裁判ヲ待タシム
「三百三」民事擔當人ハ被
告人私訴ニ付キ敗訴スル
時ハ賠償ノ責ニ任スル者
ナルカ故ニ被告人ヲ保庇
スル爲メ自ラ訴訟ニ關ス
ルヲ許ス
又民事原告人ハ賠償ノ言
渡ヲ得ルモ更ニ民事擔當
人ニ對シテ起サ、ルヲ
得サルヲ以テ其煩勞ヲ省
ク爲メ民事擔當人ヲシテ
訴訟ニ關係セシムルヲ
得民事擔當人ノ訴訟ニ關
係スルニ付キ異議アル時
ハ直チニ之ヲ判決ス此判
決ニ付テハ直チニ上訴ス

見テ聽キ直チニ之ヲ判決ス可シ但其判決ニ
對スル控訴又ハ上告ハ本案ノ裁判言渡アリ
タル後ニ非サレハ之ヲ爲スヲ得ス

第三百三條 民事擔當人ハ始審終審ヲ問ハス
何時ニテモ其訴訟ニ關係スルヲ得
又民事原告人ハ民事擔當人ヲシテ其訴訟ニ
關係セシムルヲ得

若シ異議ノ申立アリタル時ハ其裁判所ニ於
テ之ヲ判決ス可シ其判決ニ對シテハ本案ノ
裁判言渡ヲ待タス直チニ控訴又ハ上告ヲ爲
スヲ得此場合ニ於テハ本案ノ辯論ヲ停止
ス二七八

ルコトヲ許ス前條ニ定ムル所ト異ナリ
〔二百四〕本條ハ第二百二十八條ノ規則ト異ナルコトナシ

〔二百六〕公訴ニ附帶スル私訴ハ同時ニ其裁判ヲ爲ス可シト雖モ損害ノ多少等未ダ充分ニ取調ヲ經サズル時ハ先ツ公訴ノ裁判ヲ爲シ私訴ノ裁判ヲ延期スルコトヲ得

第三百四條 裁判所ニ於テ刑ノ言渡ヲ爲スニ

ハ事實及ヒ法律ニ依リ其理由ヲ明示シ且一切ノ證據ヲ明示ス可シ三三六、三五九、三六四、四〇〇、

免訴ノ言渡ヲ爲スニ付テモ亦同シ三三五ノ二、三五八ノ二、四〇〇ノ二、

第三百五條 無罪ノ言渡ヲ爲スニハ其理由ト

シテ被告人ニ對シ犯罪ノ證據ナキコトヲ明示ス可シ三三五、三五八、四〇一、

第三百六條 裁判所ニ於テハ公訴ノ裁判ト同

時ニ私訴ノ裁判言渡ヲ爲ス可シ四、六、一六、

私訴ニ付キ取調未ダ充分ナラサル時ハ公訴ノ裁判アリタル後其裁判言渡ヲ爲スコトヲ得

〔二百七〕刑ノ言渡ヲ受ケル者ハ其犯罪ノ爲メ訴訟ヲ起スニ至ラザルニテ以テ公訴裁判費用ノ全部又ハ幾分ヲ償却擔當セシム
無罪免訴ト爲ル可キ者ハ固ト之ヲ訴フ可カラズ而ルニ檢察官之ヲ訴フ是レ檢察官ノ過誤ニ因リ費用ヲ要スルニ至リタルナリ故ニ官ニテ悉皆之ヲ擔當ス
〔二百八〕官ニ沒収セサル差押物品ヲ所有主ニ還付シ其請求ヲ待タサルハ所有權ヲ重クスルニ因ル

第三百七條 被告人刑ノ言渡ヲ受ケタル時ハ

裁判所ノ職權ヲ以テ公訴裁判費用ノ全部又ハ幾分ヲ擔當ス可キノ言渡ヲ爲ス可シ四、刑、四、

免訴又ハ無罪ノ言渡アリタル場合ニ於テ公訴裁判費用ハ官ニテ之ヲ擔當ス可シ

私訴裁判費用ハ民事ノ規則ニ從ヒ敗訴シタル者之ヲ擔當ス可シ

第三百八條 被告人刑ノ言渡ヲ受ケタルト否

トヲ問ハス沒収ニ係ラサル差押物品ハ所有主ノ請求ナシト雖モ之ヲ還付スルノ言渡ヲ爲ス可シ刑、四八、

第三百九條 本案ノ裁判言渡ニ對スル上訴ノ

ノ後ニ非サレハ之ヲ執行
ス可カラス故ニ其確定ス
ルヲ待ツナリ

〔二百十〕逃亡シタル刑囚
上訴ヲ爲スコトヲ得ル時ハ
僕倅ニシテ自己ニ利益ア
ル判決ヲ得ン爲メ必ス上
訴ヲ怠ラサル可キ故ニ之
ヲ禁ス

〔二百十一〕勾留ヲ受ケル
者ハ上訴又ハ保釋ヲ求ム
ル爲メ之ヲ書記局ニ引致
スル時ハ其逃亡ヲ得セシ
ムルノ恐アリ故ニ監獄長
ヲ經由セシム

〔二百十二〕變災厄難ノ爲
メ上訴期限ヲ徒ニ經過ス
ルハ自ラ上訴ノ權ヲ棄テ
ルニ非サルヲ以テ其證明
アリタル時ハ權利ヲ回復

期限内又上訴アリタル時ハ其判決アルマテ
裁判執行ヲ停止ス 四五九

第三百十條 禁錮以上ノ刑ノ言渡ヲ受ケタル
者逃亡シタル時ハ現ニ捕ニ就クニ非サレハ
上訴ヲ爲スコトヲ得ス 二二二

第三百十一條 勾留ヲ受ケタル者上訴ヲ爲シ
又ハ保釋ヲ求ムル時ハ其申立書ヲ監獄長ニ
差出シ監獄長ヨリ之ヲ其裁判所ノ書記ニ差
出ス可シ

第三百十二條 訴訟關係人又ハ其代人非常ノ
變災厄難ニ因リ上訴期限ヲ經過シタル場合
ニ於テ其旨ヲ證明シタル時ハ期限ヲ經過シ

シ更ニ上訴ヲ爲スコトヲ得
セシム

〔二百十二〕上訴期限ヲ經
過シタルハ全ク變災厄難
ニ原ツク乎否豫メ之ヲ取
調ヘサル時ハ無用ナル手
續ヲ爲シ且無用ニ時日ヲ
費スノ恐アリ是ヲ以テ豫
メ其上訴ヲ受理ス可キヤ
否ノ判決ヲ爲ス可シ

タルニ因リ失ヒタル權利ヲ回復スルコトヲ得

但變災厄難ヲ免カレタルヨリ通常ノ期限内

ニ其證據ヲ申立書ニ添ヘ上訴ヲ爲ス可シ〇

第三百十三條 書記ハ速ニ前條ノ申立書ヲ對
手人ニ送達ス可シ對手人ハ三日内ニ答弁書
ヲ差出スコトヲ得

上訴ヲ判決ス可キ裁判所ニ於テハ會議局ニ
テ檢察官ノ意見ヲ聽キ先ツ其上訴ヲ受理ス
可キヤ否ヲ判決ス可シ

上訴ヲ受理ス可キ者ト判決シタル時ハ書記
ヲシテ其旨ヲ訴訟關係人ニ通知セシメ通常
ノ規則ニ從ヒ本案ノ裁判ヲ爲ス可シ

〔三百十四〕原被ノ弁論全ク終リタル時ハ直ニ裁判ヲ爲ス者トス然レモ事件繁難ニシテ法律適用ノ爲メ又ハ言渡書ヲ作ル爲メ數時間ヲ要スル時ハ次日ニ至リ言渡ヲ爲スコトヲ許ス
事件ニ干預シタル官吏ノ氏名ヲ記載スルハ裁判所ノ構成規則ニ背カサルコト示メ爲メナリ

〔三百十五〕裁判言渡書ハ當然之ヲ訴訟關係人ニ下

上訴ヲ受理ス可カラサル者ト判決シタル時ハ他ノ原由アルニ非レハ即時ニ裁判執行ヲ爲サシム可シ

第三百十四條 裁判言渡ハ辯論ヲ終リタル後公廷ニ於テ即時ニ之ヲ爲シ又ハ次日ニ之ヲ爲ス可シ

裁判言渡書ハ其言渡前裁判官之ヲ作り書記ト共ニ署名捺印ス可シ

裁判言渡書ニハ其言渡ヲ爲シタル裁判所年月日其事件ニ干預シタル檢察官ノ氏名ヲ記載ス可シ

第三百十五條 訴訟關係人ハ其費用ヲ以テ裁

付セズ其請求アリタル時ハ謄寫ノ費用ヲ納メシメテ之ヲ與フ是レ裁判ノ實ハ判事公廷ニテ口ツカラ言渡シタル所ニ在リテ言渡書ニ存スル者ニ非サレハナリ
〔三百十六〕本條ハ第二百五十八條ノ規則ト其趣意異ナルコトナシ

判言渡書ノ謄本又ハ其拔書ヲ求ムルコト得但上訴ノ爲メ其求ヲ爲シタル時ハ書記ヨリ二十四時内ニ之ヲ下付ス可シ

第三百十六條 對審裁判ニ因リ刑ノ言渡アリタル時ハ裁判長ヨリ其言渡ヲ受ケタル者ニ前條ノ諸求及ヒ其言渡ニ對シ控訴又ハ上告ヲ爲スヲ得可キコト及ヒ其期限ヲ告知シ又關席裁判ニ因リ刑ノ言渡アリタル時ハ其言渡ニ對シ故障ヲ爲スヲ得可キコト及ヒ其期限ヲ言渡書ニ記載ス可シ 二五八、

若シ其告知又ハ記載ナキ時ハ通常ノ規則ニ從ヒ其告知アルマテ上訴期限ノ經過ヲ停止

三百十七) 公判始末書ハ
開廷ヨリ裁判言渡ニ至ル
マテニ爲シタル手續及ヒ
其間ニ生シタル事件ヲ記
載スル者ニシテ上訴アリ
タル場合ニ於テ其上訴ヲ
判決ス可キ裁判所ニテ原
裁判手續法律ニ背クヤ否
ヤヲ知ルハ此始末書アル
ニ依ルナリ

スニ〇

第三百十七條 書記ハ各事件ニ付キ各別ニ公
判始末書ヲ作り左ノ條件其他一切ノ訴訟手
續ヲ記載ス可シ
一 裁判ヲ公行シタルヲ又ハ傍聽ヲ禁スルノ
言渡アリタルヲ及ヒ其事由ニ六〇、
二 被告人ノ訊問及ヒ其陳述
三 證人鑑定人ノ陳述及ヒ宣誓ヲ爲シタルヲ
若シ宣誓ヲ爲サル時ハ其事由
四 原被ノ證據物件
五 辯論中異議ノ申立アリタルヲ後日ナ期シ
テ申立ツ可キ事件ヲ申立タルヲ是等ノ事

(三百十八) 本條末項ノ規
則即チ豫備判事ヲシテ代
ラシムル云々トハ重罪ノ
裁判ニ限り用フ可キ者ニ
シテ他ノ事件ニ付テハ豫
備判事ナル者ヲ置クコトナ
シ第三百八十七條ヲ見ル
可

件ニ付キ檢察官其他訴訟關係人ノ意見及
ヒ裁判所ノ判決ニ七三〇ニ、
六 辯論ノ順序及ヒ被告人ヲシテ最終ニ發言
セシメタルヲ三〇〇、
第三百十八條 公判始末書ニハ前條ニ記載シ
タル條件ノ外言渡ヲ爲シタル裁判所年月日
裁判長陪席判事檢察官及ヒ書記ノ氏名ヲ記
載ス可シ
辯論數日ニ涉ル時ハ其旨及ヒ同一ノ裁判官
出席シタルヲ記載ス可シ
辯論中豫備判事ヲシテ代ラシメタル時ハ其
旨ヲ記載ス可シ檢察官及ヒ書記ニ付テモ亦

〔二百十九〕書記ハ公廷ニ於テ審判中ノ手續及ヒ其中ニ生シタル事件ヲ錄取スト雖モ從テ聞キ從テ筆スルコト因リ自ラ文辭ヲ省略セサル可カラズ又或ハ文字ニ代フルニ記號ヲ以テスルコトアル可シ故ニ言渡ヨリ三日ノ猶豫ヲ置キ整頓ヲ爲サシム

〔二百二十一〕裁判言渡書及ヒ公判始末書ハ其散佚セシノコト恐ル、ナリテ上訴ノ場合ニ於テモ之ヲ其判決ヲ爲ス可キ裁判所ニ差出サス其謄本ヲ作り之ヲ送致スルノミ

同シ

第三百十九條 公判始末書ハ裁判言渡ヨリ三日内ニ之ヲ整頓シ裁判長及ヒ書記署名捺印ス可シ

裁判長ハ署名捺印セサル以前ニ公判始末書ヲ檢閲シ若シ意見アル時ハ其紙尾ニ記載ス可シ

第三百二十條 裁判言渡書及ヒ公判始末書ノ正本ハ其裁判所ノ書記局ニ保存ス可シ
上訴アリタル時ハ裁判長及ヒ書記裁判言渡書及ヒ公判始末書ノ謄本ニ認印シ之ヲ上訴書類ニ添フ可シ

第二章 違警罪公判

第三百二十一條 違警罪裁判所ニ於テハ左ノ

條件ニ因テ公訴ヲ受理ス

一 檢察官ノ請求ニ因リ書記局ヨリ被告人ニ對シ發シタル呼出狀

二 豫審判事又ハ上等ノ裁判所ノ判決ニ因リ其事件ヲ移スノ言渡二二五、二五二、四二八

第三百二十二條 呼出狀ニハ呼出ヲ受ク可キ者ノ氏名職業住所出廷ノ日時被告事件及ヒ代人ヲシテ出廷セシムルコトヲ得可キ旨ヲ記載ス可シ若シ被告事件ノ記載ナキ場合ニ於テ被告人未タ其證人ヲ呼出サ、ル時ハ公廷

〔二百二十一〕末項上等ノ裁判所ノ判決ニ因リ事件ヲ受クルトハ最初其事件ヲ輕罪又ハ重罪ト誤認シ豫審ヲ行ヒ故障ノ末輕罪裁判所會議局ニテ違警罪ナルコト發見シ之ヲ違警罪裁判所ニ付シ又ハ大審院ニテ他ノ違警罪裁判所ノ言渡ヲ破毀シ其事件ヲ送付スル等ノ場合ヲ云フ
〔二百二十二〕呼出狀ニハ人違ナカラシムル爲メ被告人ノ氏名等ヲ詳記ス可シ又被告人ヲシテ弁護ノ用意ヲ爲サシムル爲メ被告事件ノ如何ナルヤヲ記ス可シ若シ之ヲ記セサル時ハ被告人何ノ爲メニ呼出ヲ受クルヤヲ知ラサルヲ以

テ公廷ニテ事件ノ告知ヲ受ケタル上ニテ二日ノ猶豫ヲ求ムルコトヲ許ス然レモ被告ノ於テ既ニ其證人ヲ呼出シタル時ハ呼出狀ニ事件ノ記載ナキモ之ヲ知ルカ故ニ証人ヲ呼出シタルニ相違ナキヲ以テ此猶豫ヲ求ムルノ權ナシトス

又違警罪ノ裁判ニハ本人必ス出廷スルコトヲ要セサルヲ以テ代人ヲシテ出廷セシムルコトヲ得可キ旨ヲ呼出狀ニ記載スルナリ

〔三百二十一〕二日以上ノ猶豫ヲ與フルハ被告人ヲシテ辯護ヲ豫備スルコトヲ得セシムル爲メナリ

〔三百二十四〕違警罪ニハ豫審ナシ故ニ公判ニ於テ證據ヲ集取スルノ處分ヲ

ニテ其事件ノ告知ヲ受ケタル後其呼出及ヒ辯護ノ爲メ二日ノ猶豫ヲ求ムルコトヲ得

第三百二十三條 呼出狀ノ送達ト出廷トノ間少クトモ二日ノ猶豫アル可シ

第三百二十四條 違警罪裁判官ハ被告事件急速ヲ要スル時ハ公判ニ取掛ル前檢察官其他訴訟關係人ノ請求ニ因リ又ハ職權ヲ以テ對手人ノ立會ヲ要セスシテ檢證處分ヲ爲スヲ得 一五八以下

第三百二十五條 證人ハ呼出狀ノ送達ト出廷トノ間少クトモ二十四時ノ猶豫ヲ以テ之ヲ呼出ス可シ

爲スト雖モ急速ヲ要スル事件ニ付テハ公判ニ取掛ル前犯所臨檢物件差押等ノ處分ヲ爲スコトヲ許ス

〔三百二十五〕証人ト雖モ唐突ニ之ヲ呼出ス時ハ私事ヲ弁ヌルノ間ナキヲ以テ大ニ迷惑スルコトアル可シ故ニ二十四時ノ猶豫ヲ以テ呼出スナリ

呼出ヲ受ケサル者ハ証人トシテ之ヲ聽クコトヲ得スト雖モ違警罪ハ罪ノ極小ナルモノナルヲ以テ訊問前名刺ヲ差出シタル者ニ限り証人ト爲スコトヲ得其既ニ公判ノ始マリタル半ハニシテハ証人ト爲サルナリ

〔三百二十六〕事件ノ呼立ニ應セスト雖モ遅刻シテ出廷スルコトナシトセズ故

又呼出ヲ受ケスシテ出廷シタル者ト雖モ訊問前其名刺ヲ書記ニ差出シタル時ハ裁判所ニ於テ證人トシテ其陳述ヲ聽クコトヲ得

第三百二十六條 書記ハ各事件毎ニ訴訟關係人ノ氏名ヲ呼立ツ可シ若シ其呼立ニ應セサル時ハ他ノ事件ノ裁判ヲ終リタル後其事件ヲ裁判ス可シ

第三百二十七條 違警罪裁判官ハ最初ニ被告人ノ氏名年齢身分職業住所出生ノ地ヲ問フ可シ 三五二、

官吏ノ作りタル調書又ハ申立書アル時ハ書記之ヲ朗讀ス可シ

ニ即時ニ闕席裁判ヲ爲サ
ス其事件ヲ後ニ回ス可シ
〔二百二十七〕司法警察官
ノ作リタル調書又ハ巡查
等ノ申立書ハ証憑トシテ
之ヲ朗讀セシメタル後原
告官タル檢察官ニ於テ被
告事件ノ如何ナルヤヲ詳
述ス可シ
〔二百二十八〕被告人代人
ヲ以テ白狀ヲ爲ストモ容
易ニ之ニ信據ス可カラズ
必ス本人ニ於テ署名捺印
シタル書面ヲ差出サシム
〔二百二十九〕違警罪ハ罪
ノ極小ナル者ナルヲ以テ
白狀アリタル時ハ之ニ依
リテ直チニ裁判ヲ爲ス可
ク得セシム

〔二百三十〕法律ノ適用ニ

檢察官ハ被告事件ヲ陳述ス可シ 三四、

第三百二十八條 違警罪裁判官ハ被告人ニ被

告事件ヲ承認スルヤ否ヲ訊問ス可シ

若シ被告人代人ヲ以テ白狀ヲ爲ス時ハ其署
名捺印シタル書面ヲ差出ス可シ

第三百二十九條 被告人ノ白狀アリタル時ハ

他ノ證憑ヲ差出スニ及ハス但裁判所ニ於テ

ハ檢察官民事原告人ノ請求ニ因リ又ハ職權

ヲ以テ之ヲ差出サシムルコトヲ得三五二、
三九一、

若シ白狀ナキ時ハ原被ノ証人ヲ訊問シ其他
證憑アル時ハ之ヲ差出ス可シ

第三百三十條 檢察官ハ法律ノ適用ニ付キ意

付キ意見ヲ陳スルトハ此
罪タル刑法何條ニ當ル者
ナリト申立ルコトヲ云フ
民事原告人ハ損害ヲ被リ
タルノ事件ニ付キ其証ヲ
擧ケ然ル後若干圓ノ償金
ヲ要ムル旨ヲ申立ツ可シ

〔二百三十一〕訴訟關係人
出廷セサル時ハ一方ノ者
ノ請求スル所ヲ聽キタル
ノミニシテ裁判ヲ爲ス之
ヲ闕席裁判ト云フ蓋シ此
闕席裁判ハ必ス闕席者ノ
不利益ト爲ル可シト雖モ
固ト出廷セサルノ過失ア
ルニ因リ亦止ムコトヲ得サ
ル所ナリトス
〔二百三十二〕闕席裁判ニ
付テハ故障ヲ許スヲ以テ
其言渡書ヲ闕席者ニ送達

見ヲ陳述ス可シ三四三、〇三三三、
三九八、

民事原告人ハ被害事件ヲ證明シ及ヒ要償ニ

付キ意見ヲ陳述ス可シ

被告人民事擔當人又ハ其代人ハ答辯ヲ爲ス

可シ

第三百三十一條 呼出ヲ受ケタル被告人民事

擔當人又ハ其代人出廷セサル時ハ檢察官及

ヒ民事原告人ノ請求スル所ヲ聽キ闕席裁判

ヲ爲ス可シ

民事原告人出廷セサル時亦同シ

第三百三十二條 闕席裁判言渡書ハ檢察官其

他訴訟關係人ノ請求ニ因リ闕席シタル者又

ス
故障ノ申立ハ前ニ裁判ヲ
爲シタル判事ニテ之ヲ判
決ス

〔三百二十三〕正當ノ事由
ナクシテ闕席シタル者ニ
付テハ故障ヲ許サス故ニ
其申立アリタル時ハ先ツ
之ヲ受理ス可キヤ否ヲ取
調ヘ可決シタル場合ニ於
テハ日時ヲ定メテ再ヒ其
事件ヲ公判ニ付ス此場合
ニ於テハ前ノ裁判當然消
滅スルヲ以テ訴訟關係人
ヲ殘ラズ呼出ス者トス

ハ其住所ニ之ヲ送達ス可シ
闕席裁判ヲ受ケタル者故障ヲ爲サントスル
時ハ言渡書ノ送達アリタルヨリ三日内ニ其
申立書ヲ書記局ニ差出ス可シ

第三百三十三條 裁判所ニ於テハ先ツ故障ノ
申立ヲ受理ス可キヤ否ヲ判決ス可シ若シ受
理ス可キ者ト判決シタル時ハ書記ヨリ故障
アリタルヲ及ヒ其事件ヲ公判ニ付ス可キ日
時ヲ故障ノ對手人ニ通知スル爲メ呼出狀ヲ
送達ス可シ但其送達ト出廷トノ間少クトモ
二日ノ猶豫アル可シ
又公判ニ付ス可キ日時ヲ其前日ニ故障ノ申

立人ニ報知ス可シ

第三百三十四條 故障ノ申立ヲ受理シタル場
合ニ於テハ第三百二十六條ヨリ第三百三十
條マテノ規則ニ從ヒ更ニ裁判ヲ爲ス可シ
其裁判ニ闕席シタル者ハ故障ヲ爲スヲ得
ス

第三百三十五條 犯罪ノ證據充分ナラサル時
ハ裁判所ニ於テ無罪ノ言渡ヲ爲ス可シ
第二百二十四條第三以下ノ場合ニ於テハ免
訴ノ言渡ヲ爲ス可シ

第三百三十六條 被告事件違警罪ニシテ且證
憑充分ナル時ハ法律ニ從ヒ刑ノ言渡ヲ爲ス

〔三百三十四〕故障ノ申立
ヲ受理シタル時ハ訴訟事
件最初ノ位置ニ復スルヲ
以テ其裁判ヲ爲スニハ總
テ通常ノ式ニ從フ
故障ノ裁判ニ出廷セサル
者ハ其申立人ナルト對手
人ナルトチ問ハス闕席ノ
儘裁判ヲ受クルト雖モ故
障ヲ爲スヲ得ス是レ之
ヲ許ス時ハ闕席裁判ニ續
クニ闕席裁判ヲ以テシ從
テ裁判確定スルノ期ナキ
ニ至レハナリ
〔三百三十五〕豫審ニ於テ
ハ犯罪ノ證據充分ナラス
又ハ被告事件罪ト爲ラサ
ル時ト雖モ免訴ノ言渡ヲ
爲スニ過キス公判ハ之ニ
反シ此二箇ノ場合ニ於テ

ハ無罪ノ言渡ヲ爲スナリ
 惟公訴ノ消滅シタル時ニ
 限リ免訴ヲ言渡ス者トス
 〔三百二十七〕重罪輕罪ハ
 違警罪裁判所ノ管轄スル
 一ヲ得可キ者ニ非サルヲ
 以テ管轄違ノ言渡ヲ爲シ
 而シ其事件ニ付キ豫審ヲ
 要スルコトアル可キヲ以テ
 檢事ニ送致ス此場合ニ於
 テハ事件重大ニシテ被告
 人ノ逃亡ヲ恐ル、時ハ違
 警罪判事ニテ勾留狀ヲ發
 シ巡査ヲシテ護送セシム
 ルコトヲ得

可シ
 第三百三十七條 被告事件重罪又ハ輕罪ナル
 時ハ管轄違ノ言渡ヲ爲シ其事件ヲ輕罪裁判
 所檢事ニ送致ス可シ但被告人ニ對シ勾留狀
 ナ發スルコトヲ得 四八、
 第三百三十八條 違警罪裁判所ノ裁判言渡ニ
 對シテハ左ノ區別ニ從ヒ輕罪裁判所ニ控訴
 スルコトヲ得
 一 被告人ハ拘留ノ刑ノ言渡ヲ受ケタル時
 二 民事原告人被告人及ヒ民事擔當人ハ要償
 ニ付テノ言渡民事上治安裁判所ノ終審ノ
 金額ヲ超過シタル時

ヲ爲シ遂ニ時日費用ヲ増
 スニ至ルノ恐アレハナリ
 第一第二ニ於テハ拘留ノ
 刑ノ言渡アリタル時又治
 安裁判所ノ終審ノ金額ヲ
 超過シタル時ニ限リト定
 ムルモ法律ニ背ムコトノ
 甚シキ者アル時ハ此制限
 ニ拘ハラヌ控訴ヲ爲スコ
 ト許ス管轄違越權等ノ原
 由アル時はナリ其無効ノ
 記載アル規則ニ背クトハ
 法律ノ明文アリテ若シ背
 ク時ハ其處分ヲ無効トス
 ル旨ヲ定メタル規則ヲ守
 ラサル時ヲ指ス第二百六
 十三條ノ規則ノ類
 〔三百二十九〕控訴ハ輕罪
 裁判所ニ爲ス者ナレ其
 期限短縮ナルヲ以テ先ツ
 違警罪裁判所ニ其旨ヲ申
 立テシム

三 檢察官其他訴訟關係人ハ上ニ記載シタル
 原由アラサル時ト雖モ管轄違越權擬律ノ
 錯誤又ハ無効ノ記載アル規則ニ背キタル
 時 四八、
 第三百三十九條 控訴ヲ爲サントスル者ハ原
 裁判所ノ書記局ニ其申立書ヲ差出ス可シ但
 其申立ノ期限ハ對審裁判ニ付テハ言渡ヨリ
 三日内又關席裁判ニ付キ故障アラサル時ハ
 本人又ハ其住所ニ言渡書ノ送達アリタルヨ
 リ五日内トス 三三二、
 控訴ヲ爲スノ申立アリタル時ハ書記ヨリ其
 旨ヲ對手人ニ通知ス可シ

開席裁判ヲ受ケタル者ハ
 故障ヲ爲サズシテ控訴ヲ
 爲スコトヲ得此場合ニ於テ
 ハ少シク期限ヲ長クス
 〔二百四十〕控訴アリタル
 時ハ輕罪裁判所ニテ更ニ
 裁判ヲ爲スニ因リ原訴訟
 書類ヲ悉皆差出サシム
 私訴ノ裁判ニ付キ控訴ア
 リタル場合ニ於テハ檢察
 官毫モ關係ナキヲ以テ止
 タ一切ノ書類ヲ送致スル
 ノ處分ヲ爲スノミ之ニ反
 シ公訴ノ裁判ニ付キ檢察
 官控訴ヲ爲シ又ハ被告人
 ヨリ其申立ヲ爲シタル時
 ハ其對手人ト爲ルヲ以テ
 末項ノ規則ニ從ヒ該官吏
 其意見書ヲ差出ス可シ

第三百四十條 訴訟ニ關スル一切ノ書類ハ檢
 察官ヨリ控訴ヲ受ク可キ裁判所ノ書記局ニ
 之ヲ送致ス可シ
 若シ檢察官控訴ノ申立人又ハ對手人ナル時
 ハ控訴ヲ受ク可キ裁判所ノ檢察官ニ其意見
 書ヲ差出ス可シ
 第三百四十一條 控訴ヲ受ク可キ裁判所ニ於
 テハ書記局ヨリ訴訟關係人ニ對シ呼出狀ヲ
 發シタル後其裁判ニ取掛ル可シ
 呼出狀ノ送達ト出廷トノ間少クトモ二日ノ
 猶豫アル可シ
 證人ハ呼出狀ノ送達ト出廷トノ間少クトモ

〔二百四十二〕本條ハ第二
 百四十九條ト其趣旨ヲ同
 フス但故障ノ差ト控訴ト
 異アルノミ
 〔二百四十二〕控訴ハ輕罪
 裁判所ニテ判決スルヲ以
 テ其裁判ノ法式ハ後章ニ
 定ムル所ニ從フ然レモ証
 人ト爲ル可キ者ハ訴訟關
 係人ヨリ隨意ニ之ヲ呼出
 スコトヲ得ス必ス裁判長ノ
 允許アルヲ要ス是レ偏ニ
 費用ヲ減省セシガ爲メナ
 リ

〔二百四十四〕輕罪裁判所
 ニ於テ控訴ノ理ナキコトヲ

一日ノ猶豫ヲ以テ之ヲ呼出ス可シ 三四三
 第三百四十二條 控訴ノ對手人ハ其裁判言渡
 アルマテ何時ニテモ附帶ノ控訴ヲ爲スコトヲ
 得但附帶ノ控訴ハ公廷ニ於テ直チニ之ヲ申
 立ルコトヲ得 二四九
 第三百四十三條 控訴ニ係ル事件ハ輕罪ノ裁
 判ヲ爲スニ付キ定メタル規則ニ從ヒ之ヲ裁
 判ス可シ
 檢察官其他訴訟關係人ハ裁判長ノ允許ヲ得
 ルニ非サレハ新ナル證人又ハ始審ニ於テ陳
 述シタル證人ヲ呼出スコトヲ得ス
 第三百四十四條 控訴ヲ受ケタル裁判所ニ於

認メタル時ハ違警罪裁判
所ノ言渡ヲ認可シ又其理
アリトスル時ハ原裁判ヲ
取消シタル上ニテ相當ノ
裁判ヲ爲ス可シ然レモ檢
察官控訴ヲ爲サス被告人
ノミ之ヲ爲シタル時ハ假
令原裁判ヲ取消スモ更ニ
重キ刑ヲ言渡スコトヲ得ス
是レ被告人ハ己レニ利益
アル言渡ヲ得ンカ爲メ控
訴シタル者ナルヲ以テ其
上訴ノ權ヲ行ヒタルカ爲
メ却テ不利益ナル位置ニ
陥ラセムルノ理アラサレ
ハナリ若シ公衆ノ代理ダ
ル檢察官モ亦控訴ヲ爲シ
タル時ハ之ニ異ナリ原告
モ被告モ共ニ原裁判ニ服
セサルヲ以テ輕罪裁判所
ニテ自由ニ裁判ヲ爲スコ
ト得可シ

テハ原裁判言渡ヲ認可スルノ言渡ヲ爲シ又
ハ之ヲ取消シ更ニ裁判言渡ヲ爲ス可シ
被告人ノミ控訴ヲ爲シタル時ハ原裁判言渡
ヨリ重キ刑ヲ言渡スコトヲ得ス
私訴ニ付テノ控訴ノ裁判ハ通常民事ノ規則
ニ從フ
第三百四十五條 第三百三十一條以下ノ規則
ハ控訴ノ關席裁判ニ付テモ亦之ヲ適用ス
第三百四十六條 檢察官其他訴訟關係人ハ違
警罪事件ノ終審ノ對審裁判言渡ニ對シ上
告ヲ爲スコトヲ得以下

第三章 輕罪公判

私訴ニ付テノ控訴ノ裁判
ハ此治罪法ニ定ム可キニ
非ス故ニ民事規則ニ讓レ
リ
〔二百四十五〕控訴ノ裁判
ニモ亦關席スル者ナシト
セス故ニ第三百三十一條
以下ノ規則ヲ適用ス
〔二百四十六〕第三百三十
八條ニ定メタルヨリ以外
ノ裁判ハ皆ニ終審ナリ控
訴ニ付テノ輕罪裁判所ノ
裁判モ亦終審ナリ第四百
十條ニ定メタル原由アル
時ハ上告スルコトヲ得蓋シ
始審ナレハ控訴スルコトヲ
得可ク又關席裁判ナレハ
故障ヲ爲スノ途アリ故ニ
最極ノ上訴タル上告ハ終
審ノ對審裁判ニ對スルニ
非サレハ之ヲ爲スコトヲ許
サス

第三百四十七條 輕罪裁判所ニ於テハ左ノ條
件ニ因テ公判ヲ受理ス
一 檢察官ノ請求ニ因リ書記局ヨリ被告人ニ
對シ發シタル呼出狀一〇七、二、
二 豫審判事輕罪裁判所會議局又ハ上等ノ裁
判所ノ判決ニ因リ其事件ヲ爲スノ言渡ニ
六、二五二、
四二八、
第三百四十八條 呼出狀ニ付テハ第三百二十
二條第三百二十三條ノ規則ニ從フ
第三百四十九條 被告事件罰金ノ刑ニ該ル可
キ時ハ代人ヲシテ出廷セシムルコトヲ得可キ
官ヲ呼出狀ニ記載ス可シ

〔二百四十七〕輕罪裁判所ニテ公訴ヲ受理スルノ條件ハ違警罪ニ付キ第三百二十一條ニ定ムル所ト異ナルヲナシ

〔二百四十八〕呼出狀ニ記載ス可キ條件及ヒ被告人出廷ニ付キ猶豫ノ期限ヲ與フルハ違警罪ニ同シ

〔二百五十一〕第七條第二項ニ從ヒ檢察官ヨリ直チニ公訴ヲ爲サタル時ハ未ダ豫審アラサルヲ以テ時宜ニ依リ公判前檢証處分ヲ爲スヲ許ス

民事原告人及ヒ民事擔當人ハ代人ヲシテ出廷セシムルヲ得

第三百五十條 證人ハ呼出狀ノ送達ト出廷トノ間少クトモ一日ノ猶豫ヲ以テ之ヲ呼出ス可シ

第三百五十一條 第三百二十四條ノ規則ハ豫審ヲ經サル輕罪事件ニモ亦之ヲ適用ス

二〇九

第三百五十二條 檢察官ハ裁判長ヨリ被告人ノ氏名年齢職業住所及ヒ出生ノ地ヲ問ヒタル後被告事件ヲ陳述ス可シ

一三四

民事原告人ハ被告事件ヲ證明ス可シ

〔二百五十四〕罰金ノ刑ニ該ル可キ被告人又ハ代人出廷セサハ時ハ直チニ關

調書又ハ申立書アル時ハ書記ヲシテ之ヲ朗讀セシメ次ニ原被證人ノ陳述ヲ聽キ且證據物件ヲ被告人ニ示シ辯解ヲ爲サシム可シ

被告人及ヒ民事擔當人ハ答辯ヲ爲ス可シ

第三百五十三條 檢察官ハ法律ノ適用ニ付キ其意見ヲ陳述ス可シ

一三四

民事原告人ハ要償ニ付キ其意見ヲ陳述ス可シ

被告人及ヒ民事擔當人ハ更ニ答辯ヲ爲スヲ得

第三百五十四條 罰金ノ刑ニ該ル可キ被告人又ハ第二百六十九條ノ規則ニ從ヒ關席裁判

席裁判ヲ爲ス禁錮ノ刑ニ該ル可キ者ハ第二百六十九條ノ規則ニ從フニ非サレハ關席ノ儘裁判スルヲ許サス

〔三百五十六〕關席ノ儘ニテ罰金ノ刑ノ言渡ヲ受ケタル者故障ヲ爲スノ手續期限ハ違警罪ニ付キ前章ニ定メタル規則ニ從フト雖モ禁錮ノ刑ノ言渡ヲ受ケタル者ニ付テハ刑法第五十九條ニ從ヒ刑ノ期滿免除ニ至ルマテハ何時ニテモ故障ヲ爲スハ許サズ是レ其刑ノ稍重大ニ涉ルヲ以テナリ

ヲ爲スコトヲ得可キ被告人其呼出ノ日時ニ出廷セサル時ハ關席裁判ヲ爲ス可シ 三二六
第三百五十五條 關席裁判ニ關スル第三百三十一條ヨリ第三百三十四條マテノ規則ハ此章ニモ亦之ヲ適用ス

第三百五十六條 關席裁判ニ因リ禁錮ノ刑ノ言渡ヲ受ケタル被告人ハ左ノ場合ヲ除クノ外刑ノ期滿免除ニ至ルマテ故障ヲ爲スコトヲ得

一 被告人本案ノ裁判前豫メ裁判ス可キ事件ヲ申立タル時

二 裁判言渡書ヲ本人ニ送達シタル時

三 被告人裁判執行ニ因リ刑ノ言渡アリタル

コトヲ知リタルノ證アル時

第一ノ場合ニ於テハ言渡書ノ送達アリタルヨリ第二第三ノ場合ニ於テハ言渡アリタルコトヲ知リタルヨリ三日内ニ故障ヲ爲スコトヲ得

第三百五十七條 裁判所ニ於テ事實發見ノ爲メ必要ナリトスル時ハ檢察官其他訴訟關係人ノ請求ニ因リ又ハ職權ヲ以テ新ナル證人ヲ呼出シ鑑定人ヲ命シ若クハ臨檢ヲ爲スコトヲ得但是等ノ處分ヲ爲スニ付テハ第三編第三章ニ定メタル規則ニ從フ

法律ニ於テハ斯ノ如ク定ムルト雖モ亦特ニ二三ノ例外ヲ措ク即チ第一第二第三ノ場合はレナリ
第一ハ被告人本案ノ裁判ニ取掛ル前裁判所ノ管轄違又ハ公訴受理ス可カラサルコト等ヲ申立ツ此場合ニ於テハ被告人其被告事件公判ニ付セラルコトヲ知ルナリ第二ハ自言言渡書ノ送達ヲ受ク即チ裁判アリタルコトヲ知ルナリ第三ハ關席裁判ノ執行ニ因リ言渡アリタルコトヲ知ルナリ此三箇ノ場合ニ於テハ被告人裁判アルコトヲ知ルヲ以テ永ク故障ノ權ヲ與ヘズ是レ末項ノ規則アル所以ナリ

〔三百五十七〕裁判所ニ於テハ會テ豫審判事豫審ヲ

爲シタルニ拘ハラテ事實
ノ取調未タ充分ナラサル
ニ因テ裁判ヲ下シ難シト
スル時ハ訴訟關係人ノ請
求アルト否トヲ問ハス第
三編第三章ニ定メタル規
則ニ從ヒ豫審ノ處分ヲ爲
スコトヲ得
又豫審ヲ經ス檢事ヨリ直
チニ被告人ヲ公判ニ付シ
タル場合ニ於テ事實發見
ノ爲メ必要ナリトスル時
ハ條件ヲ定メテ豫審ヲ行
ハシムルノ權アリ
〔二百五十八〕第三百三十
五條ノ趣旨ニ同シ惟禁錮
ニ該ル可キ事件トシテ公
訴アリタル時ハ被告人ヲ
勾留スルコトアルヲ以テ其
場合ニ於テハ放免ノ言渡
ヲモ爲ササル可カラズ
〔二百五十九〕大ハ小ヲ容

又豫審ヲ經サル事件ニ付テハ豫審判事テ
テ其指示スル所ノ條件ニ付キ取調ヲ爲シ且
其報告書ヲ差出サシムルヲ得 一〇七ノ二
第三百五十八條 犯罪ノ證據充分ナラサル時
ハ裁判所ニ於テ無罪ノ言渡ヲ爲ス可シ
又第二百二十四條第三以下ノ場合ニ於テハ
免訴ノ言渡ヲ爲ス可シ
本條ノ場合ニ於テ被告人勾留ヲ受ケタル時
ハ放免ノ言渡ヲ爲ス可シ
第三百五十九條 被告事件違警罪ナル時ハ終
審ノ裁判言渡ヲ爲シ且被告人勾留ヲ受ケタ
ル時ハ釋放ノ言渡ヲ爲ス可シ

レ重ハ輕ヲ含ム故ニ輕罪
裁判所ハ違警罪ヲ管轄セ
スト雖モ輕罪トシテ訴ヘ
ラレタル事件違警罪ニ過
キサルコトヲ知ル時ハ之ヲ
裁判ス可シ而シテ輕罪裁判
所ハ違警罪裁判所ノ裁判
ニ對スル控訴ヲ判決スル
ノ位置ニ在ルヲ以テ本條
ニ從ヒ言渡ス所ノ裁判ハ
終審ナリトス
〔二百六十〕重罪ハ輕罪ノ
上ニ在ルヲ以テ輕罪裁判
所ニ於テ之ヲ裁判スルコ
トヲ得ス必ス管轄違ノ言渡
ヲ爲ササル可カラズ若シ
最初豫審ヲ經スシテ檢事
直チニ裁判ニ付シタル時
ハ豫審ヲ爲サシムル爲メ
豫審判事ニ送付ス又重罪
ニ於テハ被告人ヲ自由ニ
任放シ難キヲ以テ勾引狀

第三百六十條 被告事件重罪ナル時ハ管轄違
ノ言渡ヲ爲シ若シ豫審ヲ經サル時ハ豫審判
事ニ送付スルノ言渡ヲ爲ス可シ但被告人勾
留ヲ受ケサル時ハ勾引狀ヲ發ス可シ 四八、一
二、二〇九
三二七
訴訟書類及ヒ證據物件ハ檢察官ヨリ之ヲ豫
審判事ニ送致ス可シ 三四
第三百六十一條 被告事件豫審ヲ經タル時ハ
之ヲ其裁判所ノ會議局ニ送付スルノ言渡ヲ
爲ス可シ
會議局ニ於テハ第二百五十三條第二百五十
五條ノ規則ニ從ヒ取調ヲ爲シ被告人ヲ管轄

ヲ發シテ豫審判事ニ引致セシム

〔三百六十一〕前條ニ從ヒ管轄違ノ言渡ヲ爲スト雖モ豫審判事ニ送付スルコトハサルヲ以テ會議局ニ送付ス

〔三百六十二〕第二百五十二條ニ從ヒ會議局ヨリ輕罪裁判所ニ移スノ言渡ヲ爲シタル場合ニ於テ其事件重罪ナルヲ知ル時ハ之ヲ會議局ニ送付セズ若シ之ヲ送付スルモ會議局ニ於テハ最初ノ意見ヲ執拗シテ再ヒ輕罪裁判所ニ移スニ至ルコトアル可キヲ以テナリ但會議局ニテ發見セザリシ證憑ヲ發見シタル時ハ之ヲ移スモ前ノ如ク無益ニ屬スルコトナカ

裁判所ニ送付スルノ言渡ヲ爲ス可シ

第三百六十二條 會議局ノ言渡ニ因リ事件ヲ受理シタル場合ニ於テ新ナル證憑ヲ發見スルコトナクシテ其事件ヲ重罪ナリトスル時ハ管轄違ノ言渡ヲ爲ス可シ 二五二

檢事ハ大審院ニ裁判管轄ヲ定ムルノ訴ヲ爲ス可シ 四四八

第三百六十三條 前二條ノ場合ニ於テハ會議局又ハ大審院ノ判決アルマテ檢察官ノ請求ニ因リ又ハ裁判所ノ職權ヲ以テ被告人ヲ其裁判所ノ監倉ニ留置スルノ言渡ヲ爲ス可シ

又第二百十條以下ノ規則ニ從ヒ保釋ニ付キ判決ヲ爲ス可シ

第三百六十四條 被告事件輕罪ニシテ且證憑充分ナル時ハ法律ニ從ヒ刑ノ言渡ヲ爲ス可シ

被告人禁錮ノ刑ノ言渡ヲ受ケタル時ハ當然保釋責付ヲ取消シタル者トス但上訴中更ニ保釋ヲ求ムルコトヲ得

第三百六十五條 檢察官其他訴訟關係人ハ左ノ區別ニ從ヒ輕罪裁判所ノ裁判言渡ニ對シテ控訴裁判所ニ控訴スルコトヲ得 三三八

一 檢察官ハ無罪免訴又ハ刑ノ言渡アリタル

ル可キヲ以テ前條ニ從ヒ送付ノ言渡ヲ爲ス可シ

會議局ニ移スルコトヲ知ル時ハ管轄違ノ言渡ヲ爲ス時ハ管轄裁判所ナキニ至ルヲ以テ其管轄ヲ定ムルノ訴ヲ爲ス可キ者トス

〔三百六十三〕前二條ノ場合ニ於テハ輕罪裁判所ニテ訴訟ノ關係ヲ免カレト雖モ被告人ノ逃亡ヲ恐ル、ニ因リ之ヲ留置スルコトヲ許サ、ル可カラズ又既ニ勾留ヲ受ケタル者ト雖モ保釋シテ差支ナシトスル時ハ保釋ヲ爲ス可シ

〔三百六十四〕被告ハ刑ノ言渡ヲ受ケルニ至レハ之ヲ自由ニ任放ス可カラズ故ニ一旦保釋責付ヲ取消シタル者トシテ之ヲ勾留

大可シ然レモ其言渡ニ對シテ上訴ヲ爲スニ至ル時ハ更ニ保釋ヲ許スヲ得ルナリ

〔三百六十五〕本條ハ第三百二十八條ノ規則ト大同小異ナリ惟差異トスルニハ檢察官ハ何レノ言渡ニ對シテモ控訴スルヲ許ス若シ輕罪裁判所ニ於テ違警罪トシテ終審ノ言渡ヲ爲スモ檢事ニ於テ輕罪トスルニ非サレハ控訴スルヲ得ス又被告人ハ違警罪ニ付テノ言渡ハ終審ナルヲ以テ控訴スルヲ得サル者トス

〔三百六十六〕關席裁判ニ付テハ故障ヲ爲スヲ要スルト雖モコト變則ヲ設ケ以テ故障ヲ爲サスシテ直チニ控訴ヲ爲スヲ許ス

是レ故障ヲ爲シ然レ後其判決ニ對シ控訴ヲ爲スハ頗ル迂遠ニ屬スレハナリ

〔三百六十七〕公訴ノ裁判ニ對スル控訴ニ付テハ本條ノ規則ニ從フト雖モ私訴ノ言渡ニ付テノ控訴アリタル時ハ勾留中ノ被告人ヲ控訴裁判所ノ監倉ニ移サス代人ヲ以テ答弁ヲ爲サシムルノミ

時但違警罪事件トシテ言渡アリタル場合ニ於テハ其事件ヲ輕罪ナリトスル時三五八以下

二被告人ハ違警罪ニ付テノ言渡ヲ除クノ外刑ノ言渡ヲ受ケタル時三五九

三民事原告人被告人及ヒ民事擔當人ハ要償ニ付テノ言渡民事上始審裁判所ノ終審ノ金額ヲ超過シタル時

四檢察官其他訴訟關係人ハ管轄違越權擬律ノ錯誤又ハ無效ノ記載アル規則ニ背キタル時

第三百六十六條 控訴ハ裁判言渡アリタルヨ

五日內ニ之ヲ爲スヲ得

關席裁判ヲ受ケタル者ハ刑ノ期滿免除ニ至ルマテ何時ニテモ故障ヲ爲サスシテ直チニ控訴ヲ爲スヲ得但第三百五十六條ノ場合ニ於テハ五日內ニ之ヲ爲ス可シ三三九

第三百六十七條 公訴ノ裁判言渡ニ對シ控訴アリタル場合ニ於テ被告人勾留ヲ受ケタル時ハ檢察官ヨリ之ヲ控訴裁判所ノ監倉ニ移ス可シ

第三百六十八條 第三百三十九條ヨリ第三百四十二條マテ及ヒ第三百四十四條ノ規則ハ此章ニモ亦之ヲ適用ス

〔二百六十九〕控訴裁判所ニ於テ控訴ノ審理中被告事件重罪ナルヲ知リタル時ハ會議局ニテ更ニ取調ヲ爲シタル後管轄重罪裁判所ニ移ス可シ

本條ノ處分ハ檢事ノ控訴又ハ檢事長ノ附帶ノ控訴アリタル時ニ限リ施ス可キ者ニシテ被告人ノ控訴シタル時ハ假令其事件ヲ重罪ナリトスルモ之ヲ重罪裁判所ニ移ストテ得ス

第二百四十四條第二項ニ從ヒ相當ノ言渡ヲ爲スニ止マル可シ

〔二百七十一〕上告ノ手續原由等ハ第四百十條以下ニ詳ナリ

第三百六十九條 輕罪裁判所檢事ノ控訴又ハ檢事長ノ附帶ノ控訴アリタル場合ニ於テ被告事件ヲ重罪ナリトスル時ハ第二百五十五條ノ規則ニ從ヒ會議局ニ於テ重罪裁判所ニ移スノ言渡ヲ爲ス可シ

第三百七十條 控訴ノ關席裁判及ヒ其故障ニ付テハ始審ノ關席裁判及ヒ其故障ニ付キ定メタル規則ニ從フ

第三百七十一條 檢察官其他訴訟關係人ハ輕罪裁判所ノ終審ノ對審裁判言渡及ヒ控訴裁判所ノ對審裁判言渡ニ對シ上告ヲ爲ストテ得四一〇以下

第四章 重罪公判

第三百七十二條 重罪裁判所ニ於テハ左ノ條件ニ因テ公訴ヲ受理ス

- 一 豫審判事又ハ輕罪裁判所會議局ノ判決ニ因リ其事件ヲ移スノ言渡二二七、二五二
- 二 控訴裁判所又ハ大審院ノ判決ニ因リ其事件ヲ移スノ言渡三六九、四二八

第三百七十三條 重罪裁判所ニ移スノ言渡確定シタル時ハ左ノ區別ニ從ヒ公訴狀ヲ作ル可シ二六〇

控訴裁判所ニ於テ重罪裁判所ヲ開ク時ハ檢事長公訴狀ヲ作ル可シ七四

〔二百七十三〕重罪ニ付テハ檢察官必ス公訴狀ヲ作リ以テ起訴ノ主旨ヲ弁明セサル可カラズ而シテ該狀ヲ作ルハ檢事長ノ任ナリトス然レモ始審裁判所ニ於テ重罪裁判所ヲ開ク時ハ檢事長ヨリ其裁判所檢察官ニ命ジ之ヲ作ラシム

ルモ妨ケナシ

〔二百七十四〕公訴狀ニ記載ス可キ條件ハ本條之ヲ列記スルト雖此他詳細ニ涉ルハ固ヨリ妨ケナシ惟本條ハ闕ク可カラサル者ノミヲ指示スルノミ

〔二百七十五〕重罪裁判所ニ移スノ言渡アリタルニ

始審裁判所ニ於テ重罪裁判所ヲ開ク時ハ檢事長公訴狀ヲ作り又ハ重罪裁判所檢察官ノ職務ヲ行フ可キ檢事ヲシテ之ヲ作ラシム可シ
七四

第三百七十四條 公訴狀ニハ左ノ條件ヲ記載ス可シ

- 一 被告事件ノ始末及ヒ加重減輕ノ模様
- 二 被告人ノ氏名年齢身分職業住所出生ノ地
- 三 豫審ニ於テ集取シタル原被ノ證據
- 四 罪名法律ノ正條及ヒ重罪裁判所ニ移スノ言渡ノ概畧

第三百七十五條 公訴狀ニハ重罪裁判所ニ移

ヨリ公訴狀ヲ作ル者ナルヲ以テ言渡書ニ記載セサル事件又ハ被告人ヲ記載ス可カラス其以外ノ事件又ハ被告人ニ付テハ未ダ正當ノ起訴アラサルヲ以テナリ

スノ言渡書ニ記載シタルヨリ以外ノ事件又ハ被告人ヲ記載ス可カラス
第三百七十六條 重罪裁判所ニ移スノ言渡書ニ同一ノ被告人ニ對シ附帶ニ非サル數箇ノ重罪ヲ記載シタル場合ニ於テ檢察官ハ各別ニ公訴狀ヲ作りタル上ニテ各別ニ辯論ヲ爲ス
トテ裁判所長ニ請求スルヲ得
裁判所長ハ同一ノ公訴狀ニ附帶ニ非サル數箇ノ重罪ヲ記載シタル場合ニ於テ其職權ヲ以テ各別ニ辯論ヲ爲サシムルヲ得又數箇ノ公訴狀ニ記載シタル事件ニ付キ同時ニ辯論ヲ爲サシムルヲ得

ルモ妨ケナシ

〔三百七十四〕公訴狀ニ記載ス可キ條件ハ本條之ヲ列記スルト雖モ此他詳細ニ涉ルハ固ヨリ妨ケナシ惟本條ハ關シ可カラサル者ノミヲ指示スルノミ

〔三百七十五〕重罪裁判所ニ移スノ言渡アリタルコ

始審裁判所ニ於テ重罪裁判所ヲ開ク時ハ檢事長公訴狀ヲ作り又ハ重罪裁判所檢察官ノ職務ヲ行フ可キ檢事ヲシテ之ヲ作ラシム可シ 七四

第三百七十四條 公訴狀ニハ左ノ條件ヲ記載ス可シ

- 一 被告事件ノ始末及ヒ加重減輕ノ模様
- 二 被告人ノ氏名年齢身分職業住所出生ノ地
- 三 豫審ニ於テ集取シタル原被ノ證據
- 四 罪名法律ノ正條及ヒ重罪裁判所ニ移スノ言渡ノ概畧

第三百七十五條 公訴狀ニハ重罪裁判所ニ移

スノ言渡書ニ記載シタルヨリ以外ノ事件又ハ被告人ヲ記載ス可カラス

第三百七十六條 重罪裁判所ニ移スノ言渡書ニ同一ノ被告人ニ對シ附帶ニ非サル數箇ノ重罪ヲ記載シタル場合ニ於テ檢察官ハ各別ニ公訴狀ヲ作りタル上ニテ各別ニ辯論ヲ爲スコトヲ裁判所長ニ請求スルヲ得

裁判所長ハ同一ノ公訴狀ニ附帶ニ非サル數箇ノ重罪ヲ記載シタル場合ニ於テ其職權ヲ以テ各別ニ辯論ヲ爲サシムルヲ得又數箇ノ公訴狀ニ記載シタル事件ニ付キ同時ニ辯論ヲ爲サシムルヲ得

ヨリ公訴狀ヲ作ル者ナルヲ以テ言渡書ニ記載セサル事件又ハ被告人ヲ記載ス可カラス其以外ノ事件又ハ被告人ニ付テハ未ダ正當ノ起訴アラサルヲ以テナリ

〔三百七十六〕附帶ノ犯罪ニ付テハ同時ニ辯論ヲ爲ス時ハ大ニ事實ヲ分明ナラシムルノ益アリト雖モ彼此關係ナキ數罪ニ付テハ各別ニ取調フルヲ便宜トスルコトアリ故ニ本條ニ於テハ檢察官ノ請求ニ因リ又ハ裁判所長ノ職權ヲ以テ各別ニ辯論ヲ爲サシムルヲ許ス

〔二百七十七〕被告人ヲシテ弁護ヲ爲スノ猶豫アラシムル爲メ公訴狀ノ謄本ヲ送達ス若シ被告人數名アル時ハ一名毎ニ一通ヲ下付ス

〔二百七十八〕本條ハ公判前ノ處分ヲ定ム其被告人ヲ訊問スル者ハ其辯護ノ如何ナキヤヲ知ランカ爲メナリ
輕罪以下ノ事件ニ付テハ辯護人アルコトヲ必要トセズ重罪ハ之ニ異ナリ其罪至大ナルヲ以テ大ニ辯護ノ路ヲ開キ被告人自ラ辯護人ヲ選任セザル時ハ官費ヲ以テ之ヲ命ス

第三百七十七條 書記ハ被告人出廷ヨリ少ク

トモ五日目前ニ公訴狀ノ謄本ヲ被告人ニ送達ス可シ

被告人數名アル時ハ各別ニ其謄本ヲ送達ス可シ

第三百七十八條 重罪裁判所長又ハ其委任ヲ

受ケタル陪席判事ハ公訴狀ノ送達アリタル

ヨリ二十四時ノ後書記ノ立會ニ依リ被告事

件ニ付キ被告人ヲ訊問シ且辯護人ヲ選任シ

タリヤ否ヲ問フ可シ 二六六

若シ辯護人ヲ選任セザル時ハ裁判所長ノ職

權ヲ以テ其裁判所所屬ノ代官人中ヨリ之ヲ

辯護人ヲ選任スト雖正當ニ公判ニ取掛ラス其被告人ニ接シ書類ヲ檢閲シテ公訴ノ主旨ヲ知リ以テ辯護ノ豫備ヲ爲サシムル可シ否ヲサレハ之ヲ選任スルノ効アラサルニ至ラン故ニ選任ノ後三日ヲ過クルニ非サレハ辯論ノ席ヲ開カス

〔二百七十九〕本條ハ辯論中ニ至リ辯護人正當ノ差支ヲ生シ又ハ被告人ヨリ之ヲ改選ス可キ事由例ハ民事原告人ヨリ贈物ヲ受ケ因テ故サラニ辯護ヲ盡サ、ル等ノコトヲ申立ル場合ニ於テ更ニ辯護人ヲ選任ス可キヲ定ム

選任ス可シ 三八一

被告人及ヒ代官人ヨリ異議ノ申立ナキ時ハ

代官人一名ヲシテ被告人數名ノ辯護ヲ爲サ

シムルコトヲ得

辯護人ヲ選任シタルヨリ三日ノ後ニ非サレ

ハ辯論ニ取掛ルコトヲ得ス

第三百七十九條 辯護人差支アル時若クハ被

告人ヨリ之ヲ改選ス可キ正當ノ事由ヲ申立

タル時被告人自ラ辯護人ヲ選任スルニ非サ

レハ前條ノ規則ニ從ヒ裁判所長ヨリ之ヲ選

任ス可シ但辯論人ヲ改選シタル時ハ三日間

辯論ヲ停止ス可シ

〔二百八十〕公判前被告人
ヲ訊問スルコトハ必ス書記
ノ立會ヲ要ス書記ハ調書
ヲ作リ訊問答弁ヲ記載シ
且第三百七十八條ニ從ヒ
辯護人ノ選任アリタルト
キ証明ス可シ
弁論始マリタル後前條ニ
從ヒ弁護人改選ノコトアル
時ハ特ニ調書ヲ作ルヲ要
セス公判始末書中ニ記入
ス可シ

第三百八十條 書記ハ第三百七十八條ノ場合
ニ於テ訊問ノ調書ヲ作り辯護人ヲ選任スル
ニ付キ其式ヲ履行シタルコトヲ記載ス可シ
辯論中辯護人ヲ改選シ及ヒ辯論ヲ停止シタ
ル時ハ公判始末書ニ其旨ヲ記載ス可シ

第三百八十一條 辯護人ナクシテ辯論ヲ爲シ
タル時ハ刑ノ言渡ノ效ナカル可シ

第三百七十七條ヨリ第三百七十九條マテノ
規則ニ背キタルコトアリト雖モ辯論ニ取掛ル
前ニ非サレハ被告人ヨリ異議ノ申立ヲ爲ス
コトヲ得ス

第三百八十二條 辯護人ハ第三百七十八條ノ

サルヲ以テ其言渡ノ效ヲ
存ス

〔二百八十二〕被告人ニ於
テ夙ニ自ラ弁護人ヲ選任
シタルト雖モ自由ニ之ト
接スルコトヲ得ス第三百七
十八條ニ從ヒ一應ノ訊問
アリタル後ニ非サレハ相
見ルコトヲ得サルナリ

豫審ニ於テ重罪裁判所ニ
移スノ言渡アリタルヨリ
重罪公判ノ終ルマテハ辨
護人ノ外被告人ニ於テ他
人ト接見スルコトヲ許サス
親屬故舊ノ接見ヲ欲スル
者ハ必ス裁判所長ノ認可
ヲ經可シ是レ至重至大ノ
罪其身ニ歸スルコト以外
人ト通謀シテ逃亡ヲ企テ
又ハ証憑ヲ湮滅スルノ恐
アレハナリ

〔二百八十三〕原告証人ハ

處分アリタル後被告人ト接見スルコトヲ得
又書記局ニ於テ一切ノ訴訟書類ヲ閱讀シ且
之ヲ抄寫スルコトヲ得

辯護人ヲ除クノ外何人ト雖モ重罪裁判所ニ
移スノ言渡アリタルヨリ裁判言渡アルマテ
被告人ト接見スルコトヲ得ス但被告人現ニ勾
留ヲ受クル地ノ裁判所長ノ允許ヲ得タル時
ハ此限ニ在ラス

第三百八十三條 檢察官及ヒ民事原告人ノ請
求ニ因リ呼出シタル證人ノ氏名目錄ハ開廷
ヨリ一日前之ヲ被告人ニ送達ス可シ

被告人ノ請求ニ因リ呼出シタル證人ノ氏名

被告人ニ於テ之ヲ知ラサ
ル可カラス被告証人ハ亦
原告人ニ於テ之ヲ知ルコ
ト要ス故ニ各自証人ノ氏
名目録ヲ送達ス是レ各弁
論ヲ爲スニ付キ有用ナル
者トス

〔二百八十四〕証人ノ氏名
ヲ豫メ通知セサルハ前條
ノ規則ニ背クヲ以テ其陳
述ヲ聽クニハ宣誓ヲ用ヒ
ス止テ事實參考ノ爲メノ
ミナリトス然レモ對手ハ
ニ於テ差支ナシトスル時
ハ正當ノ証人ト爲ストテ
得可シ

〔二百八十六〕重罪裁判所
ハ常ニ之ヲ開カス毎年四

目録ハ同上ノ期限内ニ書記ヨリ之ヲ檢察官
ニ送致シ民事ニ付キ呼出シタル証人ノ氏名
目録ハ之ヲ民事原告人ニ送達ス可シ

第三百八十四條 前條ノ規則ニ從ヒ豫メ氏名
ヲ通知セサル證人ノ陳述ハ事實參考ノ爲メ
ニ非サレハ之ヲ聽クヲ得ス但對手人ヨリ
異議ナキヲ申立タル時ハ證人トシテ其陳
述ヲ聽クヲ得

第三百八十五條 證人ハ呼出狀ノ送達ト出廷
トノ間少クトモ二日ノ猶豫ヲ以テ之ヲ呼出
ス可シ

第三百八十六條 裁判長ハ開廳ノ日ニ當リ公

回ニケ月毎ニ開廳ス其開
廳ノ日ニハ裁判長陪席判
事檢察官書記皆公廷ニ出
テタル上ニテ裁判長開廳
ノ旨ヲ陳述ス即チ開廳式
ニシテ訴訟ノ本案ヲ審理
スルコトヲ故ニ被告人ヲ
呼出ス可カラズ

〔二百八十七〕訴訟事件繁
難ニシテ一日中ニ弁論ヲ
終リ難シトスル時ハ豫備
陪席判事ヲ命スルコトヲ許
ス是レ前日弁論ニ立會ヒ
タル判事ニ差支テ生シ翌
日出廷スルコト能ハサルノ
場合ニ備フル爲メナリ蓋
シ一事件ノ弁論中判事其
人ヲ變スル時ハ新タニ其
事件ニ干預スル判事前ノ
弁論ヲ識了セサルヲ以テ
心証ヲ資ルニ因シマサル
ヲ得ス因テ最初ニ復シ更

廷ニ於テ陪席判事檢察官ノ面前ニテ開廳ス
可キコトヲ陳述ス可シ但被告人ヲ呼出ス可カ
ラス
第三百八十七條 裁判長辯論二日以上ニ涉ル
可シト思料シタル時ハ重罪裁判所々在ノ地
ノ裁判所判事一名ヲ以テ豫備陪席判事ト爲
スヲ得

第三百八十八條 裁判官檢察官及ヒ書記各其
席ニ就キタル後即時ニ訊問及ヒ辯論ニ取掛
ル可シ
裁判長ハ先ツ被告人ノ氏名年齢身分職業住
所出生ノ地ヲ問フ可シ

コ弁論ヲ爲ス可キ者トス
此不都合ヲ避ケンカ爲メ
豫備判事ヲ命スルコトヲ許
スナリ

〔二百八十八〕本條以下ハ
本案ノ公判手續ヲ定ム

〔二百八十九〕証人出廷シ
タルヤ否ヲ檢スル爲メ書
記ヲシテ其氏名ヲ呼立テ
シム若シ呼立ニ應スル時
ハ其扣席ニ退カシメ陳述
ヲ聽ク可キ時ニ於テ公廷
ニ呼入ル、ナリ其退席セ
シムル者ハ証人ヲシテ互
ニ其陳述ヲ聽クコトヲ得セ
シムル時ハ必ス彼此雷同
スルノ弊ヲ生ス可キニ由
ル

〔二百九十一〕輕小ナル罪
ニ付テハ被告人ノ白狀ノ
ミニ依リ裁判スルモ妨ケ
ナシトスルモ重大ナル事

若シ其答辭ト豫審中ノ陳述ト齟齬アリト雖
モ公訴狀ニ記載シタル被告人ニ相違ナキ時
ハ引續キ辯論ヲ爲ス可シ

第三百八十九條 書記ハ呼出シタル證人ノ氏
名ヲ呼立ツ可シ

其呼立ニ應シタル證人ハ扣席ニ退カシメ陳
述ヲ爲スニ當リ順次ニ之ヲ呼入ル可シハ八

第三百九十條 裁判長ハ書記ヲシテ公訴狀ヲ
朗讀セシムルニ付キ注意シテ聽クキコトヲ被
告人ニ告知ス可シ

第三百九十一條 裁判長ハ書記前條ノ朗讀ヲ
終リタル後被告人ヲ訊問ス可シ

件ニ付テハ鄭重ヲ主トシ
白狀アリト雖モ仍ホ他ノ
証憑ヲ取調フ可キ者トス

〔二百九十二〕被告人ヲ訊
問シタル後一切ノ証憑ヲ
差出シ一々辯解ヲ爲サシ
メ且反對ノ証憑即チ無罪
タルノ証若クハ罪ヲ輕ク
ス可キノ証アレハ之ヲ差
出サシム飽マテ被告人ヲ
保護セシムコトヲ欲シテナリ

〔二百九十三〕原告証人ノ
陳述ニ付テハ被告人必ス
其當ヲ得サルコトヲ弁スル
ヲ欲スルヲ以テ其意見ヲ
問フナリ

被告人豫審中ニ白狀シタル事件ヲ確認セス
又ハ之ヲ取消サントスル時ハ其事由ヲ辯明
セシム可シ

被告人ノ白狀アリト雖モ仍ホ其取調ヲ爲サ
ル可カラス 三二九

第三百九十二條 裁判長ハ前條ノ訊問ヲ終リ
タル後証憑ヲ差出スニ從ヒ其証憑ニ付キ辯
解ヲ爲シ且自己ノ利益ト爲ル可キ反証ヲ差
出スヲ得可キコトヲ被告人ニ告知ス可シ

第三百九十三條 裁判長ハ原告証人陳述ヲ終
リタル毎ニ被告人ニ意見アルヤ否ヲ問フ可
シ

〔二百九十四〕証人ハ更ニ之ヲ訊問シ又ハ他ノ証人ト對質セシムルコトアルヲ以テ陳述後ト雖モ直チニ退廷セシメス必ズ裁判長ノ允許ヲ要ス
証人ト証人ト對質セシムルハ其陳述各相異ナリテ孰レカ是ナルヤ否ヲ知リ難キ場合ニ於テス

〔二百九十五〕被告人ノ面前ニ於テハ証人愛憎畏懼ノ念禁スルコト能ハサルヨリ充分ニ陳述シ難キコトアリ此場合ニ於テハ已ムコトヲ得ス被告人ヲ公廷ヨリ退カシメ其間ニ陳述セシ

第三百九十四條 証人ハ陳述ヲ爲シタル後其

扣席ニ留ル可シ但裁判長ヨリ退廷ノ允許ヲ得タル時ハ此限ニ在ラス

陪席判事檢察官被告人及ヒ民事原告人ハ更ニ證人ヲ訊問スルコト又證人ヲシテ他ノ證人ト對質セシムルコトヲ請求スルヲ得 一八四

裁判長ハ職權ヲ以テ前項ノ處分ヲ爲スコトヲ得

第三百九十五條 裁判長ハ證人愛憎畏懼ノ念ヲ生シ被告人ノ面前ニ於テ充分ナル陳述ヲ爲スコトヲ得サル可シト思料シタル時ハ檢察官民事原告人ノ請求ニ因リ又ハ職權ヲ以テ

然レモ公判ハ固ト口陳弁論ヲ主旨トスルヲ以テ其陳述後更ニ被告人ヲ呼入レ裁判長ヨリ証人ノ陳述シタル所云々ナリト告知ス可シ

〔二百九十七〕公廷弁論ノ半ニ至リ本案ニ附帶スル他ノ犯罪ヲ發見スルコトアリ又加重減輕ノ摸樣若クハ未遂罪トシテ訴アリタ

其證人ノ陳述中被告人ヲ退席セシムルコトヲ得

裁判長ハ證人陳述ヲ終リタル後再ヒ被告人ヲ公廷ニ呼入レ其陳述シタル條件ヲ告知シ且被告人ニ意見アル時ハ之ヲ申立シム可シ 三九三

第三百九十六條 裁判長ハ第三百條ニ定メタル手續ノ終リタル後公訴ニ付キ辯論ノ終結シタルコトヲ言渡ス可シ

第三百九十七條 檢察官及ヒ被告人ハ辯論中ニ發見シタル條件ニ付キ豫審ヲ求ムルコトヲ得裁判所ニ於テ其請求ヲ認可シタル時ハ重